

源氏物語

乙女

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ

（例）雁^{かり}なく

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）式部—大輔^{だゆう}

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと

行数）

（例）「# 風 + （火 / （火 + 火）」、第³水準 1-94-8】

「#地から3字上げ」雁^{かり}なくやつらをはなれてただ一つ初恋

「#地から3字上げ」をする少年のこと （晶子）

春になって女院の御一周年が過ぎ、官人が喪服を脱いだのに続いて四月の更衣期になったから、はなやかな空気の満ち渡った初夏で

あつたが、前齋院はなお寂しくつれづれな日を送っておいでになつた。庭の桂かつらの木の若葉がたてるにおいにも若い女房たちは、宮の御在職中の加茂の院の祭りのころのことを恋しがつた。源氏から、神の御襖みそぎの日もただ今はお静かでしょうという挨拶あいさつを持った使いが来た。

「#ここから1字下げ」

今日こんなことを思いました。

「#ここから2字下げ」

かけきやは川瀬の波もたちかへり君が御襖みそぎの藤ふじのやつれを

「#ここで字下げ終わり」

紫の紙に書いた正しい立文たてぶみの形の手紙が藤の花の枝につけられてあつた。齋院はものの少し身にしむような日でありになって、返事をお書きになった。

「#ここから2字下げ」

藤衣ふぢきしは昨日きのふと思ふまに今日けふはみそぎの瀬にかはる世を

「#ここから1字下げ」

はかないものと思われます。

「#ここで字下げ終わり」

とだけ書かれてある手紙を、例のように源氏は熱心にながめていた。齋院が父宮の喪の済んでお服直しをされる時も、源氏からたいした贈り物が来た。女王にょおうはそれをお受けになることは醜いことであ

るといふように言っておいでになつたが、求婚者としての言葉が添えられていることであれば辞退もできるが、これまで長い間何かの場合に公然の進物を送り続けた源氏であつて、親切からすることであるから返却のしようがないように言つて女房たちは困つていた。女五にょごの宮みやのほうへもこんなふうにして始終物質的に御補助をする源氏であつたから、宮は深く源氏を愛しておいでになつた。

「源氏の君というのと、いつも美しい少年が思われるのだけれど、こんなに大人らしい親切を見せてくださる。顔がきれいな上に心までも並みの人に違つてでき上がっているのだね」

とおほめになるのを、若い女房らは笑つていた。西の女王とお逢いになる時には、

「源氏の大臣から熱心に結婚が申し込まれていらつしやるのだったら、いいじゃありませんかね、今はじめての話ではなし、ずっと以前からのことなのですからね、お亡なくなりになつた宮様もあなたが齋院におなりになつた時に、結婚がせられなくなつたことで失望をなすつてね、以前宮様がそれを実行しようとなすつた時に、あなたの気の進まなかつたことで、話をそのままにしておいたのを御後悔してお話しになることがよくありましたよ。けれどもね、宮様がそうお思い立ちになつたところは左大臣家の奥さんがいられたのですからね、そうしては三の宮がお気の毒だと思召して第二の結婚をこちらでおさせにはなりにくかつたのですよ。あなたと従妹いとこのその奥様が亡くなられたのだし、そうなすつてもいいのにと私は思うし、一方ではまた新しく熱心にお申し込みがあるというのは、やはり前生の約束事だろうと思う」

などと古めかしい御勧告をあそばすのを、女王は苦笑して聞いて

おいでになった。

「お父様からもそんな強情者ウツクシに思われてきた私なのですから、今さら源氏の大臣の声名が高いからと申して結婚をいたしますのは恥ずかしいことだと思います」

こんなふうにも思いもよらぬように言っておいでになったから、宮もしまいにはお勧めにならなかった。邸やしきの人は上から下まで皆が皆そうなるのを望んでいることを女王は知って警戒しておいでになったが、源氏自身は至誠で女王を動かさしめる日は待っているが、しいて力で結婚を遂げるようなことをしたくないと女王の感情を尊重していた。

故太政大臣家で生まれた源氏の若君の元服の式を上げる用意がされていて、源氏は二条の院で行なわせたく思うのであったが、祖母の宮が御覧になりたく思召すのがもつともで、そうしたことはお気の毒に思われて、やはり今までお育てになった宮の御殿でその式をした。右大将を始め伯父君おじぎみたちが皆りっぱな顯官になっていて勢力のある人たちであったから、母方の親戚からの祝品その他の贈り物もおびただしかつた。かねてから京じゅうの騒ぎになるほど華美な祝い事になったのである。初めから四位にしようと源氏は思ってもいたことであつたし、世間もそう見ていたが、まだきわめて小さい子を、何事も自分の意志のとおりになる時代にそんな取り計らいをするのは、俗人のすることであるという気がしてきたので、源氏は長男に四位を与えることはやめて、六位の浅葱あさぎの袍ほろを着せてしまった。大宮おおみやが言語道断のことのようにこれをお歎きになったことはお道理でお気の毒に思われた。源氏は宮に御面会をしてその問題でお話をした。

「ただ今わざわざ低い位に置いてみる必要もないようですが、私は考えていることがございまして、大学の課程を踏ませようと思うのでございます。ここ二、三年をまだ元服以前とみなしてよかろうと存じます。朝廷の御用の勤まる人間になりますれば自然に出世はして行くことと存じます。私は宮中に育ちまして、世間知らずに御前で教養されたものでございますから、陛下おみずから師になつてくださつたのですが、やはり刻苦精励を体験いたしませんでしたから、詩を作りますことにも素養の不足を感じたり、音楽をいたしますにも音^ね足らずな気持ちを感じたりいたしました。つまらぬ親にまさつた子は自然に任せておきましたはできようのないことかと思ひます。まして孫以下になりましたなら、どうなるかと不安に思われてなりませんことから、そう計らうのでございます。貴族の子に生まれまして、官爵が思いのままに進んでまいり、自家の勢力に慢心した青年になりましたは、学問などに身を苦しめたりいたしますことはきつとばかばかしいことに思われるでしょう。遊び事の中に浸っていないながら、位だけはずんずん上がるようなことがあります、家に権勢のあります間は、心で嘲笑^{ちやうしやう}はしながらも追従をして機嫌^{きげん}を人がそこねまいとしてくれますから、ちよつと見はそれなりつぱにも見えましようが、家の権力が失墜するとか、保護者に死に別れるとかしました際に、人から輕蔑^{けいべつ}されましても、なんらみずから恃^{たの}むところのないみじめな者になります。やはり学問が第一でございます。日本魂^{やまとたましい}をいかに活^いかせて使うかは学問の根底があつてできることと存じます。ただ今目前に六位しか持たないのを見まして、たよりない気はいたしましても、将来の国家の柱石たる教養を受けておきますほうが、死後までも私の安心できることかと存じます。

ただ今のところは、とにかく私がいるのですから、窮迫した大学生と指さす者もなからうと思います」

と源氏が言うのを、聞いておいでになった宮は歎息をあそばしながら、

「ごもつともなお話だと思えますがね、右大将などもあまりに変わったお好みだと不審がりますし、子供もね、残念なようで、大将や左衛門督などの息子の、自分よりも低いもののように見下しておりました者の位階が皆上へ上へと進んで行きますのに、自分は浅葱の袍を着ていねばならないのをつらく思うふうですからね。私はそれがかわいそうなのでした」

とお言いになる。

「大人らしく父を恨んでいるのでございますね。どうでしょう、こんな小さい人が」

源氏はかわいくてならぬと思うふうで子を見ていた。

「学問などをいたしまして、ものの理解のできるようになりましたら、その恨みも自然になくなってまいるでしょう」

と言っていた。

若君の師から字をつけてもらう式は東の院ですることになって、東の院に式場としての設けがされた。高官たちは皆この式を珍しがつて参会する者が多かった。博士たちが晴れがましがって気おくれもしそうである。

「遠慮をせずきまに定りどおりに厳格にやってください」

と源氏から言われたので、しいて冷静な態度を見せて、借り物の衣裳の身に合わぬのも恥じずに、顔つき、声づかいに学者の衒気を見せて、座にずっと並んでついたのははなはだ異様であった。若い

役人などは笑いがおさえられないふうである。しかもこれは笑いやすいつうではない、落ち着いた人が酒瓶しゅへいの役に選ばれてあつたのである。すべてが風変わりである。右大将、民部卿などが丁寧ていねいに杯を勧めるのを見ても作法に合わないとい叱しかり散らす、

「御接待役が多すぎてよろしくない。あなたがたは今日の学界における私を知らずに朝廷へお仕えになりますか。まちがったことじゃ」

などと言うのを聞いてたまらず笑い出す人があると、

「鳴りが高い、おやめなさい。はなはだ礼に欠けた方だ、座をお退ひきなさい」

などと威おどす。大学出身の高官たちは得意そうに微笑をして、源氏の教育方針のよいことに敬服したふうを見せているのであつた。ちよつと彼らの目の前で話をして博士らは叱しかる、無礼だと言って何でもないこともとがめる。やかましく勝手気ままなことを言い放つている学者たちの顔は、夜になって灯ひがともったころからいっそう滑稽こっけいなものに見えた。まったく異様な会である。源氏は、

「自分のような規律に馴なれないだらしのない者は粗相をして叱しかりまわされるであろうから」

と言って、御簾みすの中に隠れて見ていた。式場の席が足りないために、あとから来て帰って行こうとする大学生のあるのを聞いて、源氏はその人々を別に釣殿つりどののほうでもてなした。贈り物もした。式が終わって退出しようとする博士と詩人をまた源氏とはどめて詩を作ることにした。高官や殿上役人もそのほうの才のある人は皆残したのである。博士たちは律の詩、源氏その他の人は絶句を作るのであつた。おもしろい題を文章博士もんじょうはかせが選んだ。短夜のころであつたから、

夜がすっかり明けてから詩は講ぜられた。左中弁さちゅうべんが講師の役をしたのである。きれいな男の左中弁が重々しい神さびた調子で詩を読み上げるのが感じよく思われた。この人はことに深い学殖のある博士なのである。こうした大貴族の家に生まれて、栄華に戯れてもいるはずの人が蛭雪けいせつの苦を積んで学問を志すということをしていろいろの譬たとえを借りて讚美さんびした作は句ごとにおもしろかった。支那しなの人に見せて批評をさせてみたいほどの詩ばかりであると言われた。源氏のはむろん傑作であつた。子を思う親の情がよく現われているといつて、列席者は皆涙をこぼしながら誦ずした。

それに続いてまた入学の式もあつた。東の院の中に若君の勉強部屋が設けられて、まじめな学者を一人つけて源氏は学ばせた。若君は大宮の所へもあまり行かないのであつた。夜も昼もおかわいがりにはかりなつて、いつまでも幼児であるように宮はお扱いになるのであつたから、そこでは勉強ができないであろうと源氏が認めて、学問所を別にして若君を入れたわけである。月に三度だけは大宮を御訪問申してよいと源氏は定めた。じつと学問所にこもつてばかりいる苦しさには、若君は父君を恨めしく思った。ひどい、こんなに苦しまないでも出世をして世の中に重んぜられる人がないわけはなからうと考えるのであるが、一体がまじめな性格であつて、輕佻けいちやうなところのない少年であつたから、よく忍んで、どうかして早く読まねばならぬ本だけは皆読んで、人並みに社会へ出て立身の道を進みたいと一所懸命になつたから、四、五か月のうちに史記などという書物は読んでしまった。もう大学の試験を受けさせてもよいと源氏は思つて、その前に自身の前で一度学力をためすことにした。例の伯父おの右大将、式部一大輔だゆう、左中弁などだけを招いて、家庭教師の大

内記に命じて史記の中の解釈のむずかしいところの、寮試の問題に出されそうな所々を若君に読ますのであったが、若君は非常に明瞭めいりょうに難解なところを幾通りにも読んで意味を説明することができた。師の爪つめじるしは一か所もつける必要のないのを見て、人々は若君に学問をする天分の豊かに備わっていることを喜んだ。伯父の大將はまして感動して、

「父の大臣が生きていられたら」

と言って泣いていた。源氏も冷静なふうを作ろうとはしなかった。

「世間の親が愛におぼれて、子に対しては正当な判断もできなくなっているなどと私は見たこともありますが、自分のことになってみると、それは子が大人になっただけ親はぼけていくのでやむをえな
いことだと解釈ができます。私などはまだたいした年ではないがやはりそうなりますね」

などと言いながら涙をふいているのを見る若君の教師はうれしかった。名誉なことになったと思っ
ているのである。大將が杯をさすともう深く酔いながら畏かしこまっている顔つきは気の毒なように瘦やせていた。変人と見られている男で、学問相当な地位も得られず、後援者もなく貧しかったこの人を、源氏は見るところがあつてわが子の教師に招いたのである。たちまちに源氏の庇ひ護ごを受ける身の上になつて、若君のために生まれ変わったような幸福を得ているのである。将来はましてこの今の若君に重用されて行くことであらうと思われ
た。

大学へ若君が寮試を受けに行く日は、寮門に頭官の車が無数に止まった。あらゆる廷臣が今日はここへ来ることかと思われる列席者

の派手はでに並んだ所へ、人の介添えを受けながらはいつて来た若君は、大学生の仲間とは見ることもできないような品のよい美しい顔をしていた。例の貧乏学生の多い席末の座につかねばならないことで、若君が迷惑めいわくそうな顔かほをしているのももつとも思われた。ここでもまた叱しかるもの威嚇いかくするものがあつて不愉快であつたが、若君は少しも臆おくせずに進んで出て試験を受けた。昔学問の盛んだつた時代にも劣らず大学の栄えるところで、上中下の各階級から学生が出ていたから、いよいよ学問と見識の備わつた人が輩出するばかりであつた。文人もんじんと擬生ぎしょうの試験も若君は成績よく通つたため、師も弟子でしもいつそう励みが出て学業を熱心にするようになった。源氏の家でも始終詩会が催はかされなどして、博士はかせや文士の得意な時代が来たように見えた。何の道でも優秀な者の認められないのはないのが当代であつた。

皇后が冊立さくりつされることになつていたが、齋宮さいくうの女御にょぎは母君から委託された方であるから、自分としてはぜひこの方を推薦しなければならぬという源氏の態度であつた。御母后も内親王でいられたあとへ、またも王氏の后きさきの立つことは一方に偏したことでであると批難を加える者もあつた。そうした人たちは弘徽殿こうきでんの女御にょぎがだれよりも早く後宮こうきうにはいつた人であるから、その人の后きさきに昇格されるのが当然であるとも言つのである。双方に味方が現われて、だれもどうなることかと不安がつていた。兵部卿ひょうぶきやうの宮と申した方は今は式部卿しきぶきやうになつておいでになつて、当代の御外戚として重んぜられておいでになる宮の姫君も、予定どおりに後宮へはいつて、齋宮の女御と同じ王女御で侍しているのであるが、他人でない濃い御親戚関係もあることであつて、母后の御代わりとして后きさきに立てられるのが合理的な処置であろうと、そのほうを助ける人たちは言つて、三女御の競争

になつたのであるが、結局一梅壺うめつぼの前齋宮が后におなりになつた。
 女王の幸運に世間は驚いた。源氏が太政大臣になつて、右大將が内
 大臣になつた。そして関白の仕事を源氏はこの人に譲つたのであつ
 た。この人は正義の觀念の強いりつぱな政治家である。學問を深く
 した人であるから韻塞いんふたぎの遊戯には負けたが公務を処理することに
 賢かつた。幾人かの腹から生まれた子息は十人ほどあつて、大人に
 なつて役人になつてゐるのは次々に昇進するばかりであつたが、女
 は女御のほか一人よりない。それは親王家の姫君から生まれた人
 で、尊貴なことは嫡妻の子にも劣らないわけであるが、その母君が
 今は按察使大納言あせちだいなごんの夫人になつていて、今の良人おつととの間に幾人かの
 子女が生まれてゐる中において継父の世話を受けさせておくことは
 かわいそうであるといつて、大臣は引き取つてわが母君の大宮に姫
 君をお託ししてあつた。大臣は女御を愛するほどには決してこの娘
 を愛してはいないのであるが、性質も容貌かたちも美しい少女であつた。
 そうしたわけで源氏の若君とこの人は同じ家で成長したのであるが、
 双方とも十歳を越えたころからは、別な場所に置かれて、どんなに
 親しい人でも男性には用心をしなければならぬと、大臣は娘を訓え
 て睦むつませないのを、若君の心に物足らぬ気持ちがあつて、花や紅葉もみぢ
 を贈ること、雑遊ひなびの材料を提供することなどに真心を見せて、な
 お遊び相手である地位だけは保留してゐたから、姫君もこの従弟いとこを
 愛して、男に顔を見せぬというような、普通の慎みなどは無視され
 ていた。乳母めのとなどという後見役の者も、この少年少女には幼い日か
 らついた習慣があるのであるから、にわかには厳格に二人の間を隔て
 ることはできないと大目に見ていたが、姫君は無邪氣一方であつて
 も、少年のほうの感情は進んでいて、いつの間にか情人の關係にま

で到^{いた}つたらしい。東の院へ学問のために閉じこめ同様になつたことは、このことがあるために若君を懊^{おつ}惱させた。まだ子供らしい、そして未来の上達の思われる字で、二人の恋人が書きかわしている手紙が、幼稚な人たちのすることであるから、抜け目があつて、そこに落ち散らされてもあるのを、姫君付きの女房が見て、二人の交情がどの程度にまでなっているかを合点する者もあつたが、そんなことは人に訴えてよいことでもないから、だれも秘密はそつとそのまま秘密にしておいた。后^{おの}の宮、両大臣家の大^き一^{いっ}饗^{きやう}宴^{えん}なども済んで、ほかの催し事が続いて仕度^{したく}されねばならぬということもなくて、世間の静かなころ、秋の通り雨が過ぎて、萩^{おぎ}の上風も寂しい日の夕方に、大宮のお住居^{すまい}へ内大臣が御訪問に來た。大臣は姫君を宮のお居間に呼んで琴などを弾^ひかせていた。宮はいろいろな芸のおできになる方で、姫君にもよく教えておありになつた。

「琵琶^{びわ}は女が弾^ひくとちよつと反感も起こりますが、しかし貴族的なよいものですね。今日はごまかしてなくほんとうに琵琶の弾けるといふ人はあまりなくなりました。何親王、何の源氏」

などと大臣は数えたあとで、

「女では太政大臣が嵯峨^{さか}の山莊に置いておく人というのが非常に巧^{うま}いそうですね。さかのぼつて申せば音楽の天才の出た家筋ですが、京官から落伍^{らくご}して地方にまで行つた男の娘に、どうしてそんな上^{じやう}手^てが出て來たのでしょうか。源氏の大臣はよほど感心していられると見えて、何かのおりにはよくその人の話をせられます。ほかの芸と音楽は少し性質が変わつていて、多く聞き、多くの人と合わせてもらうことでずっと進歩するものですが、独習をしていて、その域に達したというのは珍しいことです」

こんな話もしたが、大臣は宮にお弾きになることをお奨めした。

「もう絃を押すことなどが思うようにできなくなりましたよ」とお言いになりながらも、宮は上手に琴をお弾きになった。

「その山莊の人というのは、幸福な人であるばかりでなく、すぐれた聡明な人らしいですね。私に預けてくださったのは男の子一人であの方の女の子もできていたらどんなによかつたろうと思う女の子をその人は生んで、しかも自分がつれていては子供の不幸になるとをよく理解して、りっぱな奥さんのほうへその子を渡したことを、感心なものだと私も話に聞きました」

こんな話を大宮はあそばした。

「女は頭のよさでどんなにも出世ができるものですよ」

などと内大臣は人の批評をしていたのであるが、それが自家の不幸な話に移っていった。

「私は女御を完全でなくても、どんなことも人より劣るような娘には育て上げなかつたつもりなのですが、意外な人に負ける運命を持っていたのですね。人生はこんなに予期にはずれるものかと私は悲観的になりました。この子だけでも私は思うような幸運をになわせない、東宮の御元服はもうそのうちのことであろうかと、心中ではその希望を持っていたのですが、今のお話の明石の幸運女が生んだお後の候補者があとからずんずん生長してくるのですからね。その人が後宮へはいつたら、ましてだれが競争できますか」

大臣が歎息するのを宮は御覧になって、

「必ずしもそうとは言われませんよ。この家からお後の出ないようなことは絶対ないと私は思う。そのおつもりで亡くなられた大臣も女御の世話を引き受けて皆なすつたのだものね。大臣がおいでに

なつたらこんな意外な結果は見なかったでしょう」

この問題でだけ大宮は源氏を恨んでおいでになった。姫君がごちんまりとした美しいふうで、十三一絃げんの琴を弾いている髪つき、顔と髪の接触点の美などの艶えんな上品さに大臣がじつと見入っているのを姫君が知って、恥ずかしそうにからだを少し小さくしている横顔がきれいで、絃いとを押す手つきなどの美しいのも絵に描いたように思われるのを、大宮も非常にかわいく思召おほしめされるふうであつた。姫君はちよつと掻かき合わせをした程度で弾きやめて琴を前のほうへ押し出した。内大臣は大和琴やまとことを引き寄せて、律の調子の曲のかえつて若々しい気のするものを、名手であるこの人が、粗弾あらびきに弾き出したのが非常におもしろく聞こえた。外では木の葉がほろほるとこぼれている時、老いた女房などは涙を落しながらあちらこちらの几帳ねじやうの蔭かげなどに幾人かずつ集まってこの音楽に聞き入っていた。「風の力一蓋けだし少しなし」(落葉俟二「#「二」は返り点」微「#「風+」火/(火+火)」、第3水準「-94-8」一「#「一」は返り点」以隕へらくえふびふうをまつてもつておつ、而風之力蓋寡へしかうしてかぜのちからけだしすくなし、孟嘗遣二「#「二」は返り点」雍門一「#「一」は返り点」而泣へまうしやうがようもんにあひてなく、琴之感きんのかんもつてすゑなり以末。と文選もんぜんの句を大臣は口ずさんで、「琴の感じではないが身にしむ夕方ですね。もう少しお弾きになりませんか」

と大臣は大宮にお勧めして、秋風楽を弾きながら歌う声もよかつた。宮はこの座の人は御孫ごそんじよ女ばかりでなく、大きな大臣までもかわいく思召された。そこへいっそうの御満足を加えるように源氏の若君が来た。

「こちらへ」

と宮はお言いになって、お居間の中の几帳を隔てた席へ若君は通された。

「あなたにはあまり違いませぬね。なぜそんなにむきになって学問ばかりをおさせになるのだらう。あまり学問のできすぎることは不幸を招くことだと大臣も御体験なすったことなのだけれど、あなたをまたそうおしつけになるのだね、わけのあることでしょうが、ただそんなふうに関じ込められていてあなたがかわいそうでならない」

と内大臣は言った。

「時々は違ったこととしてごらんなさい。笛だって古い歴史を持った音楽で、いいものなのですよ」

内大臣はこう言いながら笛を若君へ渡した。若々しく朗らかな音を吹き立てる笛がおもしろいためにしばらく絃楽のほうはやめさせて、大臣はぎょうさんなふうでなく拍子を取りながら、「萩が花ずり」（衣がへせんや、わが衣は野原一篠原萩の花ずり）など歌っていた。

「太政大臣も音楽などという芸術がお好きで、政治のほうのことからお脱けになったのですよ。人生などというものは、せめて好きな楽しみでもして暮らしてしまいたい」

と言いながら甥に杯を勧めなどしているうちに暗くなったので灯が運ばれ、湯一漬け、菓子などが皆の前へ出て食事が始まった。姫君はもうあちらへ帰してしまつたのである。しいて二人を隔てて、琴の音すらも若君に聞かせまいとする内大臣の態度を、大宮の古女房たちはささやき合つて、

「こんなことで近いうちに悲劇の起こる気がします」
とも言っていた。

大臣は帰って行くふうだけを見せて、情人である女の部屋にはいつていたが、そつとからだを細くして廊下を出て行く間に、少年たちの恋を問題にして語る女房たちの部屋があつた。不思議に思つて立ち止まって聞くと、それは自身が批評されているのであつた。

「賢がつていらつしゃつても甘いのが親ですね。とんだことが知らぬ間に起こつていいるのですがね。子を知るは親にしかずなどというのは嘘つそですよ」

などこそそと言つていた。情けない、自分の恐れていたことが事實になつた。打つちやつて置いたのではないが、子供だから油断をしたのだ。人生は悲しいものであると大臣は思った。すべてを大臣は明らかに悟つたのであるが、そつとそのまま出てしまつた。前駆がたてる人払いの声のぎょうさんなのに、はじめて女房たちはこの時間までも大臣がここに留まつていたことを知つたのである。

「殿様は今お帰りになるではありませんか。どこの隅すみにはいつておいでになつたのでしよう。あのお年になつて浮気うわきはおやめにならない方ね」

と女房らは言つていた。内証話をしていた人たちは困つていた。

「あの時非常にいいにおいが私らのそばを通つたと思ひましたがね、若君がお通りになるのだとばかり思つていましたよ。まあこわい、悪口がお耳にはいらなかつたでしようか。意地悪をなさらないと制限りませんね」

内大臣は車中で娘の恋愛のことばかりが考えられた。非常に悪いことではないが、従弟いとこどうしの結婚などはあまりにありふれたこと

すぎるし、野合の初めを世間の噂うわさに上されることもつらい。後宮の競争に女御をおさえた源氏が恨めしい上に、また自分はその失敗に代えてあの娘を東宮へと志していたのではないか、僥倖うらぐちがあるいはそこにあるかもしれぬと、ただ一つの慰めだったこともこわされたと思うのであった。源氏と大臣との交情は睦まじく行っているのであるが、昔もその傾向があつたように、負けたくない心が断然強くて、大臣はそのことが不快であるために朝まで安眠もできなかった。大宮も様子を悟つておいでになるであろうが、非常におかわいくお思ひになる孫であるから勝手なことをさせて、見ぬ顔をしておいでになるのであろうと女房たちの言っていた点で、大臣は大宮を恨めしがっていた。腹がたつとそれを内におさえることのできない性質で大臣はあつた。

二日ほどしてまた内大臣は大宮を御訪問した。こんなふうにしきりに出て来る時は宮の御一機嫌きげんがよくて、おうれしい御様子がうかがわれた。形式は尼になつておいでになる方であるが、髪で額を隠して、お化粧もきれいにあそばされ、はなやかな小袿こむすひなどにもお召しかえになる。子ながらも晴れがましくお思われになる大臣で、ありのままのお姿ではお逢いにならないのである。内大臣は不機嫌な顔をしていた。

「こちらへ上がっておりましても私は恥ずかしい気がいたしました。女房たちはどう批評をしていることだろうかと心が置かれます。つまらない私ですが、生きておりますうちは始終伺つて、物足りない思ひをおさせせず、私もその点で満足を得たいと思つたのですが、不良な娘のためにあなた様をお恨めしく思わずにいられませんようなことができてまいりました。そんなに真剣にお恨みすべきでない

と、自分ながらも心をおさえようとするのでございますが、それができません」

大臣が涙を押しぬぐうのを御覧になって、お化粧あそばした宮のお顔の色が変わった。涙のために白粉おしろいが落ちてお目も大きくなった。

「どんなことがあって、この年になってからあなたに恨まれたりするのだろうか」

と宮の仰せられるのを聞くと、さすがにお気の毒な気のする大臣であつたが続いて言った。

「御信賴しているものですから、子供をお預けしまして、親である私はかえって何の世話もいたしませんで、手もとに置きました娘の後宮うきみやのはげしい競争に敗惨はいざんの姿になって、疲れてしまつております方のことばかりを心配して世話をやいておりまして、こちらに御一やっかい厄介やくかいになります以上は、私がそんなふうふうに捨てて置きましても、あなた様は彼を一人並みの女にしてくださいますことと期待していたのですが、意外なことになりましたから、私は残念なのです。源氏の大臣は天下の第一人者といわれるりっぱな方ではありますけどほとんど家の中どうしのような者のいっしょになりますことは、人に聞こえましても軽率に思われることです。低い身分の人たちの中でも、そんなことは世間へはばかってさせないものです。それはあの人のためにもよいことでは決してありません。全然離れた家へはなやかに婿むことして迎えられることがどれだけ幸福だかしれません。従姉いとこの縁ゆかりで強いいた結婚だというように取られて、源氏の大臣も不快にお思おもいになるかもしれませぬよ。それにしましてもそのことを私へお知らせくださいましたら、私はまた計らいようがあるというものです。

ある形式を踏ませて、少しは人聞きをよくしてやることもできたでしょうが、あなた様が、ただ年若な者のする放縦な行動そのままにお捨て置きになりましたことを私は遺憾いかんに思うのです」

くわしく大臣が言うことによつて、はじめて真相をお悟りになつた宮は、夢にもお思いにならないことであつたから、あきれておしまひになつた。

「あなたがそうお言いになるのはもつともだけれど、私はまったく二人の孫が何を思つて、何をしているかを知りませんでした。私こそ残念でなりませんのに、同じように罪を私が負わせられるとは恨めしいことです。私は手もとへ来た時から、特別にかわいくて、あなたがそれほどにしようとお思いにならないほど大事にして、私はあの人に女の最高の幸福を受けうる価値もつけようとしてました。

一方の孫を溺愛できあいして、ああしたまだ少年の者に結婚を許そうなどは思いもよらぬことです。それにしても、だれがあなたにそんなことを言つたのでしょうか。人の中傷かもしれぬことで、腹をお立てになつたりなさることはよくないし、ないことで娘の名に傷をつけてしまうことにもなりますよ」

「何のないことだものですか。女房たちも批難して、蔭かげでは笑つていることでしょうか。私の心中は穏やかでありようがありません」
 と言つて大臣は立つて行つた。幼い恋を知っている人たちは、この破局に立ち至つた少年少女に同情していた。先夜の内証話をした人たちは逆上もしてしまいそうになつて、どうしてあんな秘密を話題にしたのであろうと後悔に苦しんでいた。

姫君は何も知らずにいた。のぞいた居間かみんに可憐な美しい顔をして

姫君がすわっているのを見て、大臣の心に父の愛が深く湧いた。

「いくら年が行かないからといって、あまりに幼稚な心を持っているあなただとは知らないで、われわれの娘としての人並みの未来を私はいろいろに考えていたのだ。あなたよりも私のほうが麿り物になつた気がする」

と大臣は言つて、それから乳母を責めるのであつた。乳母は大臣に対して何とも弁明ができない。ただ、

「こんなことでは大事な内親王様がたにもあやまちのあることを昔の小説などで読みましたが、それは御信頼を裏切るおそばの者があつて、男の方のお手引きをするとか、また思いがけない隙ができたとかいうことで起きるのですよ。こちらのことは何年も始終ごいっしよに遊んでおいでになつた間なんですもの。お小さくはいらつしやるし宮様が寛大にお扱いになる以上にわれわれがお制しすることはできないとそのままに見ておりましたけれど、それも一昨年ごろからははつきりと日常のことが御区別できましたし、またあの方が同じ若い人といつてもだらしない不良なふうなどは少しもない方なのでしたから、まったく油断をいたしましたわね」

などと自分たち仲間なげでなげ歉なげいているばかりであつた。

「で、このことはしばらく秘密にしておこう。評判はどんなにしても立つものだが、せめてあなたたちは、事実でないとは否定をすることに骨を折るがいい。そのうち私の邸やしきへつれて行くことにする。宮様の御好意が足りないからなのだ。あなたがたはいくら何だつても、こうなれと望んだわけではないだろう」

と大臣が言つと、乳母たちは、大宮のそう取られておいでになることをお気の毒に思いながらも、また自家のあかりが立ててもらえ

たようにうれしく思った。

「さようでございますとも、大納言家への聞こえということも私たちは思っているのでございますもの、どんなに人柄がごりつぱでも、ただの御縁におつきになることなどを私たちは希望申し上げるわけはございません」

と言う。姫君はまったく無邪気で、どう戒めても、訓おしえてもわかりそうにないのを見て大臣は泣き出した。

「どういふふうに体裁を繕すたえばいいか、この人を廃すたり物にしないためには」

大臣は二、三人と密議するのであった。この人たちは大宮の態度がよろしくなかったことばかりを言い合った。

大宮はこの不祥事を二人の孫のために悲しんでおいでになったが、その中でも若君のほうをお愛しになる心が強かったのか、もうそんなに大人びた恋愛などのできるようになったかとかわいくお思われにならないでもなかった。もつてのほかのように言った内大臣の言葉を肯定あそばすこともできない。必ずしもそうであるまい、たいした愛情のなかつた子供を、自分がたいせつに育ててやるようになったため、東宮の後宮というような志望も父親が持つことになったのである。それが実現できなくて、普通の結婚をしなければならぬ運命になれば、源氏の長男以上のすぐれた婿があるものではない。容貌ようぼうをはじめとして何から言っても同等きんたちの公達きんたちのあるわけはない、もつと価値の低い婿を持たねばならない気がすると、やや公平でない御愛情から、大臣を恨んでおいでになるのであったが、宮のこのお心持ちを知ったならまして大臣はお恨みすることであろう。

自身のことこんな騒ぎのあることも知らずに源氏の若君が来た。

一昨夜は人が多くいて、恋人を見ることのできなかつたことから、恋しくなつて夕方から出かけて来たものであるらしい。平生大宮はこの子をお迎えになると非常におうれしそうな顔をあそばしておよろこびになるのであるが、今日はまじめなふうでお話をあそばしたあとで、

「あなたのことで内大臣が来て、私までも恨めしそうに言つてましたから気の毒でしたよ。よくないことをあなたは始めて、そのために人が不幸になるではありませんか。私はこんなふうに言いたくないのだけれど、そういうことのあるのを、あなたが知らないでいてはと思つてね」

とお言いになつた。少年の良心にとがめられていることであつたから、すぐに問題の真相がわかつた。若君は顔を赤くして、

「なんでしょう。静かな所へ引きこもりましたからは、だれとも何の交渉もないのですから、伯父様の感情を害するようなことはないはずだと私は思います」

と言つて羞恥に堪えないように見えるのをかわいそうに宮は思召した。

「まあいいから、これから気をおつけなさいね」

とだけお言いになつて、あとはほかへ話を移しておしまいになつた。これからは手紙の往復もいっそう困難になることであろうと思つと、若君の心は暗くなつていった。晩餐が出てあまり食べずに早く寝てしまつたふうは見せながらも、どうかして恋人に逢おうと思ふことで夢中になつていた若君は、皆が寝入つたところを見計らつて姫君の居間との間の襖子をあげようとしたが、平生は別に錠などを掛けることもなかつた仕切りが、今夜はしかと鎖されてあつて、

向こう側に人の音も聞こえない。若君は心細くなって、襖子によりかかっていると、姫君も目をさまして、風の音が庭先の竹にまわってそよそよと鳴ったり、空を雁かりの通って行く声のほかに聞こえたりすると、無邪気な人も身にしむ思いが胸にあるのか、「雲井の雁もわがごとや」（霧深き雲井の雁もわがごとや晴れもせず物の悲しがるらん）と口ずさんでいた。その様子が少女らしくきわめて可憐かれんであつた。若君の不安さはつのもつて、

「ここをあけてください、小侍従はいませんか」

と言つた。あちらには何とも答える者がない。小侍従は姫君の乳母との娘である。独言ひとりごとを聞かれたのも恥ずかしくて、姫君は夜着を顔かぶに被つてしまつたのであつたが、心では恋人を憐あわれんでいた、大人のよう。乳母などが近い所に寝ていてみじろぎも容易にできないのである。それきり二人とも黙つていた。

「#ここから2字下げ」

さ夜中に友よびわたる雁がねにうたて吹きそふ荻わぎのうは風

「#ここで字下げ終わり」

身にしむものであると若君は思いながら宮のお居間のほうへ帰つたが、歎息たんそくしてつく吐息といきを宮がお目ざめになつてお聞きにならぬかと遠慮されて、みじろぎながら寝ていた。

若君はわけもなく恥ずかしくて、早く起きて自身の居間のほうへ行き、手紙を書いたが、二人の味方である小侍従にも逢うことができず、姫君の座敷のほうへ行くこともようせずはんもんに煩悶はんもんをしていた。女のほうも父親にしかられたり、皆から問題にされたりしたことだ

けが恥ずかしくて、自分がどうなるとも、あの人がどうなっていくとも深くは考えていない。美しく二人が寄り添って、愛の話をすることが悪いこと、醜いこととは思えなかった。そうした場合がなつかしかった。こんなに皆に騒がれることが至当なこととは思われないのであるが、乳母などからひどい小言こことを言われたあとでは、手紙を書いて送ることもできなかった。大人はそんな中でも隙すきをとらえることが不可能でなかるうが、相手の若君も少年であつて、ただ残念に思っているだけであつた。

内大臣はそれきりお訪ねたずはしないのであるが宮を非常に恨めしく思つていた。夫人には雲井の雁の姫君の今度の事件についての話をしなかつたが、ただ気むずかしく不機嫌ふきげんになつていた。

「中宮がはなやかな儀式で立后後の宮中入りをなすつたこの際に、女御にょじが同じ御所でめいつた気持ちで暮らしているかと思うと私はたまらないから、退出させて気楽うちに家で遊ばせてやりたい。さすがに陛下はおそばをお離しにならないようにお扱いになつて、夜昼上の御局みつぼねへ上がつているのだから、女房たちなども緊張してばかりいなければならぬのが苦しうだから」

こう夫人に語つている大臣はにわかにな女御退出のお暇を帝みかどへ願ねがひ出した。御一寵愛ちようあいの深い人であつたから、お暇を許しがたく帝みかどは思召おもほしめしたのであるが、いろいろなことを言い出して大臣が意志を貫徹しようとするので、帝はしぶしぶ許しあそばされた。自邸に帰つた女御に大臣は、

「退屈でしょうから、あちらの姫君を呼んでいっしょに遊ぶことな
どなさい。宮にお預けしておくことは安心なようではあるが、年の
寄つた女房があちらには多すぎるから、同化されて若い人の憤み深

さがなくなつてはと、もうそんなことも考えなければならぬ年ごろになつていきますから」

こんなことを言つて、にわかには雲井の雁を迎へることにした。大宮は力をお落としになつて、

「たった一人あつた女の子が亡なくなつてから私は心細い気がして寂しがつていた所へ、あなたが姫君をつれて来てくれたので、私は一生ながめて楽しむことのできる宝のように思つて世話をしていたのに、この年になつてあなたに信用されなくなつたかと思うと恨めしい気がします」

とお言いになると、大臣はかしまつて言つた。

「遺憾いかんな氣のしましたことは、その場でありのままに申し上げただけのことでございます。あなた様を御信用申さないようなことが、どうしてあるものでございますか。御所におります娘が、いろいろと朗らかでないふうでこの節一邸やしきへ歸つておりますから、退屈そうなのが哀れでございまして、いっしょに遊んで暮らせばよいと思ひまして、一時的につれてまいるのでございます」

また、

「今日までの御養育の御恩は決して忘れさせません」

とも言つた。こう決めたことはとどめても思い返す性質でないことを御承知の宮はただ残念に思召すばかりであつた。

「人というものは、どんなに愛するものでもこちらをそれほどに思つてはくれないものだね。若い二人がそうではないか、私に隠して大事件を起こしてしまつたではないか。それはそれでも大臣はりっぱなでき上がった人でいながら私を恨んで、こんなふうにして姫君をつれて行つてしまふ。あちらへ行つてここにいる以上の平和な

日があるものとは思われぬよ」

お泣きになりながら、こう女房たちに宮は言っておいでになった。ちよつとそこへ若君が来た。少しの隙すきでもないかとこのころはよく出て来るのである。内大臣の車が止まっているのを見て、心の鬼にきまり悪さを感じた若君は、そつとはいって来て自身の居間へ隠れた。内大臣の息子たちである左少将さしやうしょう、少納言しょうなごん、兵衛佐ひょうえのすけ、侍従じじゆう、大夫だいはうなどという人らもこのお邸やしきへ来るが、御簾みすの中へはいることは許されていぬのである。左衛門督さえもんのかみ、権中納言ごんちゆうなごんなどという内大臣の兄弟はほかの母君から生まれた人であつたが、故人の太政大臣が宮へ親子の礼を取らせていた関係から、今も敬意を表しに来て、その子供たちも出入りするのであるが、だれも源氏の若君ほど美しい顔をしたのはなかつた。宮のお愛しになることも比類のない御孫であつたが、そのほかには雲井の雁だけがお手もとで育てられてきて深い御愛情の注がれている御孫であつたのに、突然こうして去つてしまうことになつて、お寂しくなることを宮は歎なげいておいでになつた。大臣は、

「ちよつと御所へ参りまして、夕方に迎えに来ようと思ひます」

と言つて出て行つた。事実に潤色を加えて結婚をさせてもよいとは大臣の心にも思われたのであるが、やはり残念な気持ちで勝つて、ともかくも相当な官歴ができたころ、娘への愛の深さ浅さをも見て、許すにしても形式を整えた結婚をさせたい、嚴重に監督しても、そこが男の家でもある所に置いては、若いどしは放縦なことをするに違ひない。宮もしいて制しようとはあそばさないであろうからとこう思つて、女御にょごのつれづれに託して、自家のほうへも官邸へも軽いふうを装つて伴い去らうと大臣はするのである。宮は雲井の雁へ

手紙をお書きになった。

「#ここから1字下げ」

大臣は私を恨んでいるかしりませんが、あなたは、私がどんなにあなたを愛しているかを知っているでしょう。こちらへ違いに来てください。

「#ここで字下げ終わり」

宮のお言葉に従って、きれいに着かざった姫君が出て来た。年は十四なのである。まだ大人にはなりきってはいないが、子供らしくおとなしい美しさのある人である。

「始終あなたをそばに置いて見るのが、私のなくてならぬ慰めだったのだけれど、行ってしまつては寂しくなることでしょう。私は年寄りだから、あなたの生おい先が見られないだろうと、命のなくなるのを心細がつたものですがね。私と別れてあなたの行く所はどこかと思うとかわいそうでならない」

と言って宮はお泣きになるのであった。雲井の雁は祖母の宮のお歎なげきの原因に自分の恋愛問題がなっているのであると思うと、羞し恥ぢの感に堪えられなくて、顔も上げることができずに泣いてばかりいた。

若君の乳母の宰相の君が出て来て、

「若様とごいっしょの御主人様だとただ今まで思っておりましてのに行つておしまいになるなどは残念なことでございます。殿様がほかの方と御結婚をおさせになろうとあそばしましても、お従いにならぬようにあそばせ」

などと小声で言うと、いよいよ恥かずかしく思つて、雲井くもいの雁かりはものも言えないのである。

「そんな面倒な話はしないほうがよい。縁だけはだれも前生から決められているのだからわからない」

と宮がお言いになる。

「でも殿様は貧弱だと思召して若様を輕蔑あそばすのでございませうから。まあお姫様見ておいであそばせ、私のほうの若様が人におくれをおとりになる方かどうか」

口惜しがっている乳母はこんなことも言うのである。若君は几帳の後ろへはいつて来て恋人をながめていたが、人目を恥じることなどはもう物の切迫しない場合のことで、今はそんなことも思われずに泣いているのを、乳母はかわいそうに思つて、宮へは体裁よく申し上げ、夕方の暗まぎれに二人をほかの部屋で逢わせた。きまり悪さと恥ずかしさで二人はものも言わずに泣き入った。

「伯父様の態度が恨めしいから、恋しくても私はあなたを忘れてしまおうと思うけれど、逢わないでいてはどんなに苦しいだろうと今から心配でならない。なぜ逢えば逢うことのできたところに私はたびたび来なかつたらう」

と言う男の様子には、若々しくてそして心を打つものがある。

「私も苦しいでしょう、きっと」

「恋しいだろうとお思いになる」

と男が言うと、雲井の雁が幼いふうにならず。座敷には灯がともされて、門前からは大臣の前駆の者が大仰に立てる人払いの声が聞こえてきた。女房たちが、

「さあ、さあ」

と騒ぎ出すと、雲井の雁は恐ろしがつてふるえ出す。男はもうどうでもよいという気になって、姫君を帰そうとしないのである。姫

君の乳母めのとが捜しに来て、はじめて二人の会合を知った。何というまわしいことであろう、やはり宮はお知りにならなかったのではなかつたかと思うと、乳母は恨めしくてならなかつた。

「ほんとうにまあ悲しい。殿様が腹をおたてになつて、どんなことを言い出しになるかしのれないばかりか、大納言家でもこれをお聞きになつたらどうお思いになることだろう。貴公子でありになつても、最初の殿様が浅葱あさぎの袍ほろの六位の方とは」

こう言う声も聞こえるのであつた。すぐ二人のいる屏風びよぶの後ろに来て乳母はこぼしているのである。若君は自分の位の低いことを言つて侮辱しているのであると思うと、急に人生がいやなものに思われてきて、恋も少しさめる気がした。

「そらあんなことを言っている。」

「#ここから2字下げ」

くれなるの涙に深き袖そでの色を浅緑とやいひしをるべき

「#ここで字下げ終わり」

恥ずかしくてならない」

と言うと、

「#ここから2字下げ」

いろいろに身のうきほどの知らるるはいかに染めける中の衣ぞ

「#ここで字下げ終わり」

と雲井の雁が言ったか言わぬに、もう大臣が家の中にはいつて来

たので、そのまま雲井の雁は立ち上がった。取り残された見苦しさも恥ずかしくて、悲しみに胸をふさがらせながら、若君は自身の居間へはいつて、そこで寝つこうとしていた。三台ほどの車に分乗して姫君の一行は邸やしきをそつと出て行くらしい物音を聞くのも若君にはつらく悲しかったから、宮のお居間から、来るようにと、女房を迎えにおよこしになった時にも、眠ったふうをしてみじろぎもしなかった。涙だけがまだ止まらずに一睡もしないで暁になった。霜の白いころに若君は急いで出かけて行った。泣き腫はらした目を人に見られることが恥ずかしいのに、宮はきつとそばへ呼ぼうとされるのであろうから、気楽な場所へ行つてしまいたくなつたのである。車の中でも若君はしみじみと破れた恋の悲しみを感じるのであったが、空模様もひどく曇つて、まだ暗い寂しい夜明けであつた。

「#ここから2字下げ」

霜氷うたて結べる明けぐれの空かきくらし降る涙かな

「#ここで字下げ終わり」

こんな歌を思った。

今年源氏は五節ごせちの舞い姫を一人出すのであつた。たいした仕度したくというものではないが、付き添いの童女の衣裳いしやうなどを日が近づくので用意させていた。東の院の花散里夫人はなちるりふじんは、舞い姫の宮中へはいる夜の、付き添いの女房たちの装束を引き受けて手もとで作らせていた。二条の院では全体にわたつての一通りの衣裳が作られているのである。中宮からも、童女、下仕えの女房幾人かの衣服を、華奢かしやに作つて御寄贈になつた。去年は諒闇じやうあんで五節のなかつたせいもあつて、だ

れも近づいて来る五節に心をおどらせている年であるから、五人の舞い姫を一人ずつ引き受けて出す所々では派手はでが競われているという評判であつた。按察使大納言あぜちの娘、左衛門督さえもんのかみの娘などが出ることになつていた。それから殿上役人の中から一人出す舞い姫には、今は近江守おうみのかみで左中弁を兼ねている良清朝臣よしきよあそんの娘がなることになつてた。今年の舞い姫はそのまま続いて女官に採用されることになつていたから、愛嬢を惜しまずに出すのであると言われていた。源氏は自身から出す舞い姫に、摂津守兼左京大夫である惟光これみつの娘で美人だと言われている子を選んだのである。惟光は迷惑がつていたが、

「大納言が妾腹の娘を舞い姫に出す時に、君の大事な娘を出したつても恥ではない」

と責められて、困つてしまつた惟光は、女官になる保証のある点がよくいからとあきらめてしまつて、主命に従うことにしたのである。舞の稽古けいこなどは自宅をよく習わせて、舞い姫を直接世話するいわゆるかしずきの幾人だけはその家で選んだのをつけて、初めの日の夕方ごろに二条の院へ送つた。なお童女幾人、下仕しもえ幾人が付き添いに必要なのであるから、二条の院、東の院を通じてすぐれた者を多数の中から選り出すことになつた。皆それ相応に選定される名誉を思つて集まつて来た。陛下こせちが五節の童女だけを御覧になる日の練習に、縁側を歩かせて見て決めようと源氏はした。落選させてよいよくな子供もない、それぞれに特色のある美しい顔と姿を持っているのに源氏はかえつて困つた。

「もう一人分の付き添いの童女を私のほうから出そうかね」
 などと笑つていた。結局身の取りなしのよさと、品のよい落ち着きのある者が採られることになつた。

大学生の若君は失恋の悲しみに胸が閉じられて、何にも興味が持てないほど心がめいって、書物も読む気のしないほどの気分がいくぶん慰められるかもしれぬと、五節の夜は二条の院に行っていた。風采ふうさいがよくて落ち着いた、艶えんな姿の少年であつたから、若い女房などから憧憬あこがれを持たれていた。夫人のいるほうでは御簾みすの前へもあまりすわらせぬように源氏は扱うのである。源氏は自身の経験によつて危険がるのか、そういうふうであつたから、女房たちすらも若君と親しくする者はいないのであるが、今日は混雑の紛れに室内へもはいつて行ったものらしい。車で着いた舞い姫をおろして、妻戸の所の座敷に、屏風びよぶなどで囲いをして、舞い姫の仮の休息所へ入れてあつたのを、若君はそつと屏風の後ろからのぞいて見た。苦しうにして舞い姫はからだを横向きに長くしていた。ちようど雲井くもいの雁かりと同じほどの年ごろであつた。それよりも少し背が高くて、全体の姿にあざやかな美しさのある点は、その人以上にさえも見えた。暗かつたからよくは見えないのであるが、年ごろが同じくらいで恋人の思われる点がうれしくて、恋が移つたわけではないがこれにも關心は持たれた。若君は衣服の襷つまさき先を引いて音をさせてみた。思いがけぬことで怪しがる顔を見て、

「#ここから1字下げ」

「天あめにます豊岡とよをか姫の宮人もわが志すしめを忘るな

「#ここで字下げ終わり」

『みづがきの』(久しき世より思ひ初そめてき)

と言つたが、藪やぶから棒ということのようである。若々しく美しい

声をしているが、だれであるかを舞い姫は考え当てることもできない。気味悪く思っている時に、顔の化粧を直しに、騒がしく世話役の女が幾人も来たために、若君は残念に思いながらその部屋を立ち去った。浅葱あさぎの袍ほろを着て行くことがいやで、若君は御所へ行くこともしなかつたが、五節を機会に、好みの色の直衣のうしを着て宮中へ出入りすることを若君は許されたので、その夜から御所へも行った。ただ小柄な美少年は、若公わかみんだち達らしく御所の中を遊びまわっていた。帝をはじめとしてこの人をお愛しになる方が多く、ほかには類もないような御一おんちよつ恩寵おんちよつを若君は身に負っているのであった。

五節の舞い姫がそろって御所へはいる儀式には、どの舞い姫も盛装を凝らしていたが、美しい点では源氏のと、大納言の舞い姫がすぐれていると若い役人たちはほめた。実際二人ともきれいであつたが、ゆったりとした美しさはやはり源氏の舞い姫がすぐれていて、大納言のほうのは及ばなかつたようである。きれいで、現代的で、五節の舞い姫などというもののようでないつくりにした感じよさがこつほめられるわけであつた。例年の舞い姫よりも少し大きくて前から期待されていたのにそむかない五節の舞い姫たちであつた。源氏も参内して陪観したが、五節の舞い姫の少女が目にとまつた昔を思い出した。辰の日の夕方に大式だいにの五節へ源氏は手紙を書いた。内容が想像されないでもない。

「#ここから2字下げ」

少女をとめ子も神さびぬらし天そでつ袖そでふるき世の友よはひ経ぬれば

「#ここで字下げ終わり」

五節は今日までの年月の長さを思つて、物哀れになつた心持ちを源氏が昔の自分に書いて告げただけのことである、これだけのことを喜びにしなければならぬ自分であるということをはかなんだ。

「#ここから2字下げ」

かけて言はば今日のこととぞ思ほゆる日かげの霜の袖にとけしも

「#ここで字下げ終わり」

新嘗祭にいなめまつりの小忌おみの青摺あおずりを模様にした、この場合にふさわしい紙に、濃淡の混ぜようをおもしろく見せた漢字がちの手紙も、その階級の女には適した感じのよい返事の手紙であつた。

若君も特に目だつた美しい自家の五節を舞の庭に見て、違つてもの言う機会を作りたく、楽屋のあたりへ行つてみるのであつたが、近い所へ人も寄せないような警戒ぶりであつたから、羞恥しゅうち心の多い年ごろのこの人は歎息たんそくするばかりで、それきりにしてしまつた。美貌ぼうであつたことが忘れなくて、恨めしい人に逢われぬ心の慰めにはあの人を恋人に得たいと思つていた。

五節の舞い姫は皆とどまつて宮中の奉仕をするよつとの仰せであつたが、いつたんは皆退出させて、近江守おうみのかみのは唐崎からさき、摂津守の子は浪速なにわで被はいをさせたいと願つて自宅へ帰つた。大納言も別の形式で宮仕えに差し上げることが奏上した。左衛門督さへもんのかみは娘でない者を娘として五節に出したという事で問題になつたが、それも女官に採用されることになつた。惟光これみつは典侍ないしのすけの職が一つあいてある補充に娘を採用されたいと申し出た。源氏もその希望どおりに優遇をしてやつてもよいという氣になつてゐることを、若君は聞いて残念に思つた。

自分がこんな少年でなく、六位級に置かれているのでなければ、女官などにはさせないで、父の大臣に乞うて同棲を黙認してもらおうのであるが、現在では不可能なことである。恋しく思う心だけでも知らせずには終わるのかと、たいした思いではなかったが、雲井の雁を思つて流す涙といつしよに、そのほうの涙のこぼれることもあつた。

五節の弟で若君にも丁寧^{ていねい}に臣礼を取ってくる惟光の子に、ある日逢つた若君は平生以上に親しく話してやつたあとで言つた。

「五節はいつ御所へはいるの」

「今年のうちだということですよ」

「顔がよかつたから私はあの人が好きになつた。君は姉さんだから毎日見られるだろうからうらやましいのだが、私にももう一度見せてくれないか」

「そんなこと、私だつてよく顔なんか見ることはできませんよ。男の兄弟だからつて、あまりそばへ寄せてくれませんのですもの、それだのにあなたなどにお見せすることなど、だめですね」

と言う。

「じゃあ手紙でも持つて行つてくれ」

と言つて、若君は惟光の子に手紙を渡した。これまでもこんな役をしてはいつも家庭でしかられるのであつたがと迷惑に思うのであるが、ぜひ持つてやらせたそうである若君が気の毒で、その子は家へ持つて帰つた。五節は年よりもませていたのか、若君の手紙をうれしく思つた。緑色の薄様の美しい重ね紙に、字はまだ子供らしいが、よい将来のこもつた字で感じよく書かれてある。

「#ここから2字下げ」

日かげにもしるかりけめや少女をとめ子が天の羽袖にかけし心は

「#ここで字下げ終わり」

姉と弟がこの手紙をいっしょに読んでいる所へ思いがけなく父の
惟光大人が出て来た。隠してしまうこともまた恐ろしくてできぬ若
い姉弟きょうだいであつた。

「それは、だれの手紙」

父が手に取るのを見て、姉も弟も赤くなつてしまった。

「よくない使いをしたね」

としかられて、逃げて行こうとする子呼んで、

「だれから頼まれた」

と惟光が言った。

「殿様の若君がぜひつておっしゃるものだから」

と答えるのを聞くと、惟光は今まで怒っていた人のようでもなく、
笑顔えがおになつて、

「何というかわいいたずらだろう。おまえなどは同い年でまだま
つたくの子供じゃないか」

とほめた。妻にもその手紙を見せるのであつた。

「こうした貴公子に愛してもらえば、ただの女官のお勤めをさせる
より私はそのほうへ上げてしまいたいくらいだ。殿様の御性格を見
ると恋愛関係をお作りになつた以上、御自身のほうから相手をお捨
てになることは絶対はないようだ。私も明石あかしの入道になるかな」

などと惟光は言っていたが、子供たちは皆立つて行つてしまった。

若君は雲井の雁へ手紙を送ることもできなかつた。二つの恋をし

ているが、一つの重いほうのことばかりが心にかかつて、時間がたてばたつほど恋しくなつて、目の前を去らない面影の主にもう一度逢うということもできぬかとばかり歎かれるのである。祖母の宮のお邸へ行くこともわけなしに悲しくてあまり出かけない。その人の住んでいた座敷、幼い時からいっしょに遊んだ部屋などを見ては、胸苦しきのつるばかりで、家そのものも恨めしくなつて、また勉強所にはかり引きこもっていた。源氏は同じ東の院の花散里夫人に、母としての若君の世話を頼んだ。

「大宮はお年がお年だから、いつどうおなりになるかしれない。お薨れになつたあとのことを思うと、こうして少年時代から馴らしておいて、あなたの厄介になるのが最もよいと思う」

と源氏は言うのであつた。すなおな性質のこの人は、源氏の言葉に絶対の服従をする習慣から、若君を愛して優しく世話をした。若君は養母の夫人の顔をほのかに見ることもあつた。よくないお顔である。こんな人を父は妻としていふことができるのである、自分が恨めしい人の顔に執着を絶つことのできないのも、自分の心ができ上がっていないからであらう、こうした優しい性質の婦人と夫婦になりえたら幸福であらうと、こんなことを若君は思ったが、しかしあまりに美しくない顔の妻は向かい合つた時に気の毒になつてしまふであらう、こんなに長い関係になつていながら、容貌の醜なる点、性質の美な点を認められた父君は、夫婦生活などは疎にして、妻としての待遇にできるかぎりの好意を尽くしていられるらしい。それが合理的なようであるとも若君は思った。そんなことまでもこの少年は観察しえたのである。大宮は尼姿になつておいでになるがまだお美しかつたし、そのほかどこでこの人の見るのも相当な容貌が集めら

れている女房たちであつたから、女の顔は皆きれいなものであると思つていたのが、若い時から美しい人でなかつた花散里が、女の盛りも過ぎて衰えた顔は、瘦せた貧弱なものになり、髪も少なくなつていたりするのを見て、こんなふうに思うのである。

年末には正月の衣裳を大宮は若君のためにばかり仕度あそばされた。幾重ねも美しい春の衣服のでき上がっているのを、若君は見るのもいやな気がした。

「元旦だつて、私は必ずしも参内するものでないのに、何のためにこんなに用意をなさるのですか」

「そんなことがあるものですか。廃人の年寄りのようなことを言う」「年寄りではありませんが廃人の無力が自分に感じられる」

若君は独言を言つて涙ぐんでいた。失恋を悲しんでいるのであると、哀れに御覧になつて宮も寂しいお顔をあそばされた。

「男性というものは、どんな低い身分の人だつて、心持ちだけは高く持つものです。あまりめいつたそうしたふうは見せないようになさいよ。あなたがそんなに思い込むほどの価値のあるものはないではないか」

「それは別にないのですが、六位だと人が軽蔑をしますから、それはしばらくの間のことだとは知っていますが、御所へ行くのも気がそれで進まないのです。お祖父様がおいでになつたら、戯談にでも人は私を軽蔑なんかしないでしよう。ほんとうのお父様ですが、私をお扱いになるのは、形式的に重くしていらつしやるとしか思われません。二条の院などで私は家族の一人として親しませてもらうよつなことは絶対にできません。東の院でだけ私はあの方の子らしく

していただけます。西の対のお母様だけは優しくしてください。もう一人私にほんとうのお母様があれば、私はそれだけでもう幸福なのでしようがお祖母様」

涙の流れるのを紛らしている様子のかわいそうなのを御覧になって、宮はほろほろと涙をこぼしてお泣きになった。

「母を亡くした子というものは、各階級を通じて皆そうした心細い思いをしているのだけれど、だれにも自分の運命というものがあって、それぞれに出世してしまえば、軽蔑する人などはないのだから、そのことは思わないほうがいいよ。お祖父様がもうしばらくでも生きていてくださったらよかったのだね、お父様がおいでなんだから、お祖父様くらいの愛はあなたに掛けていただけると信じてますけれど、思うようには行かないものなのだね。内大臣もりっぱな人格者のように世間で言われていても、私に昔のような平和も幸福もなくなっていくのはどういうわけだろう。私はただ長生きの罪にしてあげますが、若いあなたのような人を、こんなふうになんかでも厭世的にする世の中かと思うと恨めしくなります」

と宮は泣いておいでになった。

元日も源氏は外出の要がなかったから長閑であった。良房の大臣の賜わった古例で、七日の白馬が二条の院へ引かれて来た。宮中どおりに行なわれた荘重な式であった。

二月二十幾日に朱雀院へ行幸があった。桜の盛りにはまだなっていなかったが、三月は母後の御忌月であったから、この月が選ばれたのである。早咲きの桜は咲いていて、春のながめはもう美しかった。お迎えになる院のほうでもいろいろの御準備があった。行幸の供奉をする顯官も親王方もその日の服装などに苦心を払っておいで

になった。その人たちは皆青色の下に桜襲ちくすかたねを用いた。帝は赤色の御服であった。お召しがあつて源氏の大臣が参院した。同じ赤色を着ているのであつたから、帝と同じものと見えて、源氏の美貌うつくしが輝いた。御宴席に出た人々の様子も態度も非常によく洗練されて見えた。院もますます清艶せいえんな姿におなりあそばされた。今日は専門の詩人はお招きにならないで、詩才の認められる大学生十人を召したのである。これを式部省しきぶしょうの試験に代えて作詞の題をその人たちはいただいた。これは源氏の長男のためにわざとお計らいになったことである。気の弱い学生などは頭もぼうとさせていて、お庭先の池に放たれた船に乗って出た水上で製作に苦しんでいた。夕方近くなって、音楽者を載せた船が池を往来して、楽音を山風に混ぜて吹き立てている時、若君はこんなに苦しい道を進まないでも自分の才分を發揮させる道はあるであろうかと恨めしく思った。「春鶯囀はるあひうら」が舞われている時、昔の桜花の宴の日のことを院の帝はお思い出しになつて、

「もうあんなおもしろいことは見られないと思う」

と源氏へ仰せられたが、源氏はそのお言葉から青春時代の恋愛三昧さんまいを忍んで物哀れな気分になつた。源氏は院へ杯を参らせて歌つた。

「#ここから2字下げ」

鶯うつくしのさへづる春は昔にてむつれし花のかけぞ変はれる

「#ここで字下げ終わり」

院は、

「#ここから2字下げ」

九重を霞へだつる住処にも春と告げくる鶯の声

「#ここで字下げ終わり」

とお答えになった。太宰帥の宮といわれた方は兵部卿になっておいでになるのであるが、陛下へ杯を献じた。

「#ここから2字下げ」

いにしへを吹き伝へたる笛竹にさへづる鳥の音さへ変はらぬ

「#ここで字下げ終わり」

この歌を奏上した宮の御様子がことにりっぱであった。帝は杯をお取りになって、

「#ここから2字下げ」

鶯の昔を恋ひて囀るは木づたふ花の色やあせたる

「#ここで字下げ終わり」

と仰せになるのが重々しく気高かった。この行幸は御家庭的なお催しで、儀式だったことでなかったせいなのか、官人一同が詞歌を詠進したのではなかったのかその日の歌はこれだけより書き置かれていない。

奏楽所が遠くて、細かい楽音が聞き分けられないために、楽器が御前へ召された。兵部卿の宮が琵琶、内大臣は和琴、十三絃が院の帝の御前に差し上げられて、琴は例のように源氏の役になった。

皆名手で、絶妙な合奏楽になった。歌う役を勤める殿上役人が選ばれてあって、「安名尊」が最初に歌われ、次に桜人が出た。月が臙ろに出て美しい夜の庭に、中島あたりではそこかしこに篝火が焚かれてあった。そうしてもう合奏が済んだ。

夜ふけになったのであるが、この機会に皇太后を御訪問あそばさないことも冷淡なことであると思召して、お帰りがけに帝はそのほうの御殿へおまわりになった。源氏もお供をして参ったのである。

太后は非常に喜んでお迎えになった。もう非常に老いておいでになるのを、御覧になっても帝は御母宮をお思い出しになって、こんな長生きをされる方もあるのにと残念に思召された。

「もう老人になってしまいました、私などはすべての過去を忘れてしまっておりまして、もったいない御訪問をいただきましたことから、昔の御代が忍ばれます」

と太后は泣いておいでになった。

「御両親が早くお崩れになりました以来、春を春でもないように寂しく見ておりましたが、今日はじめて春を十分に享楽いたしました。また伺いましょう」

と陛下は仰せられ、源氏も御一挨拶をした。

「また別の日に伺候いたしまして」

遷幸の鳳輦をはなやかに百官の圍繞して行く光景が、物の響きに想像される時にも、太后は過去の御自身の態度の非を悔いておいでになった。源氏はどう自分の昔を思っているであろうと恥じておいでになった。一国を支配する人の持っている運は、どんな咀いよりも強いものであるとお悟りにもなった。

臙月夜の尚侍も静かな院の中にいて、過去を思う時々、源氏と

した恋愛の昔が今も身にしむことに思われた。近ごろでも源氏は好便に託して文通をしているのであった。太后は政治に御一註文をお持ちになる時とか、御自身の推薦権の与えられておいでになる限られた官爵の運用についてとかに思召しの通らない時は、長生きをして情けない末世に苦しむというようなことをお言い出しになり、御無理も仰せられた。年を取っておいでになるにしたがって、強い御氣質がますます強くなって院もお困りになるふうであった。

源氏の公子はその日の成績がよくて進士になることができた。碩学の人たちが選ばれて答案の審査にあたったのであるが、及第は三人しかなかったのである。そして若君は秋の除目の時に侍従に任せられた。雲井の雁を忘れる時がないのであるが、大臣が嚴重に監視しているのも恨めしくて、無理をして逢ってみようともしなかった。手紙だけは便宜を作って送るといふような苦しい恋を二人はしているのであった。

源氏は静かな生活のできる家を、なるべく広くおもしろく作って、別れ別れにいる、たとえば嵯峨の山荘の人などおいつしよに住ませたいという希望を持って、六条の京極の辺に中宮の旧邸のあったあたり四町四面を地域にして新邸を造営させていた。式部卿の宮は来年が五十におなりになるのであったから、紫夫人はその賀宴をしたいと思つて仕度をして見ているのを見て、源氏もそれはぜひともしなければならぬことであると思ひ、そうした式もなるべくは新邸でするほうがよいと、そのためにも建築を急がせていた。春になつてからは専念に源氏は宮の五十の御賀の用意をしていた。落し忌の饗宴のこと、その際の音楽者、舞い人の選定などは源氏の引き受けていることで、付帯して行なわれる仏事の日の経巻や仏像の製作、法事の

僧たちへ出す布施ふせの衣服類、一般の人への纏頭てんとうの品々は夫人が力を傾けて用意していることであつた。東の院でも仕事を分担して助けていた。花散里夫人と紫の女王にょおうとは同情を互いに持つて美しい交際をしているのである。世間までがこのために騒ぐように見える大仕掛けな賀宴のことを式部卿の宮もお聞きになつた。これまではだれのためにも慈父のような広い心を持つ源氏であるが御自身と御自身の周囲の者にだけは冷酷な態度を取り続けられておいでになるのを、源氏の立場になつてみれば、恨めしいことが過去にあつたのである。うと、その時代の源氏夫婦を今さら気の毒にもお思いになり、こうした現状を苦しがつておいでになつたが、源氏の幾人もある妻妾さいしやうの中の最愛の夫人で女王があつて、世間から敬意を寄せられていることも並み並みでない人が娘であることは、その幸福が自家へわけられぬものにもせよ、自家の名誉であることには違ひないと思つておいでになつた。それに今度の賀宴が、源氏の勢力のもとでかつてない善美を尽くした準備が調えられているということをお知りになつたのであるから、思いがけぬ老後の光栄を受けると感激しておいでのなるが、宮の夫人は不快に思つていた。女御にょごの後宮の競争にも源氏が同情的態度に出ないことで、いよいよ恨めしがつていたのである。

八月に六条院の造営が終わつて、二条の院から源氏は移転することなつた。南西は中宮の旧邸のあつた所であるから、そこは宮のお住居すまいになるはずである。南の東は源氏の住む所である。北東の一帯は東の院の花散里、西北は明石夫人あかしと決めて作られてあつた。もとからあつた池や築山つきやまも都合の悪いのはこわして、水の姿、山の趣も改めて、さまざまに住み主の希望を入れた庭園が作られたのであ

る。南の東は山が高く、春の花の木が無数に植えられてあった。池がことに自然にできていて、近い植え込みの所には、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などを主にして、その中に秋の草木がむらむらに混ぜてある。中宮のお住居の町はもとの築山に、美しく染む紅葉を植え加えて、泉の音の澄んで遠く響くような工作がされ、流れがきれいな音を立てるような石が水中に添えられた。滝を落として、奥には秋の草野が続けられてある。ちようどその季節であつたから、嵯峨の大井の野の美観がこのために軽蔑されてしまいそうである。北の東は涼しい泉があつて、ここは夏の庭になっていた。座敷の前の庭には呉竹がたくさん植えてある。下風の涼しさが思われる。大木の森のような木が深く奥にはあつて、田舎らしい卯の花垣などがわざと作られていた。昔の思われる花橘、撫子、薔薇、木丹などの草木を植えた中に春秋のものも配してあつた。東向いた所は特に馬場殿になっていた。庭には埒が結ばれて、五月の遊び場所ができていたのである。菖蒲が茂らせてあつて、向かいの厩には名馬ばかりが飼われていた。北西の町は北側にずっと倉が並んでいるが、隔ての垣には唐竹が植えられて、松の木の多いのは雪を楽しむためである。冬の初めに初霜のとまる菊の垣根、朗らかな柞原、そのほかにはあまり名の知れていないような山の木の枝のよく繁つたものなどが移されて来てあつた。

秋の彼岸のころ源氏一家は六条院へ移って行った。皆一度にと最初源氏は思ったのであるが、仰山らしくなることを思つて、中宮のおはいりになることは少しお延ばしさせた。おとなしい、自我を出さない花散里を同じ日に東の院から移転させた。春の住居は今の季節ではないようなもののやはり全体として最もすぐれて見えるのが

ここであつた。車の数が十五で、前駆には四位五位が多くて、六位の者は特別な縁故によつて加えられたにすぎない。たいそうらしくなることは源氏が避けてしなかつた。もう一人の夫人の前駆その他もあまり落とさなかつた。長男の侍従がその夫人の子になっているのであるからもつともなことであると思えた。女房たちの部屋の配置、こまごまと分けて部屋数の多くできていることなどが新郎の建築のすぐれた点である。五、六日して中宮が御所から退出しておいでになつた。その儀式はさすがにまた派手なものであつた。源氏を後援者にしておいでになる方という幸福のほかにも、御人格の優しさと高潔さが衆望を得ておいでになることがすばらしいお后様であつた。この四つに分かれた住居は、塀を仕切りに用いた所、廊で続けられた所などもこもごもに混ぜて、一つの大きい美観が形成されてあるのである。九月にはもう紅葉がむらむらに色づいて、中宮の前のお庭が非常に美しくなつた。夕方に風の吹き出した日、中宮はいろいろの秋の花紅葉を箱の蓋に入れて紫夫人へお贈りになるのであつた。やや大柄な童女が深紅の袖を着、紫苑色の厚織物の服を下に着て、赤一朽葉色の汗衫を上にした姿で、廊の縁側を通り渡殿の反橋を越えて持つて来た。お后が童女をお使いになることは正式な場合にあそばさないことなのであるが、彼らの可憐な姿が他の使いにまさると宮は思召したのである。御所のお勤めに馴れている子供は、外の童女と違った洗練された身のとりなしも見えた。お手紙は、

「#ここから2字下げ」

心から春待つ園はわが宿の紅葉を風のつてにだに見よ

「#ここで字下げ終わり」

というのであった。若い女房たちはお使いをもてはやしていた。こちらからはその箱の蓋へ、下に苔こけを敷いて、岩すを据えたのを返しにした。五葉の枝につけたのは、

「#ここから2字下げ」

風に散る紅葉は軽し春の色を岩根の松にかけてこそ見め

「#ここで字下げ終わり」

という夫人の歌であった。よく見ればこの岩は作り物であった。すぐにこうした趣向のできる夫人の才に源氏は敬服していた。女房たちも皆おもしろがっているのである。

「紅葉の贈り物は秋の御自慢なのだから、春の花盛りにこれに対することは言っておあげなさい。このごろ紅葉を悪口することは立田たつた姫に遠慮すべきだ。別な時に桜の花を背景にしてものを言えば強いことも言われるでしょう」

こんなふうにいづまでも若い心の衰えない源氏夫婦が同じ六条院の人として中宮と風流な戯れをし合っているのである。大井の夫人は他の夫人のわたましがすっかり済んだあとで、価値のない自分などはそっと引き移ってしまいたいと思っていて、十月に六条院へ来たのであった。住居すまいの中の設備も、移って来る日の儀装のことも源氏は他の夫人に劣らせなかった。それは姫君の将来のことを考えているからで迎えてからも重々しく取り扱った。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月15日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

玉鬘

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）類^ほの

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）三日—参籠^{さんろう}する

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」火のくにおひいでたれば言ふことの

「#地から3字上げ」皆恥づかしく類^ほの染まるかな（晶子）

年月はどんなにたっても、源氏は死んだ夕顔のことを少しも忘れずにいた。個性の違った恋人を幾人も得た人生の行路に、その人がいたならばと遺憾に思われることが多かった。右近は何でもない平凡な女であるが、源氏は夕顔の形見と違って庇護するところがあつ

たから、今日では古い女房の一人になって重んぜられもしていた。須磨へ源氏の行く時に夫人のほうへ女房を皆移してしまつたから、今では紫夫人の侍女になつてゐるのである。善良なおとなしい女房と夫人も認めて愛していたが、右近の心の中では、夕顔夫人が生きていたなら、明石夫人が愛されてゐるほどには源氏から思われておいでになるであろう、たいした恋でもなかつた女性たちさえ、余さず将来の保証をつけておいでになるような情け深い源氏であるから、紫夫人などの列にははいらなくても、六条院へのわたましの夫人の中にはおいでになるはずであるといつても悲しんでいた。西の京へ別居させてあつた姫君がどうなつたかも右近は知らずにいた。夕顔の死が告げてやりにくい心弱さと、今になって相手の自分であつたことは知らせないようにと源氏から言われたことでの遠慮とが、右近のほうから尋ね出すことをさせなかつた。そのうちに、乳母の良人が九州の少弐に任せられたので、一家は九州へ下つた。姫君の四つになる年のことである。乳母たちは母君の行くえを知ろうといろいろの神仏に願を立て、夜昼泣いて恋しがつていたが何のかいもなかつた。しかたがない、姫君だけでも夫人の形見に育てていたい、卑しい自分らといつしよに遠国へおつれすることを悲しんでいると父君のほうへほめかしたとも思つたが、よいつてはなかつた。その上母君の所在を自分らが知らずにいては、問われた場合に返辞のしようもない。よく馴染んでおいでにならない姫君を、父君へ渡して立つて行くのも、自分らの気がかり千万なことであらうし、話をお聞きになつた以上は、いつしよにつれて行つてもよいと父君が許されるはずがないなどと言い出す者もあつて、美しくて、すでにもう高貴な相の備わつてゐる姫君を、普通の旅役人の船に乗せて立つ

て行く時、その人々は非常に悲しかった。幼い姫君も母君を忘れずに、

「お母様の所へ行くの」

と時々尋ねることが人々の心をより切なくした。涙の絶え間もないほど夕顔夫人を恋しがって娘たちの泣くのを、

「船の旅は縁起を祝って行かなければならないのだから」

とも親たちは小言こごとを言った。美しい名所名所を見物する時、

「若々しいお気持ちの方で、お喜びになるでしょうから、こんな景色をお目にかきたい。けれども奥様がおいでになつたら私たちは旅に出てないわけですね」

こんなことを言つて、京ばかりの思われるこの人たちの目には帰つて行く波もうらやましかつた。心細くなつている時に、船夫かこたちは荒々しい声で「悲しいものだ、遠くへ来てしまった」という意味の唄うたを唄う声が聞こえてきて、姉妹きょうだいは向かい合つて泣いた。

「#ここから2字下げ」

船人もたれを恋ふるや大島のうら悲しくも声の聞こゆる

来こし方も行ゆく方も知らぬ沖へに出いでてあはれ何いづ処こに君を恋ふらん

「#ここで字下げ終わり」

海の景色を見てはこんな歌も作っていた。金の岬みさきを過ぎても「千早ちちは振る金の御崎みさきを過ぐれどもわれは忘れずしがのすめ神」という歌のように夕顔夫人を忘れることができずに娘たちは恋しがつた。少弐一家は姫君をかしずき立てることだけを幸福に思つて任地で暮らしていた。夢などにたまさか夕顔の君を見ることもあつた。同じよ

うな女が横に立っているような夢で、その夢を見たあとではいつもその人が病氣のようになることから、もう死んでおしまいになったのであろうと、悲しいが思うようになった。

少式は任期が満ちた時に出家しようと思ったが、出家して失職しているより、地方にこのままいるほうが生活の楽な点があつて、思いつて上京することもようしなかった。その間に当人は重い病氣になった。少式は死ぬまぎわにも、もう十歳とおぐらいになつていて、非常に美しい姫君を見て、

「私までもお見捨てすることになれば、どんなに御苦勞をなされることだろう、卑しい田舎いなかでお育ちになつてゐることももつたいないことと思つておりましたが、そのうち京へお供して参つて、御肉身のかたがたへお知らせ申し、その先はあなた様の運命に任せるといふたしましても、京は広い所ですから、よいこともきつとあつて、安心がさせていただけると思ひまして、その実行を早く早くとあせるように思つておりましたが、希望の実現どころか、私はもうここで死ぬことになりました」

と悲痛なことを言つていた。三人の男の子に、

「おまえたちは何よりせねばならぬことを、姫君を京へお供することと思へ。私のための仏事などはするに及ばん」

と遺言をした。父君のだれであるかは自身の家の者にも言わずに、ただ大切にする訳のある孫であると言つてあつて、大事にかしづいてゐるうちに、こんなふうでにわかになつたのであつたから、家族は心細がつて京への出立を急ぐのであるが、この国には故人の少式に反感を持つていた人が多かつたから、そんな際に報復を受けることが恐ろしくて、今しばらく今しばらくとはばかり暮らしている

間にも、年月がどんどんたつてしまった。妙齢になつた姫君の容貌は母の夕顔よりも美しかった。父親のほうの筋によるのか、気高い美がこの人には備わっていた、性質も貴女らしくおおようであった。故人の少弐の家に美しい娘のいる噂を聞いて、好色な地方人などが幾人も結婚を申し込んだり、手紙を送つて来たりする。失敬なことであるとも、とんでもないことであるとも思つて、だれ一人これに好意を持つてやる者はなかつた。

「容貌はまず無難でも、不具なところが身体にある孫ですから、結婚はさせずに尼にして自分の生きている間は手もとへ置く」

乳母はこんなことを宣伝的に言っているのである。

「少弐の孫は片輪だそうだ、惜しいものだ、かわいそうに」

と人が言うのを聞くと、乳母はまた済まない気がして、「どんなにしても京へおつれしてお父様の殿様にお知らせしよう、まだごく小さい時にも非常におかわいがりになつていたので、今になつても決してそまつにはあそばすまい」

と乳母は興奮する。その実現されるように神や仏に願を立てていた。娘たちも息子たちも土地の者と縁組みをして土着せねばならぬように傾いていく。心の中では忘れないが京はいよいよ遠い所になつていった。大人になつた姫君は、自身の運命を悲しんで一年の三度の長精進などもしていた。二十ぐらいになるとすべての美が完成されて、まばゆいほどの人になつた。この少弐一家のいる所は肥前の国なのである。その辺での豪族などは、少弐の孫の噂を聞いて、今でも絶えず結婚を申し込んでくる、うるさいほどに。

大夫の監と言つて肥後に聞こえた豪族があつた。その国ではずいぶん勢いのある男で、強大な武力を持っているのである。そんな田

舎武士の心にも、好色的な風流気があつて、美人を多く妻妾さいしやうとして集めたい望みを持っているのである。少弐家の姫君のことを大夫の監は聞きつけて、

「どんな不具なところがあつても、自分はその点を我慢することにして妻にしたい」

と懇切に求婚をしてきた。少弐の人たちは恐ろしく思った。

「どんないい縁談にも彼女は耳をかさないで尼になろうとします」

と中に立った人から断わらせた。それを聞くと監は不安がつて、自身で肥前へ出て来た。少弐家の息子たちを監は旅宿へ呼んで姫君との縁組みに助力を求めたのであつた。

「成功すれば、両家は力になり合つて、あなたがたに武力の後援を惜しむものですか」

などと言つてくれる監けんに二人の息子だけは好意を持ちだした。

「私たちも初めは不似合いな求婚者だ、お気の毒だと姫君のことを思つてましたが、考えてみると、自分たちの後ろ立てにするのには最も都合のいい有力な男ですから、この人に敵対をされては肥前あたりで何をするとも不可能だということがわかつてきました。貴族の姫君だと言つても、父君が打つちやつてお置きになるし、世間からも認められていないではしかたがありません。こんなに熱心になつている監と結婚のできるのはかえつて幸福だと思いますよ。この宿命のあるために九州などへ姫君がおいでになることにもなつたのでしよう。逃げ隠れをなすつても何になるものですか。負けてなにかいけませんからね、監は。常識で考えられる以上の無茶なことでも監はしますよ」

と兄弟は家族をおどすのである。長兄の豊後介ぶんごのすけだけは監の味方ではなかった。

「もつたいないことだ。少弐の御遺言があるのだから、自分はどうしてもこの際姫君を京へお供しましょう」

と母や妹に言う。女たちも皆泣いて心配していた。母君がどうおなりになったか知れないようなことになって、せめて姫君を人並みな幸福な方にしないではと、自分らは念じているのに、田舎武士いなかざむらいなどに嫁とつがせておしまいすることなどは堪えうることでないと思っ
ていることも知らずに、自身の力を過信している監は、手紙を書いて送ってきたりするのである。字などもちよつときれいで、唐紙とうしに香の薫かおりの染しませたのに書いて来る手紙も、文章も物になってはいなかった。また自身も親しくなった少弐家の次男とつれ立たすって訪ねて来た。年は三十くらいの男で、背が高く、ものものしく肥っている。きたなくは思われないが、いろいろ先入主になっていることがあつて、見た感じがうとましい。荒々しい様子は見ただけでも恐ろしい気がした。血色がよくて快活ではあるが、酒かれ声で語り散らす。

求婚者は夜に訪問するものになっているが、これは風変わりな春の夕方のことであつた。秋ではないが怪しい気持ちいっ（何時いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べは怪しかりけり）になったのかもしれない。機嫌きげんをそこねまいとして未亡人のおとど「#「おとど」に傍点」が出て応接した。

「お亡かくれになった少弐は人情味のたつぷりとあるりつばなお役人でしたからぜひ御懇親を願いたいと思ひながら、こちらの尊敬心をお見せできなかったうちにお気の毒に死んでおしまいになったから、そのかわりに御遺族へ敬意を表しようと思つて、奮発して、一所懸

命になつて、しいて参りました。こちらにおいでになる姫君が御身分のいいことを私は聞いていて、尊敬申してますが、妻になつていただきたいのだ。我輩わがはいは一家の御主人と思つて頭の上へ載せんばかりにしてですね、大事にいたしますよ。あなたがこの縁組みにあまり御賛成にならないというのは、私がこれまで幾人ものつまらない女と関係してきたことで、いやがられているのではありませんか。たとえそんな女どもが私についているとしても、そいつらに姫君といつしよの扱いなどをするものですかい。我輩は姫君を后おくの位から落とすつもりはない」

などと勝手なことを監げんは言い続けた。

「いえ、不賛成などと、そんなことはありません。非常に結構なお話だと私は思っているのですがね。何という不運なのでしょう、あの人は並み並みに一人前の女に成り切っていないところがありましてね、自分は結婚のできない身体からだだとあきらめています、かわいそうでも、私どもの力ではどうにもならないのでございます」

と、おとど「#「おとど」に傍点」は言った。

「決して遠慮をなさるには及びませんよ。どんな盲目めくらでも、いざりでも私は護まもつていつてあげます。我輩わがはいが人並みの身体に直してあげますよ。肥後一国の神仏は我輩の意志どおり何事も加勢してくれまますからね」

などと監げんは誇こっていた。結婚の日どりも何日いつごろというふうなことを監が言つと、おとど「#「おとど」に傍点」のほうでは、今月は春の季の終わりで結婚によろしくないというような田舎めいた口実で断わる。縁側えんがわから下りて行く時になつて、監は歌を作つて見せなくなつた。やや長く考えてから言い出す。

「#ここから1字下げ」

「君にもし心たがはば松浦まつらなるかがみの神をかけて誓はん

「#ここで字下げ終わり」

この和歌は我輩の偽らない感情がうまく表現できたと思います」

と監は笑顔えがおを見せた。おとど「#「おとど」に傍点」はすべての

ことが調子はずれな田舎武士に、返歌などをする気にはなれないのであったが、娘たちに歌を詠めよめと言うと、

「私など、お母さんだってそうでしょう。自失ていしている体よ」

こう言って聞かない。おとど「#「おとど」に傍点」は興味のない返歌をやつと出まかせふうふうに言った。

「#ここから2字下げ」

年を経て祈る心のたがひなばかがみの神をつらしとや見ん

「#ここで字下げ終わり」

先刻からの気味悪さにおとど「#「おとど」に傍点」は慄ふるえ声になつていた。

「お待ちなさい。そのお返事の内容だが」

監けんがのっそりと寄つて来て、臍ふに落ちぬという顔をするのを見て、おとど「#「おとど」に傍点」は真青まっさおになってしまった。娘たちはあんなに言っていたものの、こうなつては気強く笑つて出て行った。

「それはね、お嬢様が世間並みの方でないことから、母がこの御縁

の成立した時に、恨めしくお思いにならないかということをも、もうほけております母が神様のお名などを入れて、変に詠んだだけの歌ですよ」

とこじつけて聞かせた。正解したところで求婚者へのお愛想歌なのであるが、

「ああもつとも、もつとも」

とうなずいて、監は、

「技巧が達者なものです。我輩は田舎者ではあるが賤民じゃないのです。京の人でもたいしたものでないことを我輩は知っている。

軽蔑してはいけませんよ」

と言ったが、もう一首歌を作ろうとして、できなかつたのかそのまま帰って行った。次郎がすっかりあちらがたになつてゐるのを家族は憎みながらも、豊後介の助けを求めることが急であつた。どうして姫君にお尽くしすればよいか、相談相手はなし、親身の兄弟までが監に反対すると言つて、異端者扱いにして自分と絶交する始末である。監の敵になつてはこの地方で何一つ仕事はできないだろう、手出しをしてかえつて自分から不幸を招きはしまいかと豊後介は煩悶をしたのであるが、姫君が口では何事も言わずにこのことで悲しんでいる様子を見ると、気の毒で、そうなれば死のうと決心している様子が道理に思われ、豊後介は苦しい策をして姫君の上京を助けることにした。妹たちも馴染んだ良人を捨てて姫君について行くことになつた。あてき「#「あてき」に傍点」と言つて、夕顔夫人の使つていた童女は兵部の君という女房になつていて、この女たちが付き添つて、夜に家を出て船に乗つた。大夫の監はいったん肥後へ帰つて四月二十日ごろに吉日を選んで新婦を迎えに来ようとしてい

るうちに、こうして肥前を脱出するのである。姉は子供もおおぜいになっていて同行ができないのである。行く人、残る人が名残を惜しんで、また見る機会のないことを悲しむのであったが、行く人にとっては長い年月をここで送ったのではあっても、見捨てがたいほど心の残るものは何もこの土地になかった。ただ松浦の宮の前の海岸の風光と姉娘と別れることだけがだれにもつらかった。顧みもされた。

「#ここから2字下げ」

浮島を漕ぎ離れても行く方やいづくともりと知らずもあるかな
行くさきも見えぬ波路に船出して風に任する身こそ浮きたれ

「#ここで字下げ終わり」

初めのは兵部の作で、あとは姫君の歌である。心細くて姫君は船でうつ伏しになっていた。こうして逃げ出したことが肥後に知れたなら、負けぎらいな監は追って来るであろうと思われるのが恐ろしくて、この船は早船といって、普通以上の速力が出るように仕かけてある船であったから、ちょうど追い風も得て危ういほどにも早く京をさして走った。響の灘も無事に過ぎた。海上生活二、三日のうちである。

「海賊の船なんだろうか、小さい船が飛ぶように走って来る」
などと言う者がある。惨酷な海賊よりも少弐の遺族は大夫の監をもっと恐れていて、その追っ手ではないかと胸を冷やした。

「#ここから2字下げ」

憂きことに胸のみ騒ぐひびきには響の灘も名のみなりけり

「#ここで字下げ終わり」

と姫君は口ずさんでいた。川尻かわじりが近づいたと聞いた時に船中の人
 ははじめてほっとした。例の船子かこは「唐泊からいまりより川尻押すほどは」と
 唄うたっていた。荒々しい彼らの声も身に沁しんだ。豊後介ぶんごのすけはしみじみす
 る声で、愛する妻子も忘れて来たと言われていたとき、その歌のと
 おりに自分も皆捨てて来た、どうなるであろう、力になるような郎
 党は皆自分がつれて来てしまった。自分に対する憎悪そっおの念から大夫
 の監は彼らに復讐をしないであろうか、その点を考えないで幼稚な
 考えで、脱出して来たと言われ、こんなことが思われて、気の弱くなった
 豊後介は泣いた。「胡地妻子虚棄損へこちらのさいしをむなくすつ」
 とこう兄の歌っている声を聞いて兵部も悲しんだ。自分のしてい
 ることは何事であろう、愛してくれる男ににわかにならぬで出て来
 たことをどう思っているであろうと、こんなことが思われたのであ
 る。京へはいつでも自分らは帰って行く邸やしきなどはない、知人の所と
 いても、たよって行ってよいほど頼もしい家もない、ただ一人の
 姫君のために生活の根拠のできていた土地を離れて、空想の世界へ
 踏み入ろうとする者であると豊後介は考えさせられた。姫君をもど
 うするつもりでいるのであると自身であきらめながらも今さらしか
 たがなくそのまま一行は京へは行った。九条に昔知っていた人の
 残っていたのを捜し出して、九州の人たちは足どまりにした。ここ
 は京の中ではあるがはかばかしい人の住んでいる所でもない町であ
 る。外で働く女や商人の多い町の中で、悲しい心を抱いて暮らして
 いたが、秋になるといっそう物事が身に沁しんで思われて過去からも、

未来からも暗い影ばかりが投げられる気がした。信頼されている豊後介も、京では水鳥が陸へ上がったようなもので、職を求めるとも知らないものであった。今さら肥前へ帰るのも恥ずかしくてできないことであつた。思慮の足りなかつたことを豊後介は後悔するばかりであるが、つれて来た郎党も何かの口実を作つて一人去り二人去り、九州へ逃げて帰る者ばかりであつた。無力な失職者になつていゝる長男に同情したようなことを母のおとど「#「おとど」に傍点」が言つと、

「私などのことは何でもありません。姫君を護つていゝることができれば、自分の郎党などは一人もなくなつてもいいのですよ。どんなに自分らが強力な豪族になつたつても、姫君をあゝした野蛮な連中に取られてしまえば、精神的に死んでしまつたのも同然ですよ」

と豊後介は慰めるのであつた。

「神仏のお力にすぎればきつと望みの所へ導いてくださるでしょうから、お詣りをなさるがいいと思ひます。ここから近い八幡の宮は九州の松浦、箱崎と同じ神様なのですから、あちらをお立ちになる時、お立てになつた願もありますから、神の庇護で無事に帰京しましたというお礼参りをなさいませ」

と豊後介は言つて、姫君に八幡詣りをさせた。八幡のことにくわしい人に聞いておいて、御師といふ者の中に、昔親の少弐が知つていた僧の残つていゝるのを呼び寄せて、案内をさせたのである。

「このつぎには、仏様の中で長谷の観音様は靈験のいちじるしいものがある支那にまで聞こえていゝるそうですから、お参りになれば、遠国にいて長く苦勞をなすつた姫君をきつとお憐みになつてよいことがあるでしょう」

また豊後介は姫君に長谷詣はせもぎでを勧めて実行させた。船や車を用いず徒歩で行くことにさせたのである。かつて経験しない長い路みちを歩くことは姫君に苦しかったが、人が勧めるとおりにして、つらさを忍んで夢中で歩いて行つた。自分は前生にどんな重い罪障があつてこの苦しみに堪えねばならないのであろう、母君はもう死んでおいでになるにしても、自分を愛してくださいさるならその国へ自分をつれて行ってほしい。しかしまだ生きておいでになるのならお顔の見られるようにしていただきたくないと姫君は観音を念じていた。姫君は母の顔を覚えていなかった。ただ漠然はくぜんと親というものの面影おもかげを今日まで心に作つて来ているだけであつたが、こうした苦難に身を置いたでは、いつそう親というものの恋しさが切実に感ぜられるのであつた。ようやく椿市つばいちという所へ、京を出て四日めの昼前に、生きていく気もしないで着いた。姫君は歩行らしい歩行もできずに、しかもいろいろな方法で足を運ばせて来たが、もう足の裏が腫はれて動かせない状態になつて椿市で休息をしたのである。頼みにされている豊後介と、弓矢を持った郎党が二人、そのほかは僕しもべと子供侍が三、四人、姫君の付き添いの女房は全部で三人、これは髪の上から上着を着た壺装束つぼしょうそくをしていた。それから下女が二人、これが一行で、派手はでな長谷詣りの一行ではなかつた。寺へ燈明料を納めたりすることここで頼んだりしているうちに日暮れ時になつた。この家の主人あるじである僧が向こうで言っている。

「私には今夜泊めようと思つているお客があつたのだのに、だれを勝手に泊めてしまったのだ、物知らずの女どもめ、相談なしに何をしたのだ」

怒おこっているのである。九州の一行は残念な気持ちでこれを聞いて

いたが、僧の言ったとおりには参詣者の一団が町へはいって来た。これも徒歩で来たものらしい。主人らしいのは二人の女で召使の男女の数は多かった。馬も四、五匹引かせている。目だたぬようにしているが、きれいな顔をした侍などもついていた。主人の僧は先客があつてもその上にどうかしてこの連中を泊めようとして、道に出て頭を掻きながら、ひよこひよここと追従じゆじゆをしていた。かわいそうな気はしたが、また宿を変えるのも見苦しいことであるし、面倒めんどうでもあつたから、ある人々は奥のほうへはいり、残りの人々はまた見えないう部屋へやのほうへやったりなどして、姫君と女房たちとだけはもとの部屋の片すみのほうへ寄つて、幕のようなもので座敷の仕切りをして済ませていた。あとの客も無作法な人たちではなかった。遠慮深く静かで、双方ともつつましい相い客になっていた。このあとから来た女というのは、姫君を片時も忘れずに恋しがっている右近であった。年月がたつにしたがつて、いつまでも続けている女房勤めも気がさすように思われて、煩悶はんもんのある心の慰めに、この寺へたびたび詣まっているのである。長い間の経験で徒歩の旅を大儀とも何とも思っているのではなかったが、さすがに足はくたびれて横になっていた。こちらの豊後介は幕の所へ来て、食事なのであろう、自身で折敷おしきを持って言っていた。

「これを姫君に差し上げてください。膳ぜんや食器なども寄せ集めのもので、まったく失礼なのです」

右近はこれを聞いていて、隣にいる人は自分らの階級の人ではないらしいと思つた。幕の所へ寄つてのぞいて見たが、その男の顔に見覚えのある気がした。だれであるかはまだわからない。豊後介のごく若い時を知っている右近は、肥えて、そうして色も黒くなつて

いる人を今見て、直ぐには思い出せないのである。

「三条、お召しですよ」

と呼ばれて出て来る女を見ると、それも昔見た人であった。昔の夕顔夫人に、下の女房ではあったが、長く使われていて、あの五条の隠れ家にまでも来ていた女であることがわかった右近は、夢のよいうな気がした。主人である人の顔を見たく思っても、それはのぞいて見られるようなふうにはしていなかった。思案の末に右近は三条に聞いてみよう、兵藤太と昔言われた人もこの男であろう、姫君がここにおいでになるのであるだろうかと思うと、気が急いで、そしてまた不安でならないのであった。幕の所から三条を呼ばせたが、熱心に食事をしている女はすぐに出て来ないのを右近は憎くさえ思ったが、それは勝手すぎた話である。やっと出て来た。

「どうもわかりません。九州に二十年も行っておりました卑しい私どもを知っておいでになるとおっしゃる京のお方様、お人違いではありませんか」

と言う。田舎風いなかに真赤まっかな搔練かいねりを下に着て、これも身体からだは太くなっていた。それを見ても自身の年が思われて、右近は恥ずかしかった。「もつと近くへ寄って私を見てごらん。私の顔に見覚えがありますか」

と言って、右近は顔をそのほうへ向けた。三条は手を打って言った。

「まああなたでいらつしやいましたね。うれしいって、うれしいって、こんなこと。まああなたはどちらからお参りになりました。奥様はいらつしやいますか」

三条は大声をあげて泣き出した。昔は若い三条であったことを思い出すと、このなりふりにかまわぬ女になっていることが右近の心を物哀れにした。

「おとど」「#「おとど」に傍点」さんはいらっしゃいますか。姫君はどうおなりになりました。あてき「#「あてき」に傍点」と言った人は「

と、右近はたたみかけて聞いた。夫人のことは失望をさせるのがつらくてまだ口に出せないのである。

「皆、いらっしゃいます。姫君も大人おとなになっておいでになります。何よりおとど」「#「おとど」に傍点」さんにこの話を「

と、言つて三条は向こうへ行つた。九州から来た人たちの驚いたことは言うまでもない。

「夢のような気がします。どれほど恨んだかしのれない方にお目にかかることになりました」

おとど「#「おとど」に傍点」はこう言つて幕の所へ来た。もうあちらからも、こちらからも隔てにしてあつた屏風びんぶなどは取り払つてしまった。右近もおとど「#「おとど」に傍点」も最初はものが言えずに泣き合つた。やつとおとど「#「おとど」に傍点」が口を開いて、

「奥様はどうおなりになりました。長い年月の間夢にでもいらつしやる所を見たいと大願を立てましたがね、私たちは遠い田舎の人になつていたのですからね、何の御様子も知ることができません。悲しんで、悲しんで、長生きすることが恨めしくてならなかつたのですが、奥様が捨ててお行きになつた姫君のおかわいのお顔を拝見しては、このまま死んでは後世ごせの障りさわになると思ひましてね、今でも

お護りしています」

おとど「#「おとど」に傍点」の話し続ける心持ちを思つては、昔あの時に気おくれがして知らせられなかつたよりも、幾倍かのつらさを味わいながらも、絶体絶命のようになって、右近は、

「お話ししてもかいのないことでございますよ。奥様はもう早くお亡れになつたのですよ」

と言つた。三条も混ぜて三人はそれから咽せ返つて泣いていた。

日が暮れたと騒ぎ出し、お籠りをする人々の燈明が上げられたと宿の者が言つて、寺へ出かけることを早くと急がせに來た。そのために双方ともまだ飽き足らぬ気持ちで別れねばならなかつた。

「ごいっしょにお詣りをしましょうか」

とも言つたが、双方とも供の者の不思議に思うことを避けて、おとど「#「おとど」に傍点」のほうではまだ豊後介にも事實を話す間がないままで同時に宿坊を出た。右近は人知れず九州の一行の中の姫君の姿を目に探っていた。そのうちに美しい後姿をした一人の、非常に疲労した様子で、夏の初めの薄絹の単衣のような物を上から着て、隠された髪の透き影のみごとそうな人を右近は見つけた。お気の毒であるとも、悲しいことであるとも思つてながめたのである。少し歩き馴れた人は皆らくらくと上の御堂へ着いたが、九州の一行は姫君を介抱しながら坂を上るので、初夜の勤めの始まるころにようやく御堂へ着いた。御堂の中は非常に混雑していた。右近が取らせてあつたお籠り部屋は右側の仏前に近い所であつた。九州の人の頼んでおいた僧は無勢力なのか西のほうの間で、仏前に遠かつた。

「やはりこちらへおいでなさいませ」

と云つて、右近が召使をよこしたので、男たちだけをそのほうに残して、おとど「#「おとど」に傍点」は右近との邂逅かいこうを簡単に豊後介へ語つてから、右近の部屋のほうへ姫君を移した。

「私などつまらない女ですが、ただ今の太政大臣様にお仕えしておりますのでね、こんな所に出かけていましても不都合はだれもしないであろうと安心していられるのですよ。地方の人らしく見ますと、生意気にお寺の人などは軽蔑けいべつした扱いをしますから、姫君にもったいなくて」

右近はくわしい話もしたのであるが、仏前の経声の大きいのに妨げられて、やむをえず仏を拜んでだけいた。

この方をお捜しくださいませ、お逢あわせくださいませとお願ひしておりましたことをおかなえくださいましたから、今度は源氏の大おと臣どがこの方を子にしてお世話をなさりたいと熱心おほしめに思召すことが実現されますようにお計らいくださいませ、そうしてこの方が幸福におなりになりますように。

と祈つていたのであつた。国々の参詣者さんけいが多かつた。大和守やまののかみの妻も来た。その派手はてな参詣さんけいぶりをうらやんで、三条は仏に祈つていた。

「大慈大悲の観音様、ほかのお願いはいっさいいたしません。姫君を大式だいしきの奥様でなければ、この大和の長官の夫人にしていただきたいと思ひます。それが事実になりました、私どもにも幸福が分けていただけました時に厚くお礼をいたします」

額に手を当てて念じているのである。右近はつまらぬことを言うとにがにがしく思った。

「あなたはとんでもないほど田舎者になりましたね。中将様は昔だ

「ってどうだったでしょう、まして今では天下の政治をお預かりになる大臣おとどですよ。そうしたお盛んなお家の方で姫君だけを地方官の奥さんという二段も三段も低いものにしてそれでいいのですか」
 と言うと、

「まあお待ちなさいよあなた。大臣様だって何だってだめですよ。大式のお館やかたの奥様が清水きよみずの観世音寺へお参りになった時の御様子を
 ご存じですか、帝様みかどの行幸みゆきがあれ以上のものとは思えません。あなた
 たは思い切ったひどいことをお言いになりますね」

こう言つて、三条はなお祈りの合掌を解こうとはしなかった。九州の人たちは三日一参籠さんろうすることにしていた。右近はそれほど長く
 いようとは思つていなかったが、この機会おりに昔の話も人々としたく
 思つて、寺のほうへ三日間参籠すると言わせるために僧を呼んだ。
 雑用をする僧は願文がんもんのことなどもよく心得ていて、すばやくいろいろの
 ことを済ませていく。

「いつもの藤原瑠璃君ふじわらのるりぎみという方のためにお経をあげてよくお祈りすると書いてください。その方にね、近ごろお目にかかることができましたからね。その願果たしもさせていただきます」

と右近の命じていることも九州の人々を感動させた。
 「それは結構なことでしたね。よくこちらでお祈りしているせいで
 しょう」

などとその僧は言っていた。御堂の騒ぎは夜通し続いていた。
 夜が明けたので右近は知つた僧の坊へ姫君を伴つて行った。静かに話
 したいと思うからであろう。質素なふうで来ているのを恥ずか
 しがっている姫君を右近は美しいと思つた。

「私は思いがけない大きなお邸やしきへお勤めすることになりました、た

くさんな女の方を見ましたが、殿様の奥様の御容貌ごけいように比べてよいほどの方はないと長い間思っていました。それにお小さいお姫様がまたお美しいことはもつともなことですが、そのお姫様はまたどんなに大事がられていらっしやるか、まったく幸福そのもののような方ですがね、こうして御質素なふうをなすっていらっしやる姫君を、私は拝見して、その奥様や二条院のお姫様に姫君が劣っていらっしやるように思われませんのでうれしゅうございます。殿様はおつしやいますのですよ、自分の父君の帝様みかどの時から宮中の女御にょごやお后おの、それから以下の女性は無数に見ているが、ただ今の帝様のお母様のお後の御美貌と自分の娘の顔とが最もすぐれたもので、美人とはこれを言うのであると思われらつて。私は拝見していて、そのお后様は存じませんけれど、お姫様はまだお小さくて将来は必ずすぐれた美人におなりになるでしょうが、奥様の御美貌に並ぶ人はないと思うのですよ。殿様も奥様のお美しさの価値を十分ご存じでいらっしやるでしょうが、御自分のお口から最上の美人の数へお入れにはなりにくいのですよ。こんなこともお言いになることがあるのですよ、あなたは私と夫婦になれたりしてもつたいたく思いませんかなどと戯談じょうだんをね。お二人のそろいもそろつたお美しさを拝見しているだけで命も延びる気がするのですよ。あんな方があるものでもありません、私がそんなに思う六条院の奥様にど一つ姫君は劣っていらっしやいません。物は限りがあつてすぐれた美貌と申しても円光を後ろに負つていらっしやるわけではありませんけれど、これがほんとうに美しいお顔と申し上げていいのでございましょう」

右近は微笑ほほえんで姫君をながめていた。少弐しよじの未亡人もうれしうである。

「こんなすぐれたお生まれつきの方を、もう一步で暗い世界へお沈めしてしまふところでしたよ。惜しくてもつたいなくて、家も財産も捨てて頼りにしてよい息子にも娘にも別れて、今ではかえって知らぬ他国のような心細い気のする京へ帰って来たのですよ。あなた、どうぞいい智慧を出してくださいって、姫君の御運を開いてあげてくださいまし。貴族のお家に仕えておいでになる方は、便宜がたくさんあるでしょう。お父様の大臣が姫君をお認めくださいますように計らってくださいまし」

とおとど「#「おとど」に傍点」は言うのであった。姫君は恥ずかしく思つて後ろを向いていた。

「それがね、私はつまらない者ですけれど、殿様がおそばで使つていてくださいますからね、昔のいろいろな話を申し上げる中で、どうなさいましたらうと私が姫君のことをよく申すものですから、殿様が、ぜひ自分の所へ引き取りたく思う。居所を聞き込んだら知らせるがいいとおっしゃるのですよ」

「源氏の大臣様はどんなにおりつばな方でも、今のお話のようなよい奥様や、そのほかの奥様も幾人かいらっしゃるのでしょうか。それよりもほんとうのお父様の大臣へお知らせする方法を考えてください」

とおとど「#「おとど」に傍点」が言うのを聞いて、右近ははじめて夕顔夫人を愛して、死の床に泣いた人の源氏であったことを話した。

「どうしてもお亡れになった奥様を忘れられなく思召してね。奥様の形見だと思つて姫君のお世話をしたい、自分は子供も少なくて物足りないのだから、その人が捜し出せたなら、自分の子を家へ迎え

たように世間へは知らせておこうと、それはずっと以前からそうおっしゃるのですよ。私の幼稚な心弱さから、奥様のお亡くなりになりましたことをあなたがたにお知らせすることができないでありますうちに、御主人が少弐におなりになったでしょう。それはお名を聞いて知ったのですよ。お暇乞いに殿様の所へおいでになりましたのを、私はちらとお見かけしましたが、何をお尋ねすることもできないじまいになったのですよ。それでもまだ姫君をあゝの五条の夕顔の花の咲いた家へお置きになって赴任をなさるのだと思っております。まあどうでしょう、もう一步で九州の人になっておしまいになるところでございましたね」

などと人々は終日昔の話をしたり、いっしよに念誦を行なったりしていた。御堂へ参詣する人々を下に見おろすことのできる僧坊であつた。前を流れて行くのが初瀬川である。右近は、

「#ここから1字下げ」

「二もとの杉のたちどを尋ねずば布留川のべに君を見ましや

「#ここで字下げ終わり」

ここでうれしい逢瀬が得られたと申すものでございます」と姫君に言った。

「#ここから2字下げ」

初瀬川はやくのことは知らねども今日の逢瀬に身さへ流れぬ

「#ここで字下げ終わり」

と言つて泣いている姫君はきわめて感じのよい女性であつた。これだけの美貌びぼうが備わつていても、田舎風いなかのやばな様子が添つていたら、どんなにそれを玉の瑕きずだと惜しまれることであろう、よくもこれほどりっぱな貴女にお育ちになつたものであると、右近は少弐未亡人に感謝したい心になつた。母の夕顔夫人はただ若々しくおおような柔らかい感じの豊かな女性というにすぎなかつた。これは容姿けだかに気高さのあるすぐれた姫君と見えるのであつた。右近はこれによつて九州という所がよい所であるように思われたが、また昔の朋輩ばいが皆一不恰好ぶかっこうな女になつていたのであつたから不思議でならなかつた。日が暮れると御堂に行き、翌日はまた坊に帰つて念誦ねんずに時を過ごした。秋風が溪たにの底から吹き上がつて来て肌寒はださむさの覚えられる所であつたから、物寂しい人たちの心はまして悲しかつた。姫君は右近の話から、人並みの運も持たないように悲観をしていた自分も、父の家の繁栄と、低い身分の人を母として生まれた子供たちさえも皆愛されて幸福になつていくことがわかつた上は、もう救われる時に達したのであるかもしれないという氣になつた。帰る時は双方でよく宿所を尋ね合つて、またわからなくなつてはと互いに十分の警戒をしながら別れた。右近の自宅も六条院に近い所であつたから、九州の人の宿とも遠くないことを知つて、その人たちは力づけられた氣がした。

右近は旅からすぐに六条院へ出仕した。姫君の話をする機会を早く得たいと思う心から急いだのである。門をはいるとすでにすべての空気に特別な豪華な家であることが感ぜられるのが六条院である。来る車、出て行く車が無数に目につく。自分などがこの家の一人の女房として自由に出入りをするのもまばゆい氣のすることである。

と右近に思われた。その晩は主人夫婦の前へは出ずに、部屋へ引きこもって右近はまた物思いをした。翌日は昨日自宅から上がって来た高級の女房が幾人もある中から、特に右近が夫人に呼び出されたのを、右近は誇らしく思った。源氏も夫人の居間にいた。

「どうして長く家へ行っていたのかね。少しこれまでとは違っているのではないか。独身者はこんな所にいる時と違って、自宅では若返ることもできるのだろう。おもしろいことがきつとあつたらう」

などと例の困らせる気の戯談を源氏が言う。

「ちようど七日お暇をいただきだったのでございますが、おもしろいことなどはなかなかないのでございます。山へ参りましてね。お気の毒な方を発見いたしました」

「だれ」

と源氏は尋ねた。突然その話をするのも、これまで夫人にしているない昔の話から筋を引いていることを、源氏にだけ言えば夫人があとで話をお聞きになつて不快がられないかなどと右近は迷っていて、

「まったくわしくお話を申し上げます」

と言って、ほかの女房たちも来たのでそのまま言いさしにした。

灯などをともさせてくつろいでいる源氏夫婦は美しかった。女王は二十七、八になった。盛りの美があるのである。このわずかな時日のうちにも美が新しく加わつたかと右近の目に見えるのであつた。姫君を美しいと思つて、夫人に劣っていないと見たものの思いなしか、やはり一段上の美が夫人にはあるようで幸福な人と不運な人にはこれだけの相違があるものらしいなどと右近は思った。寢室にはいつてから、脚を撫でさせるために源氏は右近を呼んだ。

「若い人はいやな役だと迷惑がるからね。やはり昔一馴染なじみの者は気が双方でわかっていてどんなことでもしてもらえるよ」

と源氏が言っているのを聞いて、若い女房たちは笑っていた。

「そうですよ。どんなことでもさせていだいて私たちは結構なんですけれど、あの御戯談ごじょうたんに困るだけね」

などと言っているのであった。

「奥さんも昔馴染どうしがあまり仲よくしては機嫌きげんを悪くなさらない。決して寛大な方ではないから危あぶないね」

などと言って源氏は笑っていた。愛嬌あいぎょうがあつて常よりもまた美しく思われた。このごろは公職が閑散なほうに変わってしまったて、自宅でもものんきに女房などにも戯談を言いかけて相手をためすことなどを楽しむ源氏であつたから、右近のような古女ふるおんなにも戯れてみせるのである。

「発見したつて、どんな人かね。えらい修験者しゆげんじやなどと懇意になつてつれて来たのか」

と源氏は言った。

「ひどいことをおっしゃいます。あの薄命な夕顔のゆかりの方を見つめましたのでございます」

「そう、それは哀れな話だね、これまでどこにいたの」と源氏に尋ねられたが、ありのままには言いくくって、

「寂しい郊外に住んでおいでになつたのでございます。昔の女房も半分ほどはお付きしてございますから、以前の話もいたしまして悲しゅうございました」

と右近は言っていた。

「もうわかつたよ。あの事情を知っていらっしやらない方がいられ

るのだからね」

と源氏が隠すように言うと、

「私がおじやまなの、私は眠くて何のお話だかわからないのに」

と女王にょおうは袖そでで耳をふさいだ。

「どんな容貌きりよう、昔の夕顔に劣っていない」

「あんなにはおなりにならないかと存じておりましたけれど、とてもおきれいにおなりになったようでございます」

「それはいいね、だれぐらい、この人とはどう」

「どういたしまして、そんなには」

と右近が言うと、

「得意なようで恥ずかしい。何にせよ私に似ていれば安心だよ」

わざと親らしく源氏は言うのであった。

その話を聞いた時から源氏はおりおり右近一人だけを呼び出して姫君の問題について語り合った。

「私はあの人を六条院へ迎えることにするよ。これまでも何かの場合によく私は、あの人に行くえを失ってしまったことを思っ暗い心になっていたのだからね。聞き出せばすぐにその運びにしなければならぬのを、怠っていることでも済まない気がする。お父さんの大臣に認めてもらう必要などはないよ。おおぜいの子供に大騒ぎをしていられるのだからね。たいした母から生まれたのでもない人がその中へは行って行っては、結局また苦勞をさせることになる。私のほうは子供の数が少ないのだから、思いがけぬ所で発見した娘だとも世間へは言っておいて、貴公子たちが恋の対象にするほどにも私はかすずいてみせる」

源氏の言葉を聞いていて、右近は姫君の運がこうして開かれて行

きそうであるとうれしかった。

「何も皆一思召し次第でございます。内大臣へお知らせいたしますのも、あなた様のお手でなくてはできないことでございます。不幸なお亡くなり方をなさいました奥様のかわりにもともかくも助けておあげになりましたなら罪がお軽くなります」

と右近が言うと、

「私をまだそんなふうにも責めるのだね」

源氏は微笑みながらも涙ぐんでいた。

「短いはない縁だったと、私はいつもあの人のことを思っている。この家に集まって来ている奥さんたちもね、あの時にあの人を思ったほどの愛を感じた相手でもなかったのが、皆あの人のように短命でないことだけで、私の忘れっぽい男でないのを見届けているのが多いのに、あの人の形見にはただ右近だけを世話していることが残念な気のすることは始終だったのに、そうして姫君を私の手もとへ引き取ることができればうれしいだろう」

こう言って、源氏は姫君へ最初の手紙を書いた。あの末摘花に幻滅を感じたことの忘れられない源氏は、そんなふう逆境に育った麗人の娘、大臣の実子も必ずしも期待にそむかないとは思われない不安さから手紙の返事の書きようでまずその人を判断しようとしたのである。まじめにこまごまと書いた奥には、

「#ここから1字下げ」

こんなに私があなただのことを心配していますことは、

「#ここから2字下げ」

知らずとも尋ねて知らん三島江に生ふる三稜のすぢは絶えじな

「#ここで字下げ終わり」

とも書いた。右近はこの手紙を自身で持って行って、源氏の意向を説明した。姫君用の衣服、女房たちの服の材料などがたくさん贈られた。源氏は夫人とも相談したものらしく、衣服係の所にできていた物も皆取り寄せて、色の調子、重ねの取り合わせの特にすぐれた物を選んで贈ったのであったから、九州の田舎いなかに長くいた人々の目に珍しくまばゆい物と映ったのはもったもなことである。姫君自身は、こんなにっぱな品々でなくても、実父の手から少しの贈り物でも得られたのならうれしいであろうが、知らない人と交渉を始めようなどとは意外であるというように、それとなく言って、贈り物を受けることを苦しく思うふうであったが、右近は母君と源氏との間に結ばれた深い因縁を姫君に言って聞かせた。人々も横から取りなした。

「そうして源氏の大臣の御厚意でごりっぱにさえおなりになりましたなら、内大臣様のほうからもごく自然に認めていただくことができます。親子の縁と申すものは絶えたようでも絶えないものがございます。右近でさえお目にかかりたいと一心に祈っていましたが結果はどうでございます。神仏のお導きがあったではございませんか。御双方ともお身体からださえお丈夫でいらっしゃればきつとお逢あいになれる時がまいります」

とも慰めるのである。まず早く返事と言って皆がかりで姫君を責めて書かせるのであった。自分はもうすっかり田舎者なのだからと姫君は書くのを恥ずかしく思うふうであった。用箋ようせんは薰物たきものの香を沁しませた唐紙とうしである。

「#ここから2字下げ」

数ならぬみくりや何のすぢなればうきにしもかく根をとどめけん

「#ここで字下げ終わり」

とほのかに書いた。字ははかない、力のないようにも見えるものであったが、品がよくて感じの悪くないのを見て源氏は安心した。

姫君を住ます所をどこにしようかと源氏は考えたが、南の一廓はあった御殿もない。華奢かしゃな生活のここが中心になっている所であるから、人出入りもあまりに多くて若い女性には気の毒である。中宮のお住居すまいになっっている一廓の中には、そうした人にふさわしい静かな御殿もあいているが、中宮の女房になったように世間へ聞かれてもよろしくないと思つて、少しじみな所ではあるが東北の花散はなちり里さとの住居の中の西の対は図書室になっっているのを、書物をほかへ移してそこへ住ませようという考えになつた。近くにいる人も気だての優しい、おとなしい人であるから、花散里と親しくして暮らすのもいいであろうと思つたのである。こうなつてから夫人にも昔の夕顔の話之源氏はしたのであつた。そうした秘密があつたことを知つて夫人は恨んだ。

「困るね。生きている人のことでは私のほうから進んで聞いておいてもらわねばならないこともありますかね。たとえこんな時にでも昔のそうした思い出を話すのはあなたが特別な人だからですよ」

こう言っている源氏には故人を思う情に堪えられない様子が見えた。

「自分の経験ばかりではありませんがね、他人のことでもよく見

ましたがね、女というものはそれほど愛し合っている仲でなくても、ずいぶん嫉妬しつとをするもので、それに煩わされている人が多いから、自分は恐ろしくて、好色な生活はすまいと念がけながらも、そのうち自然ほっしょうに放縦ほうじゆうにもなつて、幾人いくたりもの恋人を持ちましたが、その中で可憐かれんで可憐でならなく思われた女としてその人が思い出される。生きていたなら私は北の町にいる人と同じくらいには必ず愛しているでしょう。だれも同じ型の人はないものですが、その人は才女らしい、りっぱなというような点は欠けていたが、上品でかわいかった」

などと源氏が言うと、

「でも、明石あかしの波にくらべるほどにはどうだか」

と夫人は言った。今も北の御殿の人を、不当にすばらしく愛されている女であると夫人はねたんでいた。小さい姫君がかわいいふうをして前に聞いているのを見ると、夫人の言うほうがもつともであるかもしれないと源氏は思った。それらのことは皆九月のうちのことであった。

姫君が六条院へ移って行くことは簡単にもいかなかった。まずきれいな若い女房と童女を捜し始めた。九州にいたころには相当な家の出でありながら、田舎へ落ちて来たような女を見つけ次第に雇つて、姫君の女房に付けておいたのであるが、脱出のことがにわかに行なわれたためにそれらの人は皆捨てて来て、三人のほかにはだれもいなかった。京は広い所であるから、市女いちめというような者に頼んでおくと、上手じょうずに捜してつれて来るのである。だれの姫君であるかというようなことはだれにも知らせてないのである。いったん右近の五条の家に姫君を移して、そこで女房えを選びととのえもし衣服の

仕度したくも皆して、十月に六条院へはいった。源氏は新しい姫君のことを花散里に語った。

「私の愛していた人が、むやみに悲観して郊外のどこかへ隠れてしまっていたのですが、子供もあつたので、長い間私は捜させていたのですがなんら得る所がなくて、一人前の女になるまでほかに置いたわけなのですがその子のことが耳にはいった時にすぐにも迎えておかなければと思って、こちらへ来させることにしたのです。もう母親は死んでいるのです。中将をあなたの子供にしてもらっているのですから、もう一人あつたっていいでしょう。世話をしてやってください。簡単な生活をして来たのですから、田舎風なことが多いでしょう。何かにつけて教えてやってください」

「ほんとうにそんな方がおありになったのですか。私は少しも知りませんでした。お嬢さんがお一人で、少し寂しすぎましたから、いいことですね」

花散里はおおように言っている。

「母親だった人はとても善良な女でしたよ。あなたも優しい人だから安心してお預けすることができなのです」

などと源氏が言った。

「母親らしく世話を焼かせていただくこともこれまではあまり少なくて退屈でしたから、いいことだと思えます、ごいっしょに住むのは」

と花散里は言っていた。女房たちなどは源氏の姫君であることを知らずに、

「またどんな方をお迎えになるのでしょうか。同じ所へね。あまりに奥様を古物扱いにあそばすではありませんか」

と言っていた。

姫君は三台ほどの車に分乗させた女房たちといっしょに六条院へ移つて来た。女房の服装なども右近が付いていたから田舎びずに調えられた。源氏の所からそうした人たちに入り用な綾あやそのほかの絹布類は呈供してあつたのである。

その晩すぐに源氏は姫君の所へ来た。九州へ行っていた人たちは昔光源氏という名は聞いたこともあつたが、田舎住まいをしたうちにそのまねな美貌びぼうの人がこの世に現存していることも忘れていて今のかな灯ひの明りに几帳きちょうの綻ほころびから少し見える源氏の顔を見ておそろしくさえなつたのであつた。源氏の通つて来る所の戸口を右近があげると、

「この戸口をはいる特権を私は得ているのだね」

と笑いながらはいつて、縁側の前の座敷へすわつて、

「灯があまりに暗い。恋人の来る夜のようにではないか。親の顔は見たいものだと聞いているがこの明りではどうだろう。あなたはそう思いませんか」

と言つて、源氏は几帳を少し横のほうへ押しやった。姫君が恥ずかしかつて身体からだを細くしてすわっている様子に感じよさがあつて、源氏はうれしかった。

「もう少し明るくしてはどう。あまり気どりすぎているように思われる」

と源氏が言うので、右近は燈心を少し掻かき上げて近くへ寄せた。

「きまりを悪がりすぎますね」

と源氏は少し笑つた。ほんとうにと思つていような姫君の目つきであつた。少しも他人のようにには扱わないで、源氏は親らしく言

う。

「長い間あなたの居所がわからないので心配ばかりさせられましたよ。こうして逢あうことができて、まだ夢のような気がしてね。それに昔のことが思い出されて堪えられないものが私の心にあるのです。だから話もよくできません」

こう言って目をぬぐう源氏であった。それは偽りでなくて、源氏は夕顔との死別の場を悲しく思い出しているのであった。年を数えてみて、

「親子であつてこんなに長く逢えなかつたというようなことは例もないでしょう。恨めしい運命でしたね。もうあなたは少女のように恥ずかしがつてばかりいてよい年でもないのですから、今日までの話も私はしたいのに、なぜあなたは黙つてばかりいますか」

と源氏が恨みを言うのを聞くと、何と云つてよいかわからぬほど姫君は恥ずかしいのであつたが、

「足立たずで（かぞいろはいかに哀れと思ふらん三とせになりぬ足立たずして）遠い国へ流れ着きましたころから、私は生きておりましたことか、死んでおりましたことかわからないのでございます」

とほのかに言うのが夕顔の声そのままの語音ごいんであつた。源氏は微笑を見せながら、

「あなたに人生の苦しい道をばかり通らせて来た酬むくいは私がしないでだれにしてもらえますか」

と云つて、源氏は聡明そつめいらしい姫君の物の言いぶりに満足しながら、右近にいろいろな注意を与えて源氏は帰った。

感じのよい女性であつたことをうれしく思つて、源氏は夫人にもそのことを言つた。

「野蛮な地方に長くいたのだから、気の毒なものに仕上げられているだろうと私は軽蔑けいべつしていたが、こちらがかえって恥ちずかしくなるほどでしたよ。娘にこうした麗人れいじんを持つているということを世間へ知らせるようにして、よくおいでになる兵部卿へいぶけいの宮みやなどに懊惱あうなうをおさせするのだね。恋愛至上主義者も私の家うちではきまじめな方面しか見せないのも妙齡の娘などがいないからなのだ。たいそうにかしずいてみせよう、まだ成なっていない貴公子きこうしたちの懸想けんそうぶりをたんと拝見しよう」

と源氏が言うと、

「変な親心ね。求婚者の競争をあおるなどとはひどい方」

と女王じよおうは言う。

「そうだった、あなたを今のような私の心だったらそう取り扱あつかうのだった。無分別に妻などにはしないで、娘にしておくのだった」

夫人の顔を赤らめたのがいかにも若々しく見えた。源氏は硯すずりを手もとへ引き寄せながら、無駄むだ書きのように書いていた。

「#ここから2字下げ」

恋ひわたる身はそれながら玉鬘たまかつりいかなる筋すぢを尋ね来つらん

「#ここで字下げ終わり」

「かわいそうに」

とも独言ひとりごちしているのを見て、玉鬘の母であった人は、前に源氏の言ったとおり、深く愛あいしていた人らしいと女王は思った。

源氏は子息の中将にも、こうこうした娘を呼び寄せたから、気をつけて交際するがよいと言ったので、中將はすぐに玉鬘の御殿みどのへ訪

ねて行った。

「つまらない人間ですが、こんな弟がおりますことを御念頭にお置きくださいませ。御用があればまず私をお呼びになつてください。こちらへお移りになりました時も、存じないものでお世話をいたしませんでした」

と忠実なふうに言うのを聞いていて、真実のことを知っている者はきまり悪い気がするほどであった。物質的にも一所懸命の奉仕をしていた九州時代の姫君の住居も現在の六条院の華麗な設備に思い比べてみると、それは田舎らしいたまらないものであったようにおとど「#「おとど」に傍点」などは思われた。すべてが洗練された趣味で飾られた気高けだかい家において、親兄弟である親しい人たちは風采ふうさいを始めとして、目もくらむほどりっぱな人たちなので、こうなつてはじめて三条も大式を軽蔑けいべつしてよい気になつた。まして大夫の監げんは思い出すだけでさえ身ぶるいがされた。何事も豊後介ぶんごのすけの至誠たまものの賜物であることを玉鬘も認めていたし、右近もそう言つて豊後介を賞ほめた。確しかとした規律のある生活をするのにはそれが必要であると言つて、玉鬘付きの家従や執事が決められた時に豊後介もその一人に登用された。すっかり田舎上がりの失職者になつていた豊後介はにわかにも朗らかな身の上になつた。かりにも出入りする便宜などを持たなかつた六条院に朝夕出仕して、多数の侍を従えて執務することのできるようになったことを豊後介は思いがけぬ大幸福を得たと思つていた。これらもすべて源氏が思いやり深さから起こつたことと言わねばならない。

年末になつて、新年の室内装飾、春の衣裳いしやうを配る時にも、源氏は玉鬘を尊貴な夫人らと同じに取り扱つた。どんなに思いのほかによ

い趣味を知った人と見えても、またどんなまちがった物の取り合わせをするかもしれぬという不安な気持ちもあつて、玉鬘のほうへはすでに衣裳にでき上がった物を贈ることにしたが、その時にほうぼうの織物師が力いっぱい念を入れて作り出した厚織物の細長こつや小袿ちぎの仕立てたのを源氏は手もとへ取り寄せて見た。

「非常にたくさんありますね。奥さんたちなどにもそれぞれよい物を選えつて贈ることにしよう」

と源氏が夫人に言ったので、女王は裁縫係の所にでき上がっている物も、手もとで作らせた物もまた皆出して源氏に見せた。紫の女王はこうした服飾類を製作させることに趣味と能力を持っている点でも源氏はこの夫人を尊重しているのである。あちらこちらの打ち物の上げ場から仕上がって来ている糊のじをした打ち絹も源氏は見比べて、濃い紅べに、朱の色などとさまざまに分けて、それを衣櫃いぐつ、衣服箱などに添えて入れさせていた。高級な女房たちがそばにいて、これをそれに、それをこれにというように源氏の命じるままに贈り物を作っているのであつた。夫人もいっしょに見ていて、

「皆よくできているのですから、お召しになるかたのお顔によく似合いそうなのを見立てておあげなさいまし。着物と人の顔が離れ離れなのはよくありませんから」

と言うと、源氏は笑つて、

「素知らぬ顔であなたは着る人の顔を想像しようとするのですね。それにしてもあなたはどれを着ますか」

と言つた。

「鏡に見える自分の顔にはどの着物を着ようという自信も出ません」

さすがに恥ずかしそうに言う女王であった。紅梅色の浮き模様のある紅紫の小袿、薄い臙脂紫の服は夫人の着料として源氏に選ばれた。桜の色の細長に、明るい赤い搔練を添えて、ここの姫君の春着が選ばれた。薄いお納戸色に海草貝類が模様になった、織り方にたいた技巧の跡は見えながらも、見た目の感じの派手でない物に濃い紅の搔練を添えたのが花散里。真赤な衣服に山吹の花の色の細長は同じ所の西の対の姫君の着料に決められた。見ぬようにしながら、夫人にはひそかにうなずかれるところがあるのである。内大臣がはなやかできれいな人と見えながらも艶な所の混じっていない顔に玉鬘の似ていることを、この黄色の上着の選ばれたことで想像したのであった。色に出して見せないのであるが、源氏はそのほうを見た時に、夫人の心の平静でないのを知った。

「もう着る人たちの容貌を考えて着物を選ぶことはやめることにしよう、もらった人に腹をたてさせるばかりだ。どんなによくできた着物でも物質には限りがあつて、人の顔は醜くても深さのあるものだからね」

こんなことも言いながら、源氏は末摘花の着料に柳の色の織物に、上品な唐草の織られてあるのを選んで、それが艶な感じのする物であつたから、人知れず微笑まれるのであつた。梅の折り枝の上に蝶と鳥の飛びちがつている支那風な気のする白い袿に、濃い紅の明るい服を添えて明石夫人のが選ばれたのを見て、紫夫人は侮辱されたのに似たような気が少しした。空蝉の尼君には青鈍色の織物のおもしろい上着を見つけ出したのへ、源氏の服に仕立てられてあつた薄黄の服を添えて贈るのであつた。同じ日に着るようにとどちらへも源氏は言い添えてやった。自身の選定した物がしっくりと似合つて

いるかを源氏は見に行こうと思うのである。

夫人たちからはそれぞれの個性の見える返事が書いてよこされ、使いへ出した纏頭てんとうもさまざまであつたが、末摘花は東の院にいて、六条院の中のことでないから纏頭などは気のきいた考えを出さねばならぬのに、この人は形式的にするだけのことにはせず、いらぬ性格であつたから纏頭も出したが、山吹色の袷あじの袖口そでぐちのあたりがもう黒ずんだ色に変色したのを、重ねもなく一枚きりなのである。末摘すえつむ花女王はなによおうの手紙は香かおの薫かおりのする檀紙たんしの、少し年数物になつて厚く膨ふくれたのへ、

「#ここから1字下げ」

どういたしましょう、いただき物はかえって私の心を暗くいたします。

「#ここから2字下げ」

着て見ればうらみられけりから衣ころもかへしやりてん袖そでを濡ぬらして

「#ここで字下げ終わり」

と書かれてあつた。字は非常に昔風である。源氏はそれをながめながらおかしくてならぬような笑い顔をしているのを、何があつたのかというふうに夫人は見えていた。源氏は使いへ末摘花の出した纏頭てんのまずいを見て、機嫌きげんの悪くなつたのを知り、使いはそつと立つて行つた。そしてその侍は自身たちの仲間とこれを笑い話にした。よけいな出すぎたことをする点で困らせられる人であると源氏は思つていた。

「りつぱな歌人なのだね、この女王は。昔風の歌一詠よみはから衣、

袂濡るといふ恨みの表現法から離れられないものだ。私などもその仲間だよ。凝り固まっっていて、新しい言葉にも表現法にも影響されないところがえらいものだ。御前などの歌会の時に古い人らが友情を言う言葉に必ずまどい「#「まどい」に傍点」という三字が使われるのもいやなことだ。昔の恋愛をする者の詠む歌には相手を悪く見て仇人あだびとという言葉を三句めに置くことにして、それをさえ中心にすれば前後は何とでもつくと思つたものらしい」

などと源氏は夫人に語つた。

「いろんな歌の手引き草とか、歌に使う名所の名とかの集めてあるのを始終見っていて、その中にある言葉を抜き出して使う習慣のついている人は、それよりほかの作り方ができないものと見える。常陸ひたちの親王のお書きになつた紙屋紙かみやがみの草紙くさじというのを、読めと言つて女王おうさんが貸してくれたがね、歌の髓脳ずいのう、歌の病やまい、そんなことがあまりたくさん書いてあつたから、もともとそのほうの才分の少ない私などは、それを見たからといって、歌のよくなる見込みはないから、むずかしくてお返ししましたよ。それに通じている人の歌としては、だれでもが作るような古いところがあるじゃないかね」

滑稽こっけいでならないように源氏に笑われている末摘花の女王はかわいそうである。夫人はまじめに、
「なぜすぐお返しになりましたの、写させておいて姫君にも見せておあげになるほうがよかつたでしょうにね。私の書物の中にも古いその本はありましたけれど、虫が穴をあけて何も読めませんでした。その御本に通じていて歌の下手へたな方よりも、全然知らない私などはもつとひどく拙つたないわけですよ」

と言つた。

「姫君の教育にそんなものは必要でない。いったい女というものは一つのこと熱中して専門家的になっていることが感じのいいものではない。とって、どの芸にも門外の人であることはよくないでしょうがね。ただ思想的に確かな人にだけしておいて、ほかは平穩まぎすで瑕のない程度の女に私は教育したい」

こんなことを源氏は言っていて、もう一度末摘花へ返事を書くこととするふうのないのを、夫人は、

「返しやりてん、とお言いになったのですから、もう一度何とかおっしゃらないでは失礼ですわ」

と言って、書くことを勧めていた。人情味のある源氏であったから、すぐに返歌が書かれた、非常に榮々と、

「#ここから2字下げ」

かへさんと言ふにつけても片しきの夜の衣を思ひこそやれ

「#ここから1字下げ」

ごもつともです。

「#ここで字下げ終わり」

という手紙であつたらしい。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

初音

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）啼^なく

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）浦島—今日^{けふ}

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」若やかにうぐひすぞ啼^なく初春の衣^{きぬ}くば

「#地から3字上げ」られし一人のやうに （晶子）

新春第一日の空の完全にうららかな光のもとには、どんな家の庭にも雪間の草が緑のけはいを示すし、春らしい霞^{かすみ}の中では、芽を含んだ木の枝が生氣を見せて煙っているし、それに引かれて人の心ものびやかになっていく。まして玉を敷いたと言ってよい六条院の庭

の初春のながめには格別なおもしろさがあった。常に増してみがき渡された各夫人たちの住居すまいを写すことに筆者は言葉の乏しさを感じる。春の女王じよおうの住居はとりわけすぐれていた。梅花の香かおりも御簾みすの中の薫物たきものの香と紛らわしく漂っていて、現世の極楽がここであるような気がした。さすがにゆったりと住みなしているのであった。女房たちも若いきれいな人たちは姫君付きに分けられて、少しそれより年の多い者ばかりが紫じよおうの女王のそばにいた。上品な重味のあるふうをして、あちらこちらに一団を作っているこうした女房らは齒固はがための祝儀などを仲間どうしでしていた。鏡餅かがみもちなども取り寄せて、今年じゆうの幸福を祈るのに興ふところじ合っている所へ主人あるじの源氏がちよつと顔を見せた。懐中手ふところをしていた者が急に居まゐりまいを直したりしてきまりを悪がった。

「たいへんな御祝儀なのだね、皆それぞれ違ちがったことの上に祝福あれと祈いのっているのだらうね。少し私に内容を洩もらしてくれないか、私も祝詞を述べるよ」

と微笑ほほえんで言う源氏の美しい顔を見ることが今年ことしの春の最初の幸福であると人々は思っている。

中将の君が言う。

「御主人様がたを鏡のお餅にも祝いのっております。自身たちについての祈りなどをいたすものでございません」

朝の間は参賀の人が多くて騒さわがしく時がたったが、夕方前になつて、源氏が他の夫人たちへ年始あひさつの挨拶を言いに出かけようとして、念入りに身みなりを整ととのえ化粧をしたのを見ることは実際これが幸福でなくて何であろうと思われた。

「今朝けさ皆が鏡餅の祝詞を言い合あっているのを見てうらやましかった。

奥さんには私が祝いを言っただけよ

少し戯れも混ぜて源氏は夫人の幸福を祝った。

「#ここから2字下げ」

うす氷解けぬる池の鏡には世にたぐひなき影ぞ並べる

「#ここで字下げ終わり」

これほど真実なことはない。二人は世に珍しい麗質の夫婦である。

「#ここから2字下げ」

曇りなき池の鏡によるづ代をすむべき影ぞしるく見えける

「#ここで字下げ終わり」

と夫人は言った。どの場合、何の言葉にもこの二人は長く変わらぬ愛を誓い合うのであった。

ちようと元日が子の日にあたっていたのである。千年の春を祝うのにふさわしい日である。姫君のいる座敷のほうへ行ってみると、童女や下仕えの女が前の山の小松を抜いて遊んでいた。そうした若い女たちは新春の喜びに満ち足らったふうであった。北の御殿からいろいろときれいな体裁に作られた菓子ひげかこの髻籠と、料理の破子わらし詰めなどがここへ贈られて来た。よい形をした五葉の枝に作り物の鶯うぐいすが止まらせてあって、それに手紙が付けられてある。

「#ここから2字下げ」

年月をまつに引かれて経る人に今日驚の初音聞かせよ

「#ここで字下げ終わり」

「音せぬ里の」（今日だにも初音聞かせよ驚の音せぬ里は住むかひもなし）と書かれてあるのを読んで、源氏は身にしむように思った。正月ながらもこぼれてくる涙をどうしようもないふうであった。

「この返事は自分でなさい。きまりが悪いなどと気どっていてよい相手でない」

源氏はこう言いながら、硯の世話などをやきながら姫君に書かせていた。かわいい姿で、毎日見ている人さえだれも見飽かぬ気のするこの人を、別れた日から今日まで見せてやっていないことは、真実の母親に罪作りなことであると源氏は心苦しく思った。

「#ここから2字下げ」

引き分かれ年は経れども驚の巢立ちし松の根を忘れめや

「#ここで字下げ終わり」

少女の作でありのままに過ぎた歌である。

夏の夫人の住居は時候違いのせいが非常に静かであった。わざと風流がった所もなく、品よく、貴女の家らしく住んでいた。源氏と夫人の二人の仲にはもう少しの隔てというものもなくなって、徹底した友情というものを持ち合っていた。現在では肉体の愛を超越した夫婦であった。しかも精神的には永久に離れまいと誓い合う愛人どうしである。几帳を隔てて花散里はすわっていたが、源氏がそれを手で押しやると、また花散里はそうするままになっていた。お納

戸色という物は人をはなやかに見せないものであるが、その上この人は髪のごあいなどももう盛りを通り過ぎた人になっていた。優美な物ではないが添え毛でもすればよいかもしれぬ。

「私のような男でなかったら愛をさましてしまいかもしれない衰退期の顔を、化粧でどうしようとしてもしないほど私の心が信じられていくのがうれしい。あなたが軽率な女で、ひがみを起こして別れて行っていたりしては、私にこの満足は与えてもらえなかったでしょう」

源氏は花散里に逢うことによくこんなことを言った。永久に変わっていかない自身の愛と、この女の持つ信頼は理想的なものであるとさえ源氏は思っていた。親しい調子でしばらく話していたあとで、西の対のほうへ源氏は行った。

玉鬘たまかすらがここへ住んでまだ日の浅いにもかかわらず西の対の空気はしつくりと落ち着いたものになっていた。美しい童女によい好みの服装をさせたのや、若い女房などがおおぜいいて、室内の設備などはかなり行き届いてできてはいるが、まだ十分にあるべき調度が調っているのではなくてもとにかく感じよく取りなされてあった。玉鬘自身もはなやかな麗人であると、見た目はすぐに感じるような、あのきわだった山吹の色の細長が似合う顔と源氏の見立てたとおりの派手はでな美人は、暗い陰影というものは、どこからも見いだせない輝かしい容姿を持っていた。苦勞をしてきた間に少し少なくなった髪が、肩の下のほうでやや細くなりさらさらと分かれて着物の上にかかっているのも、かえってあざやかな清さの感ぜられることであった。今はこうして自分の庇護のもとに置くがあぶないことであつたと以前のことを深く思う源氏は、この人を情人にまでせずにはお

「#ここから2字下げ」

珍しや花のねぐらに木づたひて谷の古巢をとへる鶯

「#ここで字下げ終わり」

やっと聞き得た鶯の声というように悲しんで書いた横にはまた「梅の花咲ける岡辺をかべに家しあれば乏しくもあらず鶯の声」と書いて、みずから慰めても書かれてある。源氏はこの手習い紙をながめながら微笑ほほえんでいた。書いた人はきまりの悪い話である。筆に墨をつけて、源氏もその横へ何かを書きすさんでいる時に明石は膝ひざ行り出た。思ひ上がった女性ではあるが、さすがに源氏に主君としての礼を取る態度が謙遜けんそんであった。この聡明そうめいさは明石の魅力でもあった。白い服へ鮮明に掛かった黒髪くろかみの裾すそが少し薄くなって、きれいに分かれた筋を作っているのもかえってなまめかしい。源氏は心が惹ひかれて、新春の第一夜をここに泊まることは紫夫人を腹だたせることになるかもしれないながら、そのまま寝てしまった。六条院の他の夫人の所ではこの現象は明石夫人がいかに深く愛されているかを思わせるものであると言っていた。まして南の御殿の人々はくやしがつた。

源氏はまだようやく曙あけぼのぐらいの時刻に南御殿へ帰った。こんなに早く出て行かないでもいいはずであるのにと、明石はそのあとでやはり物思わしい気がした。紫の女王はまして、失敬なことであると、不快に思っているはずの心がらを察して、

「ちよつとうたた寝をして、若い者のようによく寝入ってしまった私を、迎えにもよこしてくれませんでしたね」

こんなふうにも言つて機嫌きげんを取っているのもおもしろく思われた。

打ち解けた返辞のしてもらえない源氏は困ったままで、そのまま寝入ったふうを作ったが、朝はずっと遅くおそなつて起きた。正月の二日は臨時の饗宴きょうえんを催すことになつていたために、忙しいふうをして源氏はきまり悪さを紛らせていた。親王がたも高官たちもほとんど皆六条院の新年宴会に出席した。音楽の遊びがあつて贈り物に纏頭てんとうに六条院にのみよくする華奢かしゃが見えた。多数の縉紳しんしんは皆きらびやかに風采ふうさいを作っているが、源氏に準じて見えるほどの人もないのであつた。個別的に見ればりっぱな人の多い時ではあるが、源氏の前では光彩を失つてしまふのが気の毒である。つまらぬ下僕しもべなども主人に従つて六条院へ来る時には、服装も身の取りなしをも晴れがましく思うのであつたから、まして年若な高官たちは妙齡の姫君が新たに加わつた六条院の参座には夢中になるほど容姿を気にして来て、平年と違つた光景が現出された新春であつた。春の花を誘う夕風がのどかに吹いていた。前の庭の梅が少し咲きそめたこの黄昏時たそがれに、楽音がおもしろく起こつて来た。「この殿」が最初に歌われて、はなやかな気分がまず作られたのである。源氏も時々声を添えた。福草さきくさの三つ葉四つ葉にというあたりがことにおもしろく聞かれた。どんなことにも源氏の片影が加われればそのものが光づけられるのである。こうしたはなやかな遊びも派手はでな人出入りの物音も遠く離れた所で聞いている紫の女王にょおう以外の夫人たちは、極楽世界に生まれても下品げほんげ下生の仏で、まだ開かない蓮はすの蕾つぼみの中にこもっている気がされた。まして離れた東の院にいる人たちは、年月に添えて退屈さと寂しさが加わるのであるが、うるさい世の中と隔離した山里に住んでいる気になつていて、源氏の冷淡さをとがめたり恨んだりする気にもなれなかつた。物質的の心配はいつさいなかつたから、仏勤めをする

人は専念に信仰の道に進めるし、文学好きな人はまたその勉強がよ
くできた。住居すまいなども個人個人の趣味と生活にかなった様式に作ら
れてあつた。

新年騒ぎの少し静まったころになつて源氏は東の院へ来た。末摘すえつむ
花はなの女王にょおうは無視しがたい身分を思つて、形式的には非常に尊貴な夫
人としてよく取り扱つていたのである。昔たくさんあつた髪も、年々
に少なくなつて、しかも今は白い筋の多く混じつたこの人を、面と
向かつて見る事が堪えられず気の毒で、源氏はそれをしなかつた。
柳の色は女が着て感じのよいものでないと思われたが、それはここ
だけのことで、着手が悪いからである。陰気な黒ずんだ赤かいてりの搔練かいてりの
糊氣のりけの強い一かさねの上に、贈られた柳の織物の小袿こきを着ているの
が寒そうで気の毒であつた。重ねに仕立てさせる服地も贈られたの
であるがどうしたのであろう。鼻の色だけは春かすみの霞かすみにもこれは紛れ
てしまわないだろうと思われるほどの赤いを見て、源氏は思わず
歎息たんそくをした。手はわざわざ几帳きちょうの切れを丁寧ていねいに重ね直した。かえつ
て末摘花は恥ずかしがつていないのである。こうして変わらぬ愛を
かける源氏に真心から信頼している様子に同情がされた。こんなこ
とにも常識の不足した点のあるのを、哀れな人であると思つ
て、自分だけでもこの人を愛してやらねばというふうにと考えるとこ
ろに源氏の善良さがうかがえるのである。話す声なども寒そうに慄ふる
えていた。

源氏は見かねて言った。

「あなたの着物のことなどをお世話する者がありますか。こんなふ
うに気楽に暮らしてよい人というものは、外見はどうでも、何
枚でも着物を着重ねているのがいいですよ。表面だけの体裁よさ

を作っているのはつまりませんよ」

女王はさすがにおかしそうに笑った。

「醍醐の阿闍梨さんの世話に手がかかりましてね、仕立て物が間に合いませんでした上に、毛皮なども借りられてしまいまして寒いのですよ」

と説明する阿闍梨というのは鼻の非常に赤い兄の僧のことである。あまりに見栄を知らない女であると思いつながらも、ここではまじめな一面だけを見せている源氏はなおも注意をする。

「毛皮はお坊様にあげたほうが適当でいいのですよ、そんな物より、白い着物という物は何枚でも重ねて着ていいのですからね。なぜあなたはそのしないのですか。入り用な物も送ってよこすのを私が忘れていれば、遠慮なく言ってよこしてください。もとからぼんやりとした私はまた怠け者でもあるし、ほかの方たちのこととこんがらがってしまうこともあって、済まない結果にもなるのですよ」

と言って源氏は、隣の二条院のほうの蔵をあけさせ、絹や綾を多く紅の女王に贈った。荒れた所もないが、男主人の平生住んでいない家は、どことなく寂しい空気のためっている気がした。前の庭の木立だけは春らしく見えて、咲いた紅梅なども賞翫する人のないのをながめて、

「#ここから2字下げ」

ふるさとの春の木末にたづねきて世の常ならぬ花を見るかな

「#ここで字下げ終わり」

と源氏は独言したが、鼻の赤い夫人は何のこととも気づかなかつ

たであろう。

空蝉うつせみの尼君の住んでいる所へ源氏は来た。その主人あるじらしくここは住まずに、目だたぬ一室にいて、住居すまいの大部分を仏間に取った空蝉が仏勤めに傾倒して暮らす様子も哀れに見えた。経巻の作りよう、仏像の飾り、ちよつとした鬘あか伽あかの器具などにも空蝉のよい趣味が見えてなつかしかった。青鈍色あおにびの几帳きちょうの感じのよい蔭かげにすわっている尼君の袖口そでぐちの色だけにはほかの淡い色彩も混じっていた。源氏は涙ぐんでいた。

「松が浦島まつらしま（松が浦島まつらしま）今日けふぞ見るうべ心あるあまも住みけり）だと思つて神聖視するのにとどめておかねばならないあなたなのでね。昔から何という悲しい二人でしょう。しかしこうして逢あつてお話しするくらいのごときは永久にできるだけの因縁があるのですね」
などと言つた。空蝉の尼君も物哀れな様子で、

「ただ今こんなふうにご信頼して暮らさせていただきまことに、私は前生に御縁の深かつたことを思つております」

と言つた。

「あなたを虐しいたげた過去の追憶に苦しんで、おりおり今でも仏にお詫わびを言わねばならないのが私です。しかしおわかりになりましたか、ほかの男は私のように純なものではないということ、あなたはそれからの経験でお知りになつただらうと思う」

継息子ついでむすこのよこしまな恋に苦しめられたことを、源氏は聞いていたのであろうと女は恥はにかみかしく思つた。

「こんなにみじめになりました晩年をお見せしておりますこと、これ以上の罪も清算されるはずでございます。これ以上の報いがどこにございましょう」

と言つて、空蟬は泣いてしまった。昔よりも深味のできた品のよい所が見え、過去の恋人で現在の尼君として別世界のものに扱うだけでは満足のできかねる気も源氏はしたが、恋の戯れを言いかける相手ではなかつた。いろいろな話をしながらも、せめてこれだけの頭のよさがあの人になればよいのにと末摘花の住居のほうがなめられた。こんなふうで源氏の保護を受けている女は多かつた。だれの所も洩らさず訪問して、

「長く来られない時もあります、心のうちでは忘れていないのです。ただ生死の別れだけが私たちを引き離すものだと思いますが、その命というものを考えると、実に心細くなりますよ」

などとなつかしい調子で恋人たちを慰めていた。皆ほどほどに源氏は愛していた。女に対して驕慢な心にもついなりそうな境遇にいる源氏ではあるが、末々の恋人にまで誠意を忘れず持つてくれることに、それらの人々は慰められて年月を送っていた。

今年の正月には男踏歌があつた。御所からすぐに朱雀院へ行つてその次に六条院へ舞い手はまわつて来た。道のりが遠くてそれは夜の明け方になつた。月が明るくさして薄雪の積んだ六条院の美しい庭で行なわれる踏歌がおもしろかつた。舞や音楽の上手な若い役人の多いところで、笛なども巧みに吹かれた。ことにここのできばえを皆晴れがましく思っているのである。他の二夫人らにも来て見物することを源氏が勧めてあつたので、南の御殿の左右の対や渡殿を席に借りて皆来ていた。東の住居の西の対の玉鬘の姫君は南の寢殿に来て、こちらの姫君に面会した。紫夫人も同じ所にて几帳だけを隔てて玉鬘と話した。踏歌の組は朱雀院で皇太后の宮のほうへ行つても一回舞つて来たのであつたから、時間がおそくなり、夜も明

けてゆくので、饗応きょうおうなどは簡単に済ますのでないかと思っていたが、普通以上の歓待を六条院では受けることになった。光の強い一月の暁の月夜に雪は次第に降り積んでいった。松風が高い所から吹きおろしてきてすさまじい感じにももう一步でなりそうな庭にもう折り目もなくなった青色の上着しろがさねに白襲しろがさねを下にしただけの服装に、見ばえない綿を頭にかぶっている舞い手が出ているだけのことも、所がらかおもしろくて、命も延びるほどに観衆は思った。源氏の子息の中將と内大臣の公子たちが舞い手の中ではことにはなやかに見えた。ほのぼのと東の空が白んでゆく光に、やや大降りに降る雪の影が見えて寒い中で、「竹川」を歌って、右に寄り、左に集まって行く舞い手の姿、若々しいその歌声などは、絵にかいて残すことのできないのが遺憾である。各夫人の見物席には、いずれ劣らぬ美しい色を重ねた女房の袖口そでぐちが出ていて、曙あけぼのの空に春の花の錦にしきを霞かすみが長く一段だけ見せているようで、これがまた見ものであった。舞い人は、「高巾子こうしんじ」という脱俗的な曲を演じたり、自由な寿詞じゅしに滑稽味こっけいみを取り混ぜたりもして、音楽、舞曲としてはたいして価値のないことで役を済ませて、慣例の纏頭てんとうである綿を一袋ずつ頭にいただいで帰った。夜がすっかり明けたので、二夫人らは南御殿を去った。源氏はそれからしばらく寝て八時ごろに起きた。

「中將の声は弁べんの少將の美音にもあまり劣らなかつたようだ、今は不思議に優秀な若者の多い時代なのです。昔は学問その他の堅実な方面にすぐれた人が多かつたろうが、芸術的のことでは近代の人の敵ではないらしく思われる。私は中將などをまじめな役人に仕上げようとする教育方針を取っていて、私自身のまじめでありえなかつた名誉を回復させたく思っていたが、やはりそれだけでは完全な

人間に成りえないのだから、芸術的な所をなくさせぬようにしなければならぬのだと知った。どんな欲望も抑制したまじめ顔がその人の全部であつてはいやなものですよ」

などと源氏は夫人に言つて、息子をかわいく思うふうが見えた。

万春樂を口ずさみにしていた源氏は、

「奥さんがたがはじめてこちらへ来た記念に、もう一度集まつてもらつて、音楽の合奏をして遊びたい気がする。私の家だけの後宴があるべきだ」

と言つて、秘蔵の楽器をそれぞれ袋から出して塵を払わせたり、ゆるんだ絃を締めさせたりなどしていた。夫人たちはそのことをどんなに晴れがましく思ったことであろう。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年5月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

.aorozora.gr.jp)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

胡蝶

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）御代^{みよ}

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）船一下^おろし

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと

行数）

（例）皇 「#「鹿ノ章」、第^こ3^う水準^じ1-94-7第^じ3

「#地から3字上げ」盛りなる御代^{みよ}の后^{おの}に金の蝶^てしろがねの

「#地から3字上げ」鳥花たてまつる （晶子）

三月の二十^は日^っ過ぎ、六条院の春の御殿の庭は平生にもまして多くの花が咲き、多くさえずる小鳥が来て、春はここにばかり好意を見

せていると思われるほどの自然の美に満たされていた。築山つきやまの木立
 ち、池の中島のほとり、広く青み渡った苔こけの色などを、ただ遠く見
 ているだけでは飽き足らぬものがあるうと思われる若い女房たちの
 ために、源氏は、前から造らせてあつた唐風の船へ急に装飾などを
 させて池へ浮かべることにした。船一お下ろしの最初の日は御所の雅
 楽寮の伶人わいじんを呼んで、船樂を奏させた。親王がた高官たちの多くが
 参会された。このごろ中宮は御所から帰っておいでになつた。去年
 の秋「心から春待つ園」の挑戦ちやうせん的な歌をお送りになつたお返しをす
 るのに適した時期であると紫の女王むすめも思うし、源氏もそう考えたが、
 尊貴なお身の上では、ちよつとこちらへ招待申し上げて花見をおさ
 せするといふようなことが不可能であるから、何にも興味を持つ年
 齡の若い宮の女房を船に乗せて、西東続いた南庭の池の間に中島の
 岬みさきの小山が隔てになつてゐるのを漕こぎ回らせて来るのであつた。東
 の釣殿つりどのへはこちらの若い女房が集められてあつた。竜頭りゆうづつ鶴首つづみづの船は
 すつかり唐風に装われてあつて、梶取かじとり、棹取さおとりの童侍わらわは髪かみを耳の
 上でみずらに結わせて、これも支那しな風の小童に仕立ててあつた。大
 きい池の中心へ船が出て行つた時に、女房たちは外国の旅をしてい
 る気がして、こんな経験のかつてない人たちであるから非常におも
 しろく思つた。中島の入り江になつた所へ船を差し寄せて眺望てうぼうをす
 るのであつたが、ちよつとした岩の形なども皆絵の中の物のようであ
 つた。あちらにもそちらにも霞かすみと同化したような花の木の梢こしげが錦にしき
 を引き渡していて、御殿のほうははるばると見渡され、そちらの岸
 には枝をたれて柳が立ち、ことに派手はでに咲いた花の木が並んでいた。
 よそでは盛りの少し過ぎた桜もここばかりは真盛りの美しさがあつ
 た。廊を廻つた藤ふじも船が近づくにしたがつて鮮明な紫になつていく。

池に影を映した山吹もまた盛りに咲き乱れているのである。水鳥の雌雄の組みが幾つも遊んでいて、あるものは細い枝などをくわえて低く飛び交ったりしていた。鴛鴦が波の綾の目に紋を描いている。写生しておきたい気のする風景ばかりが次々に目の前へ現われてくるのであったから、仙人の遊戯を見ているうちに斧の木の柄が朽ちた話と同じような恍惚状態になって女房たちは長い時間水上にいた。

「#ここから2字下げ」

風吹けば浪の花さへ色見えてこや名に立てる山吹の崎

春の池や井手の河瀬に通ふらん岸の山吹底も匂へり

亀の上の山も訪ねじ船の中に老いせぬ名をばここに残さん

春の日のうららにさして行く船は竿の雫も花と散りける

「#ここで字下げ終わり」

こんな歌などを各自が詠んで、行く先をも帰る所をも忘れるほど若い人たちのおもしろがって遊ぶのに適した水の上であった。暮れかかるころに「皇」「#鹿ノ章」、第3水準「94-7第3」という楽の吹奏が波を渡ってきて、人々の船は歓楽陶酔の中に岸へ着き、設けられた釣殿の休息所へはいった。ここの室内の装飾は簡単なふうにしてあって、しかも艶なものであった。各夫人の若いきれいな女房たちが、競って華美な姿をして待ち受けていたのは、花の飾りにも劣らず美しかった。曲のありふれたものでない楽が幾つか奏されて、舞い手にも特に選抜された公達が出され、若い女に十分の満足を与えた。夜になってしまったことを源氏は残念に思っ、前の

庭に簞をとぼさせ、階段の下の苔の上へ音楽者を近く招いて、堂上の親王がた、高官たちと堂下の伶人とで大合奏が行なわれるのであった。専門家の中の優美な者だけが選ばれて、双調を笛で吹き出したのをはじめに、その音を待ち取った絃楽が上で起こったのである。絃楽の人ははなやかな音をかき立てて、歌手は「安名尊」を歌った。生きがいのあることを感じながら庶民たちまでも六条院の門前の馬や車の立てられた蔭へはいつてこれらを聞いていた。春の空に春の調子の楽音の響く効果というものを、こうした大管絃楽を行なつて堂上の人々は知つたであらうと思われた。終夜音楽はあつた。呂の楽を律へ移すのに「喜春楽」が奏されて、兵部卿の宮は「青柳」を二度繰り返してお歌いになった。それには源氏も声を添えた。夜が明け放れた。この朝ぼらけの鳥のさえずりを、中宮は物を隔ててうらやましくお聞きになったのであつた。常に春光の満ちた六条院ではあるが、外来者の若い興奮をそその対象のないことをこれまで物足らず思つた人もあつたが、西の対の姫君なる人が出現して、これという欠点のない人であること、源氏が愛して大事にかしづくことが世間に知れた今日では、源氏の予期したとおりに思慕を寄せる者、求婚者になる者が多かつた。わが地位に自信のある人たちは、女房などの中へ手蔓を求めて姫君へ手紙を送る方法もあるし、直接に意志を源氏へ表明することも可能であるが、そうした大胆なことばかりは、心だけを悩ましている若い公達などもあることと思われる。その中にはほんとうのことを知らずに、内大臣家の中将などもあるようである。兵部卿の宮も長く同棲しておいでになつた夫人を亡くしておしまいになつて、もう三年余りも寂しい独身生活をしておいでになるのであつたから、最も熱心な求婚者であつた。今朝もずい

ぶん酔ったふうをお作りになって、藤の花などを簪にさして、風流な乱れ姿を見せておいでになるのである。源氏も計画どおりになっていくと、心では思うのであるが、つとめて素知らぬ顔をしていた。酒杯のまわって来た時、迷惑な色をお見せになって宮は、

「私がある望みを持っていないのでしたら、逃げ出してしまふ所ですよ。もういけません」

と言って、手をお出しになろうとしない。

「#ここから2字下げ」

紫のゆゑに心をしめたれば淵に身投げんことや惜しけき

「#ここで字下げ終わり」

とお言いになってから、源氏に、

「あなたはお兄様なのですからお助けください」

と源氏にその杯をお譲りになるのであった。源氏は満面に笑みを見せながら言う。

「#ここから2字下げ」

淵に身を投げつべしやとこの春は花のあたりを立ちさらで見ん

「#ここで字下げ終わり」

源氏がぜひと引きとめるので、宮もお帰りになることができなかった。

今朝の管絃楽はまたいっそうおもしろかった。この日は中宮が僧に行なわせられる読経の初めの日であったから、夜を明かした人た

ちは、ある部屋へや部屋で休息を取ってから、正装に着かえてそちらへ出るのも多かつた。障りさわのある人はここから家へ帰つた。正午ごろに皆中宮の御殿へ参つた。殿上役人などは残らずそのほうへ行つた。源氏の盛んな権勢に助けられて、中宮は百官の全まい尊敬を得ておいでになる形である。春の女王にょおうの好意で、仏前へ花が供せられるのであつたが、それはことに美しい子が選ばれた童女八人に、蝶てつと鳥を形どつた服装をさせ、鳥は銀の花かびん瓶に桜のさしたのを持たせ、蝶には金の花瓶に山吹をさしたのを持たせてあつた。桜も山吹も並み並みでなくすぐれた花房はなぶさのものがそろえられてあつた。南の御殿の山ぎわの所から、船が中宮の御殿の前へ来るころに、微風が出て瓶の桜が少し水の上へ散つていた。うららかに晴れたその霞の中から、この花の使者を乗せた船の出て来た形は艶えんであつた。天幕をこちらの庭へ移すことはせずに、左へ出た廊を楽舎のようにして、腰掛けを並べて楽は吹奏されていたのである。童女たちは階梯きざはしの下へ行つて花を差し上げた。香炉を持って仏事の席を練つていた公達きんだちがそれを取り次いで仏前へ供えた。紫の女王の手紙は子息の源中将が持つて来た。

「#ここから2字下げ」

花園の胡蝶こてふをさへや下草に秋まつ虫はうとく見るらん

「#ここで字下げ終わり」

というのである。中宮はあの紅葉もみじに対しての歌であると微笑して見ておいでになつた。昨日きのう招かれて行つた女房たちも春をおけなしになることはできませんまいと、すっかり春に降参して言っていた。

うららかな驚つぐいすの声と鳥の楽が混じり、池の水鳥も自由に場所を変えてさえずる時に、吹奏楽が終わりの急な破はになったのがおもしろかった。蝶ちようははかないふうに飛び交かつて、山吹が垣かきの下に咲きこぼれている中へ舞つて入る。中宮の亮すけをはじめとしてお手伝いの殿上役人が手に手に宮の纏頭てんとうを持って童女へ賜たまわった。鳥には桜の色の細長、蝶へは山吹襲やまぶきがさねをお出しになったのである。偶然ではあつたがかねて用意もされていたほど適当な賜物たまものであつた。伶人れいじんへの物は白の一襲ひとかさね、あるいは巻き絹などと差があつた。中将へは藤ふじの細長を添えた女の装束をお贈りになつた。中宮のお返事は、

「#ここから1字下げ」

昨日は泣き出したくなりますほどうらやましく思われました。

「#ここから2字下げ」

こてふにも誘はれなまし心ありて八重山吹を隔てざりせば

「#ここで字下げ終わり」

というのであつた。すぐれた貴女きじよがたであるが歌はお上手じょうずでなかつたのか、ほかのことに比べて遜色そんしよくがあるところの御贈答などでは思われる。昨日のことであるが、招かれて行つた女房たちの、中宮のほうから来た人たちには意匠のおもしろい贈り物がされたのであつた。そんなことをあまりこまごまと記述することは読者にうるさいことであるから省略する。毎日のようにこつした遊びをして暮らしている六条院の人たちであつたから、女房たちもまた幸福であつた。各夫人、姫君の間にも手紙の行きかひが多かつた。

玉鬘たまかすらの姫君はあの踏歌とつかの日以来、紫夫人の所へも手紙を書いて送

るようになった。人柄の深さ浅さはそれだけで判断されることでも
 ないが、落ち着いたなつかしい気持ちの人であることだけは認めら
 れて、花散里はなぢるさとからも、紫の女王からも玉鬘は好意を持たれた。結婚
 を申し込む人は多かつた。いいかげんに自分だけでこのことはだれ
 にと決めてしまうことのできないことであると源氏は思っているの
 であつた。自身でも親の心になりきってしまうことが不可能な気が
 するのか、実父に玉鬘たまかすりの存在を報ぜようかという考えの起こること
 も間々あつた。源中將は親しい気持ちで玉鬘の居間の御簾みすに近く来
 て話すこともある。玉鬘もそれに対して、自身が直接話をしなけれ
 ばならないことになつてゐるのを女は恥ずかしく思ったが、兄弟と
 いうことになつてゐるのであるからといつて、右近たちは睦まじく
 することを勧めていた。中將はいつもまじめで、よけいな想像など
 はしないふうで、姉と信じていた。内大臣家の公達きんたちも中將に伴われ
 てこちらの御殿へ、下心をほめかすふうに来たりもするのである
 が、そうした問題ではなしに、なつかしい気持ちでほんとうの兄弟
 たちを玉鬘はながめていた。実父に逢あひたいと常に人知れず思うの
 であるが、その素振りは見せず、信頼しきつた様子だけが源氏に
 見えるのも、いつそう可憐かれんに、いつそう処女らしくこの人を思わせ
 た。似ているというのではないがやはり母の夕顔のよさがそのまま
 この人にもあつて、その上に才女らしいところが添つていた。

衣がえをする初夏は、空の気持ちなども理由なしに感じのよい季
 節であるが、閑暇ひまの多い源氏はいろいろな遊び事に時を使つていた。
 玉鬘のほうへ男性から送つて来る手紙の多くなることに興味を持つ
 て、またしても西の対へ出かけてはそれらの懸想文けそつぶみを源氏は読むの
 であつた。あるものは返事を書けと源氏が勧めたりするのを玉鬘は

苦しく思った。兵部卿ひょうぶきょうの宮がまだ何ほどの時間が経過しているのでもないのに、もうあせって恨みらしいことをたくさんお書きになった手紙を、ほかの手紙の中から見いだして心からおかしそうに源氏は笑った。

「私は若い時からおおぜいの兄弟たちの中で、この宮とだけは最も親密な交際ができたのだが、恋愛問題については私に話されたことがなかったし、私もその方面のことは別にしてあったものだが、今になって宮の恋のお悩みに触れるということ、私は満足もでき、また物哀れな気にもなる。ぜひこのかたなどにはお返事をお書きなさい。少し見識を備えた女が、交際を始める価値のある男と云ってはこの宮以外にあるとも思えないかたなのですからね」

などと若い女の心を惹きそうなことを源氏は言うのであるが、玉璽はただ恥ずかしくばかり聞いていた。右大將が高官の典型のようなまじめな風采ふうさいをしながら、恋の山には孔子も倒れるという諺ことわざをほんとうにして見せようとするふうな熱意のある手紙を書いているのも源氏にはおもしろく思われた。そうした幾通かの中に、薄青色の唐紙たきものの薫物の香を深く染ませたのを、細く小さく結んだのがあった。あけて見るときれいな字で、

「#ここから2字下げ」

思ふとも君は知らじな湧わき返り岩一洩もる水に色し見えねば

「#ここで字下げ終わり」

と書いてある。書き方に近代的なはかなさが見せてあるのである。

「これはどんな人のですか」

と源氏は聞くのであるが、はかばかしい返辞を玉鬘はしない。源氏は右近を呼び出した。

「こんな手紙をよこす人たちに細心な注意を払ってね、分類をしてね、返事をすべき人には返事をさせなければいけない。近ごろの男が暴力で恋を遂げるといふようなことも、必ずしも男の咎ばかりではない。それは私自身も体験したことで、あまりに冷淡だ、無情だ、恨めしいと、そんな気持ちが積もり積もって、無法をしてしまうのだ。またそれが身分の低い女であれば、失敬な態度だと思つては罪を犯すことにもなるのだ。たいしたことでなしに、花や蝶につけての返事はして、この程度の交際を持続させておくことも相手を熱心にさせる効果のあるものだからね。あるいはまたそれなりに双方で忘れてしまうことになつても少しもさしつかえのないことだ。けれどまた誠意のない出来手で手紙をよこしたような場合にすぐ返事を書いてやるのもよろしくない。あとで批難されても弁解のしようがない。全体女というものは、憤み深くしていずに、動いた感情をありのままに相手へ見せることをしては、結果は必ずよくないものだが、宮や大将が謙遜な態度をとつて、いいかげんな一時的な恋をされる訳はないのだからね。いつも返事をせずに自尊心を持ち過ぎた女のように思わせるのも、この人にはふさわしくないことだからね。またそれ以下の人たちのことは、忍耐力の強さ、月日の長さ短さによつて、それ相応に好意的な返事をするのだね」

と源氏が言っている間、顔を横向けていた玉鬘の側面が美しく見えた。派手な薄色の小袿に撫子色の細長を着ている取り合わせも若々しい感じがした。身の取りなしなどに難はなかつたというものの、

以前は田舎の生活から移ったばかりのおおようさが見えるだけのものであった。紫夫人などの感化を受けて、今では非常に柔らかな、繊細な美が一挙一動に現われ、化粧なども上手うまいになつて、不満足な気のするようなことは一つもないはなやかな美人になつていた。人の妻にさせては後悔が残るであろうと源氏は思った。右近も二人を微笑ほほえんでながめながら、父親として見るのに不似合いな源氏の若さは、夫婦であつたなら最もふさわしい配偶であろうと思つていた。

「ほかからのお手紙のお取り次ぎは決してだれもいたさないのでございます。前からも送つておいでになります方は、三度も四度も続けてお返しばかりしてはと思ひまして、ただ私たちだけでお預かりしているのをごさいますから、お返事は、殿様が書けとお言いになります分だけを、それも迷惑がつてお書きになるだけなのでございます」

と右近が言う。

「それにしてもこの控え目な結んであつた手紙はだれのかね。苦心の跡の見えるものだ」

微笑を浮かべながら源氏はこの手紙に目を落としていた。

「それはぜひ置かせてくれとお言いになつたのでございまして、内大臣家の中将さんがこちらの海松子みろこを前に知つていらつしやいまして、海松子が持つて参つたのでございます。だれもまだ内容は拝見しておりませんでした」

「かわいい話ではないか。今は殿上役人級であつても、あの人たちに失敬なことをしていい訳はない。公卿こうけいといつてもこの人の勢いに必ずしも皆まで匹敵できるものでない。私の予言は必ず当たるよ。

この人たちには露骨じよこでなく、上手うまいに切尖きつなをはずさせるように工夫くふうす

るのだね。おもしろい手紙だよ」

と言つて、源氏はその手紙をすぐにも下へ置かずに見ていた。

「私がいろいろと考えたり、言つたりしていても、あなたにこうしたいと思つておいでになることがないのであるうかと、気づかわしい所もあります。内大臣に名のつて行くことも、まだ結婚前のあなたが、長くいつしよにいられる夫人や子供たちの中へはいつて行って幸福であるかどうか疑問だと思つて私は躊躇ちゅうちゆしているのです。

女として普通に結婚をしてから出会う機会をとらえたほうがいいと思つのですが、その結婚相手ですね、兵部卿の宮は表面独身ではないられるが、女好きな方で、通つてお行きになる人の家も多いようです、また邸やしきには召人めしやうじんという女房の中の愛人が幾人もいるということですからね、そんな関係というものは、夫人になる人が嫉妬しつとを見せないで自然に矯正きやうせいさせる努力さえすれば、世間へ醜態しうたいも見せずには、やかに済みますが、そうした気持ちになれない性格の人は、そんなつまらぬことから夫婦仲がうまくゆかずに、良人おつとの愛を失つてしまふ結果にもなりますから、ある覚悟がいりますよ。右大将は若い時からいつしよにいた夫人が年上であることなどから、その人と別れるためにも、新たな結婚をしたがつているのですが、しかし、それも面倒めんどうの添つた縁だと人の言うそれですからね、だから私も相手をだれとも仮定して考えて見ることができないのです。こんなことは親にもはつきりと意見の述べられない問題なのだが、あなたもひとくまだ若いというのではないから、自身の結婚する相手について判断のできない訳はないと思う。私をあなたのお母様だと思つて、何でも相談してくださいと思ったらいいと思う。あなたに不満足な思いをさせるような結婚はさせたくないと私は思つているのです」

こう源氏はまじめに言っていたが、玉鬘はたまかすじどう返事をしてよいかわからないふうを続けているのもさげすまれることになるであろうと思つて言つた。

「まだ物心のつきませんころから、親というものを目に見ない世界にいたのでございますから、親がどんなものであるか、親に対する気持ちはどんなものであるか私にはわかつてないのでございます」

このおおような言葉がよくこの人を現わしていると源氏は思つた。そう思うのがもつともであるとも思つた。

「では、親のない子は育ての親を信頼すべきだという世間の言いならわしのように私の誠意をだんだんと認めていってくれますか」などと源氏は言つていた。恋しい心の芽ばえていることなどは気恥ずかしくて言い出せなかつた。それとなくその気持ちを言う言葉は時々混ぜもするのであるが、気のつかぬふうであつたから、歎息たんそくをしながら源氏は帰つて行こうとした。縁に近くはえた呉竹くれたけが若々しく伸びて、風に枝を動かす姿に心が惹かれて、源氏はしばらく立ちどまつて、

「#ここから1字下げ」

「ませのうらに根深く植ゑし竹の子のおのがよよにや生おひ別るべき

「#ここで字下げ終わり」

その時の気持ちが想像されますよ。寂しいでしょうからね」

外から御簾みすを引き上げながらこう言つた。玉鬘は膝いざ行つて出て言つた。

「#ここから1字下げ」

「今さらにいかならんよか若竹の生ひ始めけん根をば尋ねん

「#ここで字下げ終わり」

かえって幻滅を味わうことになるでしょうから」

源氏は哀れに聞いた。玉鬘の心の中ではそうも思っているのではなかった。どんな時に機会が到来して父を父と呼ぶ日が来るのであろうとたよりない悲しみをしているのであるが、源氏の好意に感激はしていて、実父といつても初めから育てられなかった親は、これほどこまやかな愛を自分に見せてくれないのではあるまいかと、古い小説などからもいろいろと人生を教えられている玉鬘は想像して、自身が源氏の感情を無視して勝手に父へ名のって行くことなどではきないとしていた。

源氏は別れぎわに玉鬘の言ったことで、いつそうその人を可憐に思つて、夫人に話すのであつた。

「不思議なほど調子のなつかしい人ですよ。母であつた人はあまりに反撥性を欠いた人だつたけれど、あの人は、物の理解力も十分あるし、美しい才気も見えるし、安心されないような点が少しもない」

この源氏の賞め言葉を聞いていて夫人は、良人が単に養女として愛する以外の愛をその人に持つことになっていく経路を、源氏の性格から推して察したのである。

「理解力のある方にもせよ、全然あなたを信用してたよつてはどんなことにおなりになるかとお気の毒ですわ」

と女王は言った。

「私は信頼されてよいだけの自信はあるのだが」

「いいえ、私にも経験があります。悩ましいような御様子をお見せになったことなど、そんなこと私はいくつも覚えているのですもの」

微笑をしながら言っている夫人の神経の鋭敏さに驚きながら、源氏は、

「あなたのことなどといっしょにするのはまちがいですよ。そのほかのことで私は十分あなたに信用されてよいこともあるはずだ」

と言っただけで、やましい源氏はもうその話に触れようとしないのであったが、心の中では、妻の疑いどおりに自分はなっていくのではないかという不安を覚えていた。同時にまた若々しいけしからぬ心であると反省もしていたのである。

気にかかる玉鬘を源氏はよく見に行つた。しめやかな夕方に、前の庭の若楓わかかえでと柏かしわの木がはなやかに繁り合つていて、何とはなしに爽そう快かいな気のされるのをながめながら、源氏は「和しまた清し」と詩の句を口ずさんでいたが、玉鬘の豊麗とよついでな容貌ようぼうが、それにも思い出されて、西の対へ行つた。手習いなどをしながら気楽な風でいた玉鬘が、起き上がった恥ずかしそうな顔の色が美しく思われた。その柔らかないふうにふと昔の夕顔が思い出されて、源氏は悲しくなつたまま言つた。

「あなたにはじめて逢あつた時には、こんなにまでお母様に似ているとは見えなかったが、それからのちは時々あなたをお母様だと思ふことがあるのですよ。その点ではずいぶん私を悲しがらせるあなただ。中将が少しも死んだ母に似た所がないものだから、親子というものものはそれくらいのものかと思つていましたかね、あなたのような

人もまたあるのですね」

涙ぐんでいるのであった。そこに置かれてあった箱の蓋ふたに、菓子と橘たちばなの実を混ぜて盛ってあった中の、橘を源氏は手にもてあそびながら、

「#ここから1字下げ」

「橘のかをりし袖そでによそふれば変はれる身とも思ほえぬかな

「#ここで字下げ終わり」

長い年月の間、どんな時にも恋しく思い出すばかりで、慰めは少しも得られなかった私が、故人にそのままあなたを家の中で見ることは、夢でないかとうれしいにつけても、また昔が思われます。あなたも私を愛してください」

と言つて、玉璽たまかすらの手を取った。女はこんなふうふうに扱われたことがなかったから、心持が急に暗く憂鬱ゆううつになったが、ただ腑ぶに落ちぬふうを見せただけで、おおようにしながら、

「#ここから2字下げ」

袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ

「#ここで字下げ終わり」

と言つたが、不安な気がして下を向いている玉璽の様子が美しくつた。手がよく肥えて肌目はだめの細かくて白いのをながめているうちに、見がたい物を見た満足よりも物思いが急にふえたような気が源氏にした。源氏はこの時になつてはじめて恋をささやいた。女は悲しく

思つて、どうすればよいかと思うと、からだ身体に慄えの出てくるのも源氏に感じられた。

「なぜそんなに私をお憎みになる。今まで私はこの感情を上手におうまいさえていて、だれからも怪しまれていなかったのですよ。あなたも人に悟らせないようにつとめてください。もとから愛している上に、そうなればまた愛が加わるのだから、それほど愛される恋人というものはないだろうと思われる。あなたに恋をしている人たちより以下のものに私を見るわけではないでしょう。こんな私のような大きい愛であなたを包もうとしている者はこの世にないはずなのですから、私が他の求婚者たちの熱心の度にあきたらないもののあるのはもつともでしょう」

と源氏は言った。変態的な理屈である。雨はすっかりやんで、竹が風に鳴っている上に月が出て、しめやかな気になった。女房たちは親しい話をする主人たちに遠慮をして遠くへ去っていた。始終一違あつている間柄ではあるが、こんなよい機会もまたとないような気がしたし、抑制したことが口へ出てしまったあとの興奮も手伝つて、都合よく着ならした上着は、こんな時にそつと脱ぎすべらすのに音を立てなかったから、そのまま玉鬘の横へ寝た。玉鬘は情けない気がした。人がどう言うであろうと思うと非常に悲しくなった。実父の所であれば、愛は薄くてもこんな禍わざわいはなかったはずであると思つと涙がこぼれて、忍ぼうとしても忍びきれないのである。玉鬘がそんなにも心を苦しめているのを見て、

「そんなに私を恐れておいでになるのが恨めしい。それまでに親しんでいなかった人たちでも、夫婦の道の第一歩は、人生の掟おきてに従つて、いっしょに踏み出すではありませんか。もう馴染なじんでから長

くなる私が、あなたと寝て、それが何恐ろしいことですか。これ以上のことを私は断じてしませんよ。ただこうして私の恋の苦しみを一時的に慰めてもらおうとするだけですよ」

と源氏は言ったが、なお続いて物哀れな調子で、恋しい心をいろいろに告げていた。こうして二人並んで身を横たえていることで、源氏の心は昔がよみがえったようにも思われるのである。自身のことではあるが、これは軽率なことであると考えられて、反省した源氏は、人も不審を起こすであろうと思つて、あまり夜も更ふかさないうで帰つて行くのであつた。

「こんなことで私をおきらいになつては私が悲しみますよ。よその人はこんな思いやりのありすぎるものではありませんよ。限りもない、底もない深い恋を持っている私は、あなたに迷惑をかけるような行為は決してしない。ただ帰つて来ない昔の恋人を悲しむ心を慰めるために、あなたを仮にその人としてもものを言うことがあるかもしれませんが、私に同情してあなたは仮に恋人の口ぶりでもものを言つていてくださつたらいいのだ」

と出がけに源氏はしんみりと言うのであつたが、玉鬘たまかすらはぼうとなつていて悲しい思いをさせられた恨めしさから何とも言わない。

「これほど寛大でないあなたとは思つていなかったのに、非常に憎むのですね」

と歎息たんそくをした源氏は、

「だれにもいっさい言わないことにしてください」

と言つて帰つて行つた。玉鬘は年齢からいえば何ももうわかつていてよいのであるが、まだ男女の秘密というものはどの程度のものを言うのかわからない。今夜源氏の行為以上のものがあるとも思わ

なかつたから、非常な不幸な身になつたようにも歎なげいているのである。気分も悪そうであつた。女房たちは、「病気ででもおありになるようだ」と心配していた。

「殿様は御親切でございますね。ほんとうのお父様でも、こんなにまでよくあそばすものではないでしょう」

などと、兵部がそつと来て言うのを聞いても、玉鬘は源氏がさげすまれるばかりであつた。それとともに自身の運命も歎かれた。

翌朝早く源氏から手紙を送つて来た。身体からだが苦しくて玉鬘は寝ていたのであるが、女房たちは硯すずりなどを出して来て、返事を早くするようにと言う。玉鬘はしぶしぶ手に取つて中を見た。白い紙で表面だけは美しい字でまじめな書き方にしてある手紙であつた。

「#ここから1字下げ」

例もないように冷淡なあなたの恨めしかつたことも私は忘れられない。人はどんな想像をしたでしょう。

「#ここから2字下げ」

うちとけてねも見ぬものを若草のことありがほに結ばほるらん

「#ここから1字下げ」

あなたは幼稚ですね。

「#ここで字下げ終わり」

恋文であつて、しかも親らしい言葉で書かれてある物であつた。

玉鬘は憎悪ぞうおも感じながら、返事をしないことも人に怪しませることであるからと思つて、分の厚い檀紙たんしに、ただ短く、

「#ここから1字下げ」

拝見いたしました。病気をしているものでございますから、失礼いたします。

「#ここで字下げ終わり」

と書いた。源氏はそれを見て、さすがにはつきりとした女であると微笑されて、恨むのにも手ごたえのある気がした。

一度口へ出したあとは「おほたの松の」（恋ひわびぬおほたの松のおほかたは色に出でてや逢はんと言はまし）というように、源氏が言いからんできることが多くなって、玉鬘の加減の悪かった身体がなお悪くなっていくようであった。こうしたほんとうのことを知る人はなくて、家の中の者も、外の者も、親と娘としてばかり見ている二人の中にそうした問題の起こっていると、少しでも世間が知ったなら、どれほど人笑われな自分の名が立つことであろう、自分は飽くまでも薄倅はっこうな女である、父君に自分のことが知られる初めにそれを聞く父君は、もともと愛情の薄い上に、軽佻けいちような娘であるとうとましく自分が思われねばならないことであると、玉鬘たまかすらは限りもない煩悶はんもんをしていた。兵部卿ひむべうけいの宮や右大將は自身らに姫君を与えてもよいという源氏の意向らしいことを聞いて、ほんとうのことはまだ知らずに、非常にうれしくて、いよいよ熱心な求婚者に宮もおなりになり、大將もなった。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年7月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

蛩

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）しかも対たいの姫君だけは

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）御一風采ふうさい

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」身にしみて物を思へと夏の夜の蛩ほの

「#地から3字上げ」かに青引きてとぶ （晶子）

源氏の現在の地位はきわめて重いがもう廷臣としての繁忙もここまででは押し寄せて来ず、のどかな余裕のある生活ができるのである。だから、源氏を信頼して来た恋人たちにもそれぞれ安定を与えることができた。しかも対たいの姫君だけは予期せぬ煩悶はんもんをする身になって

いた。大夫の監の恐ろしい懸想とはいっしょにならぬにもせよ、だれも想像することのない苦しみが加えられているのであったから、源氏に持つ反感は大きかった。母君さえ死んでいなかっただらと、またこの悲しみを新たにすることになったのであった。源氏も打ち明けてからはいつそう恋しさに苦しんでいるのであるが、人目をばかつてまたこのことには触れない。ただ堪えがたい心だけを慰めるためによく出かけて来たが、玉鬘のそばに女房などのあまりいい時にだけは、はっと思わせられるようなことも源氏は言った。あらわに退けて言うこともできないことであつたから玉鬘はただ気をつかぬふうをするだけであつた。人柄が明るい朗らかな玉鬘であつたから、自分自身ではまじめ一方な気なのであるが、それでもこぼれるような愛嬌が何にも出てくるのを、兵部卿の宮などはお知りになつて、夢中なほどに恋をしておいでになつた。まだたいして長い月日がたったわけではないが、確答も得ないうちに不結婚月の五月にさえなつたと恨んでおいでになつて、

「#ここから1字下げ」

ただもう少し近くへ伺うことをお許しくだすつたら、その機会に私の思い悩んでいる心を直接お洩らしして、それによってせめて慰みたいと思います。

「#ここで字下げ終わり」

こんなことをお書きになつた手紙を源氏は読んで、
 「そうすればいいでしょう。宮のような風流男のする恋は、近づかせてみるだけの価値はあるでしょう。絶対にいけないなどとは言わないほうがよい。お返事を時々おあげなさいよ」

と源氏は言つて文章をこう書けとも教えるのであつたが、何重に

も重なる不快というようなものを感じて、気分が悪いから書かれな
いと玉鬘は言った。こちらの女房には貴族出の優秀なような者もあ
まりないのである。ただ母君の叔父おじの宰相の役を勤めていた人の娘
で伶俐れいりな女が不幸な境遇にいたのを捜し出して迎えた宰相の君とい
うのは、字などもきれいに書き、落ち着いた後見役も勤められる人
であつたから、玉鬘が時々やむをえぬ男の手紙に返しをする代筆を
させていた。その人を源氏は呼んで、口授して宮へのお返事を書か
せた。聞いていて玉鬘が何と言うかを源氏は聞きたかつたのである。
姫君は源氏に恋をささやかれた時から、兵部卿の宮などの情をこめ
てお送りになる手紙などを、少し興味を持ってながめることがあつ
た。心がそのほうへ動いて行くというのではなしに、源氏の恋から
のがれるためには、兵部卿の宮に好意を持つふうを装うのも一つの
方法であると思うのである。この人にも技巧的な考えが出るもので
ある。

源氏自身がおもしろがつて宮をお呼び寄せしようとしているとは
知らずに、思いがけず訪問を許すという返事をお得になつた宮は、
お喜びになつて目だたぬふうで訪ねておいでになつた。妻戸の室に
敷き物を設けて几帳きちょうだけの隔てで会話がなさるべくできていた。心
憎いほどの空薫そらたきをさせたり、姫君の座をつくるつたりする源氏は、
親でなく、よこしまな恋を持つ男であつて、しかも玉鬘たまかすらの心にとつ
ては同情される点のある人であつた。宰相の君なども会話の取り次
ぎをするのが晴れがましくてできそうな気もせず隠れているのを源
氏は無言で引き出したりした。

夕闇ゆづらみ時が過ぎて、暗く曇つた空を後ろにして、しめやかな感じの
する風采ふうさいの宮がすわつておいでになるのも艶えんであつた。奥の室から

吹き通う薫香たきものの香に源氏の衣服から散る香も混じって宮のおいでになるあたりは匂においに満ちていた。予期した以上の高華こうげな趣の添った女性らしくまず宮はお思いになったのであった。宮のお語りになることは、じみな落ち着いた御希望であつて、情熱ばかりを見せようとあそばすものでもないのが優美に感ぜられた。源氏は興味をもつてこちらで聞いているのである。姫君は東の室に引き込んで横になつていたが、宰相の君が宮のお言葉を持つてそのほうへはいつて行く時に源氏は言ことづてた。

「あまりに重苦しいしかたです。すべて相手次第で態度を変えることが必要で、そして無難です。少女らしく恥ずかしがつている年齢としでもない。この宮さんなどに人づてのお話などをなさるべきでない。声はお惜しみになつても少しは近い所へ出ていないではいけませんよ」

などと言う忠告である。玉鬘は困つていた。なおこうしていればその用があるふうをしてそばへ寄つて来ないとは保証されない源氏であつたから、複雑な侘わびしさを感じながら玉鬘はそこを出て中央の室の几帳きちょうのところへ、よりかかるような形で身を横たえた。宮の長いお言葉に対して返辞がしにくい気がして玉鬘が躊躇ちゅうじゆしている時、源氏はそばへ来て薄物の几帳の垂れたを一枚だけ上へ上げたかと思うと、蠟ろうの燭ひをだれかが差し出したかと思うような光があたりを照らした。玉鬘は驚いていた。夕方から用意して蛸ほたるを薄様うすようの紙へたくさん包ませておいて、今まで隠していたのを、さりげなしに几帳を引き繕うふうをしてにわかそでに袖から出したのである。たちまちに異常な光がかたわらに湧わいた驚きに扇で顔を隠す玉鬘の姿が美しかった。強い明りがさしたならば宮も中をおのぞきになるであらう、ただ自

分の娘であるから美貌びぼうであろうと想像をしておいでになるだけで、
 実質のこれほどすぐれた人とも認識しておいでにならないであろう。
 好色なお心を遣やる瀨ないものにして見せようと源氏が計ったこと
 ある。実子の姫君であつたならこんな物狂わしい計らいはしないで
 ありうと思われる。源氏はそつとそのまま外の戸口から出て帰って
 しまった。宮は最初姫君のいる所はその辺であろうと見当をおつけ
 になつたのが、予期したよりも近い所であつたから、興奮をあそば
 しながら薄物の几帳の間から中をのぞいておいでになつた時に、一
 室ほど離れた所に思いがけない光が湧いたのでおもしろくお思いに
 なつた。まもなく明りは薄れてしまつたが、しかも瞬間のほのかな
 光は恋の遊戯にふさわしい効果があつた。かすかによりは見えな
 かつたが、やや大柄な姫君の美しかつた姿に宮のお心は十分に惹ひかれ
 て源氏の策は成功したわけである。

「#ここから1字下げ」

「鳴く声も聞こえぬ虫の思ひだに人の消けつには消けゆるものかは

「#ここで字下げ終わり」

御実験なすつたでしょう」

と宮はお言いになつた。こんな場合の返歌を長く考え込んでから
 するのは感じのよいものでないと思つて、玉鬘たまがすらはすぐに、

「#ここから2字下げ」

声はせで身のみこがす蛩こそ言ふよりまさる思ひなるらめ

「#ここで字下げ終わり」

とはかないふうに言っただけで、また奥のほうへはいつてしまった。宮は疎々しい待遇を受けるといふような恨みを述べておいでになった。あまり好色らしく思わせたくないと言宮は朝まではおいでにならずに、軒の霽の冷たくかかるのに濡れて、暗いうちにお帰りになった。杜鵑などはきつと鳴いたのであろうと思われる。筆者はそこまで穿鑿はしなかった。

宮の御一風采の艶な所が源氏によく似ておいでになると言つて女房たちは賞めていた。昨夜の源氏が母親のような行き届いた世話をした点で玉鬘の苦悶などは知らぬ女房たちが感激していた。玉鬘は源氏に持たれる恋心を自身の薄倖の現われであると思つた。実の父に娘を認められた上では、これほどの熱情を持つ源氏を良人にする事が似合わしくないことでもないかもしれぬ、現在では父になり娘になつているのであるから、両者の恋愛がどれほど世間の問題にされることであらうと玉鬘は心を苦しめているのである。しかし眞実は源氏もそんな醜い關係にまで進ませようとは思つていなかった。

ただ恋を覚えやすい性格であつたから、中宮などに対しても清い父親としてだけの愛以上のものをいっていないのではない、何かの機会にはお心を動かそうとしながらも高貴な御身分にはばかられてあらわな恋ができないだけである。玉鬘は性格にも親しみやすい点があつて、はなやかな気分のおふれ出るようなのを見ると、おさえられている心がおどり出して、人が見れば怪しく思うほどのことも混じつていくのであるが、さすがに反省をして美しい愛だけでこの人をおもうとしていた。

五日には馬場殿へ出るついでにまた玉鬘を源氏は訪ねた。

「どうでしたか。宮はずっとおそくまでおいでになりましたか。際限なく宮を接近おさせしないようにしましょう。危険性のある方だからね。力で恋人を征服しようとしなない人は少ないからね」

などと宮のことも活かせも殺しもしながら訓戒めいたことを言っている源氏は、いつもそうであるが、若々しく美しかった。色も光沢もきれいな服の上に薄物の直衣のうしをありなしに重ねているのなども、源氏が着ていると人間の手で染め織りされたものとは見えない。物思いがなかったなら、源氏の美は目をよるこばせることであろうと玉鬘は思った。兵部卿ひょうぶきょうの宮からお手紙が来た。白い薄様うすようによい字が書いてある。見て美しいが筆者が書いてしまえばただそれだけになることである。

「#ここから2字下げ」

今日けふさへや引く人もなき水隠れみに生おふるあやめのねのみ泣かれん

「#ここで字下げ終わり」

長さが記録になるほどの菖蒲しよぶの根に結びつけられて来たのである。

「ぜひ今日はお返事をなさい」

などと勧めておいて源氏は行ってしまった。女房たちもぜひと言うので玉鬘自身もどういうわけもなく書く気になっていた。

「#ここから2字下げ」

あらはれていとど浅くも見ゆるかなあやめもわかず泣かれけるねの

「#ここから1字下げ」

少女らしく。

「#ここで字下げ終わり」

とだけほのかに書かれたらしい。字にもう少し重厚な気が添えたいと芸術家的な好みを持っておいでになる宮はお思いになったようであった。

今日は美しく作った薬玉くすたまなどが諸方面から贈られて来る。不幸だったところと今とがこんなことにも比較されて考えられる玉鬘たまかすらは、この上できるならば世間の悪名を負わずに済ませたいともっともなことを願っていた。

源氏は花散里夫人はなぢるさとの所へも寄った。

「中将が左近衛府さこんえふの勝負のあとで役所の者を皆つれて来ると言ってきましたからその用意をしておくのですね。まだ明るいうちに来るでしょう。私は何も麗々しく扱おうと思っていなかった姫君のことを、若い親王がたなどもお聞きになって手紙などをよくよこしておいでのなるのだから、今日はいいい機会のように思って、東の御殿へ何人も出ておいでになることになるでしょうから、そんなつもりで仕度したくをさせておいてください」

などと夫人に言っていた。馬場殿はこちらの廊からながめるのに遠くはなかった。

「若い人たちは渡殿わたどのの戸をあけて見物するがよい。このごろの左近衛府にはりっぱな下土官がいて、ちよつとした殿上役人などは及ばない者がいますよ」

と源氏が言うのを聞いていて、女房たちは今日の競技を見物のできることを喜んだ。玉鬘のほうからも童女などが見物に来ていて、

廊の戸に御簾が青やかに懸け渡され、はなやかな紫ぼかしの几帳がずっと立てられた所を、童女や下仕えの女房が行き来していた。菖蒲重ねの袖、薄藍色の上着を着たのが西の対の童女であった。上品に物馴れたのが四人来ていた。下仕えは櫓の花の色のぼかしの装に撫子色の服、若葉色の唐衣などを装うていた。こちらの童女は濃紫に撫子重ねの汗衫などでおおような好みである。双方とも相手に譲るものでないというふうに氣どっているのがおもしろく見えた。若い殿上役人などは見物席のほうに心の惹かれるふうを見せていた。

午後二時に源氏は馬場殿へ出たのである。予想したとおりに親王がたもおおぜい来ておいでになった。左右の組み合わせなどに宮中の定例の競技と違って、中少将が皆はいって、こうした私の催しにかえって興味のあるものが見られるのであった。女にはどうして勝負が決まるのかも知らぬことであつたが、舎人までが艶な装束をして一所懸命に競技に走りまわるのを見るのはおもしろかつた。南御殿の横まで端は及んでいたから、紫夫人のほうでも若い女房などは見物していた。「打毬楽」「納蘇利」などの奏楽がある上に、右も左も勝つたびに歓呼に代えて楽声をあげた。夜になって終わるころにはもう何もよく見えなかつた。左近衛府の舎人たちへは等差をつけていろいろな纏頭が出された。ずっと深更になつてから来賓は退散したのである。源氏は花散里のほうに泊まるのであつた。いろいろな話が夫人とかわされた。

「兵部卿の宮はだれよりもごりつばなようだ。御容貌などはよろしくないが、身の取りなしなどに高雅さと愛嬌のある方だ。そのほかはよいと言われている人たちにも欠点がいろいろある」

「あなたの弟様でもあの方のほうが老けてお見えになりますね。こ

ちらへ古くからよくおいでになると聞いていましたが、私はずっと昔に御所で隙見すきみをしてお知り申し上げているだけですから、今日きょうお顔を見て、そのころよりきれいにおなりになったと思いました。帥そつの宮様はお美しいようでも品がおよろしくなくて王様というくらいにしかお見えになりませんでした」

この批評の当たっていることを源氏は思ったが、ただ微笑ほほえんでいただけであった。花散里夫人の批評は他の人たちにも及んだのであるが、よいとも悪いとも自身の意見を源氏は加えようとしないのである。難をつけられる人とか、悪く見られている人とかに同情する癖があったから。右大将のことを深味のあるような人であると夫人が言うのを聞いても、たいしたことがあるものでない、婿などにしては満足してられないであろうと源氏は否定したく思ったが、表へその心持ちを現わそうとしなかった。睦むつまじくしながら夫人と源氏は別な寢床に眠るのであった。いつからこうなってしまったのかと源氏は苦しい気がした。平生花散里夫人は、源氏に無視されっていると腹をたてるようなこともないが、六条院にはなやかな催しがあつても、人づてに話を聞くぐらいで済んでいるのを、今日は自身の所で会があつたことで、非常な光栄にあつたように思っているのであつた。

「#ここから2字下げ」

その駒こまもすさめぬものと名に立てる汀みぎはの菖蒲あやめ今日や引きつる

「#ここで字下げ終わり」

とおおように夫人は言った。何でもない歌であるが、源氏は身に

しむ気がした。

「#ここから2字下げ」

にほ鳥に影を並ぶる若駒はいつか菖蒲あやめに引き別るべき

「#ここで字下げ終わり」

と源氏は言った。意はそれでよいが夫人の謙遜けんそんをそのまま肯定した言葉は少し気の毒である。

「二六時中あなたといっしょにいるのではないが、こうして信頼をし合つて暮らすのはいいことですな」

戯れを言うのもこの人に対してはまじめな調子にされてしまう源氏であつた。帳台の中の床を源氏に譲つて、夫人は几帳きちょうを隔てた所で寝た。夫婦としての交渉などはもはや不似合いになつたとしている人であつたから、源氏もしいてその心を破ることをしなかつた。

梅雨つゆが例年よりも長く続いていつ晴れるとも思われないうころの退屈あかしさに六条院の人たちも絵や小説を写すのに没頭した。明石夫人はそんなほうの才もあつたから写し上げた草紙などを姫君へ贈つた。

若い玉鬘たまかすらはまして興味を小説に持つて、毎日写しもし、読みもすることに時を費やしていた。こうしたことの相手を勤めるのに適した若い女房が何人もいたのであつた。数奇な女の運命がいろいろと書かれてある小説の中にも、事実かどうかは別として、自身の体験したほどの変わったことにある人はないと玉鬘は思った。住吉すみよしの姫君がまだ運命に恵まれていたころは言うまでもないが、あとにもなお尊敬されているはずの身分でありながら、今一步で卑しい主かず

計頭の妻にされてしまう所などを讀んでは、恐ろしかった監けんのことが思われた。源氏はどこの御殿にも近ごろは小説類が引き散らされているのを見て玉鬘たまかすりに言った。

「いやなことですね。女というものはうるさがらずに人からだまされるために生まれたものなんですね。ほんとうの語られているところは少ししかないのだろうが、それを承知で夢中になって作中へ同化させられるばかりに、この暑い五月雨さみだれの日に、髪かみの乱れるのも知らずに書き写しをするのですね」

笑いながらまた、

「けれどもそうした昔の話を読んだりすることがなければ退屈たいくつは紛れないだろうね。この嘘うそごとの中にほんとうのことらしく書かれてあるところを見ては、小説であると知りながら興奮きんぷんをさせられますね。可憐かれんな姫君が物思いをしているところなどを読むとちよつと身にしむ気もするものですよ。また不自然な誇張くわちやうがしてあると思いがらつり込まれてしまうこともあるし、またまずい文章だと思いながらおもしろさがある個所にあることを否定できないようなのもあるようですね。このごろあちらの子供が女房などに時々読ませているのを横よこで聞きいてみると、多弁な人間があるものだ、嘘うそを上手うまいに言い馴なれた者が作るのだという気がしますが、そうじゃありませんか」

と言うと、

「そうでございますね。嘘を言い馴れた人がいろんな想像をして書くものでございましょうが、けれど、どうしてもほんとうとしか思われないのでございますよ」

こう言いながら玉鬘たまかすりは硯すずりを前へ押しやった。

「不風流に小説の悪口を言ってしまったね。神代以来この世であつたことが、日本紀にほんぎなどはその一部分に過ぎなくて、小説のほうに正確な歴史が残っているのでしょう」

と源氏は言うのであつた。

「だれの伝記とあらわに言つてなくても、善よいこと、悪いことを目撃した人が、見ても見飽かぬ美しいことや、一人が聞いているだけでは憎み足りないことを後世に伝えたいと、ある場合、場合のことを一人でだけ思つていられなくなって小説というものが書き始められたのだろう。よいことを言おうとすればあくまで誇張してよいこととずくめのことを書くし、また一方を引き立てるためには一方のことを極端に悪いこととずくめに書く。全然架空のことではなくて、人間のだれにもある美点と欠点が盛られているものが小説であると見ればよいかもしれない。支那しなの文学者が書いたものはまた違つし、日本のも昔できたものと近ごろの小説とは相異していることがあるでしょう。深さ浅さはあるだろうが、それを皆嘘であると断言することはできない。仏が正しい御心みこころで説いてお置きになつた経の中にも方便ということがあつて、大悟しない人間はそれを見ると疑問が生じるだろうと思われる。方等經ほうとうきやうの中などにはことに方便が多く用いられています。結局は皆同じことになつて、菩提心ぼだいしんはよくて、煩惱ぼんごうは悪いということが言われているのです。つまり小説の中に善悪を書いてあるのがそれにあたるのですよ。だから好意的に言えば小説だつて何だつて皆結構なものだということになる」

と源氏は言つて、小説が世の中に存在するのを許したわけである。

「それにしてもね、古いことの書いてある小説の中に私ほどまじめ

な愚直過ぎる男の書いてあるものがありますか。それからまた人間離れのしたような小説の姫君だってあなたのように恋する男へ冷淡で、知って知らぬ顔をするようなのではないでしょう。だからありふれた小説の型を破った小説にあなたと私のことをさせましょう」

近々と寄って来て源氏は玉鬘たまかすらにこうささやくのであった。玉鬘は襟えりの中へ顔を引き入れるようにして言う。

「小説におさせにならないでも、こんな奇怪なことは話になって世間へ広まります」

「珍しいことだといつのですか。そうです。私の心は珍しいことになるときめく」

ひたひたと寄り添ってこんな戯れを源氏は言うのである。

「#ここから1字下げ」

「思ひ余り昔のあとを尋ぬれど親にそむける子ぞ類たぐひなき

「#ここで字下げ終わり」

不孝は仏の道でも非常に悪いことにして説かれています」

と源氏が言っても、玉鬘は顔を上げようとしなかった。源氏は女の髪をなでながら恨み言を言った。やっと玉鬘は、

「#ここから2字下げ」

古き跡を尋ぬれどげになかりけりこの世にかかる親の心は

「#ここで字下げ終わり」

こう言った。源氏は気恥ずかしい気がしてそれ以上の手出しはで

きなかつた。どうこの二人はなつていくのであろう。

紫夫人も姫君に託してやはり物語を集める一人であつた。「こま物語」の絵になつてゐるのを手に取つて、

「上手じょうずにできた画えだこと」

と言いながら夫人は見ていた。小さい姫君が無邪気なふうで昼寝をしているのが昔の自分のような気がするのであつた。

「こんな子供どうしても悪い関係がすぐにできるじゃありませんか。昔を言えば私などは模範にしてよいまれな物堅さだつた」

と源氏は夫人に言った。そのかわりにまれなことも好きであつたはずである。

「姫君の前でこうした男女関係の書かれた小説は読んで聞かせないようにするほうがいい。恋をし始めた娘などというものが、悪いわけではないが、世間にはこんなことがあるのだと、それを普通のここのように思つてしまわれるのが危険ですからね」

こんな周到な注意が実子の姫君には払われているのを、対の姫君が聞いたら恨むかもしれない。

「浅はかな、ある型を模倣したにすぎないような女は読んでいてもいやになります。空穂うつほ物語の藤原ふじわらの君の姫君は重々しくて過失はしそうでない性格ですが、あまり真直まっすぐな線ばかりで、しまいまで女らしく書かれてないのが悪いと思うのですよ」

と夫人が言うと、

「現実の人でもそのとおりですよ。風変わりな一本調子で押し通して、いいかげんに転向することを知らない人はかわいそうだ。見識のある親が熱心に育てた娘がただ子供らしいところにだけ大事がられた跡が見えて、そのほかは何もできないようなのを見ては、どん

な教育をしたのかと親までも軽蔑けいべつされるのが気の毒ですよ。なんと
 いてもあの親が育てたらしいよいところがあると思われるような
 娘があれば親の名誉になるのです。作者の賞めほちぎつてある女のす
 ること、言うことの中に首肯されることのない小説はだめですよ。
 いったいつまらない人に自分の愛する人は賞めさせたくない」
 などと言って、源氏は姫君を完全な女性に仕上げることに一所懸
 命であつた。継母まははが意地悪をする小説も多かつたから、その反対な
 継母のよさを見せつける気がして夫人はそんなものをいっさい省い
 て選択に選択をしたよいものだけを姫君のために写させたり絵かに描
 かせたりした。

中將を源氏は夫人の住居すまいへ接近させないようにしていたが、姫君
 の所へは出入りを許してあつた。自分が生きている間は異腹の兄弟
 でも同じであるが、死んでからのことを思うと早くから親しませて
 おくほうが双方に愛情のできることであると思つて、姫君のほうの
 南側の座敷の御簾みすの中へ来ることを許したのであるが台盤所たいばんどころの女房
 たちの集まつているほうへはいることは許してないのである。源氏
 のためにただ二人だけの子であつたから兄妹を源氏は大事にしてい
 た。中將は落ち着いた重々しいところのある性質であつたから、源
 氏は安心して姫君の介添え役をさせた。幼い雛遊ひなびの場にもよく出
 会うことがあつて、中將は恋人とともに遊んで暮らした年月をそん
 な時にはよく思い出されるので、妹のためにもよい相手役になりな
 がらも時々はしおしおとした気持ちになつた。若い女性たちに恋の
 戯れを言いかけても、将来に希望をつながせるようなことは絶対に
 しなかつた。妻の一人にしたいと心の惹ひかれるような人も、しいて
 一時的の対象とみなして、それ以上関係を進行させることもなかつ

た。今でも緑の袖とはずかしめられた人との関係だけを尊重して、その人以外の人を妻に擬して考えることは不可能であった。許されようと熱心ぶりを見せれば伯父おじの大臣も夫婦にしてくれるであろうが、恨めしかったところに、どんなことがあっても伯父が哀願するでなければ結婚はすまいと思つたことが忘れなかつた。雲井くもいの雁かりの所へは情けをこめた手紙を常に送つていても、表面はあくまでも冷静な態度を保つているのである。この態度をまた雲井の雁の兄弟たちは恨んでいた。

玉鬘たまかすらに右近中將は深く恋をして仲介役をするのは童女のみるこ」
 #「みるこ」に傍点」だけであつたから、たよりなさにこの中將を味方に頼むのであつた。

「人のことではそう熱心になれない問題だから」
 などと左中將は冷淡に言つていた。

内大臣は腹々はらひらひに幾人もの子があつて、大人おとなになつたそれぞれの子息の人柄にしたがつて政權の行使が自由なこの人は皆適した地位につかせていた。女の子は少なくて后きさきの競争に負け失意の人になつてゐる女御にょごと恋の過失をしてしまつた雲井の雁だけなのであつたから、大臣は残念がつていた。この人は今も撫子なでしこの歌を母親が詠よんできた女の子を忘れなかつた。かつて人にも話したほどであるから、どうしたであろう、たよりない性格の母親のために、あのかわいかつた人を行方ゆくえ不明にさせてしまつた、女というものは少しも目が放されないものである、親の不名誉を思わずに卑しく零落をしながら自分の娘であると言つていゝのではなかるうか、それでもよいから出て来てほしいと大臣は恋しがつていた。息子むすこたちにも、

「もしそういうことを言つてゐる女があつたら、氣をつけて聞いて

おいてくれ。放縦な恋愛もずいぶんしていた中で、その母である人はただ軽々しく相手にしていた女でもなく、ほんとうに愛していた人なのだが、何でもないことで悲観して、私に少ない女の子一人をどこにいるかもしれないとされてしまったのが残念でならない」

とよく話していた。中ほどには忘れてしまったのであるが、他人がすぐれたふうにならなかつたことで失望を感じることも多くなって、近ごろは急に別れた女の子を思うようになったのである。ある夢を見た時に、上手な夢占いをする男を呼んで解かせてみると、

「長い間忘れておいでになったお子さんで、人の子になっていらっしやる方のお知らせをお受けになるといふようなことはございませんか」

と言った。

「男は養子になるが、女というものはそう人に養われるものではないのだが、どういうことになっているのだろう」

と、それから時々内大臣はこのことを家庭で話題にした。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>)

で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

「ただもう少し近くへ伺うことをお許しください。その機会に私の思い悩んでいる心を直接お洩らしして、それによってせめて慰みたいと思います。」の部分は、手紙の一部であると判断し、他の箇所に合わせて一字下げとしました。

入力：上田英代

校正：砂場清隆

2003年7月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

常夏

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）源氏は東の釣殿へ出て涼んでいた

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）始終一違あいたい

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」露置きてくれなゐいとど深けれども

「#地から3字上げ」ひ悩めるなでしこの花 （晶子）

炎暑の日に源氏は東の釣殿へ出て涼んでいた。子息の中將が侍しているほかに、親しい殿上役人も数人席にいた。桂川の鮎、加茂川の石臥などというような魚を見る前で調理させて賞味するのであったが、例のようにまた内大臣の子息たちが中將を訪ねて来た。

「寂しく退屈な気がして眠かった時によくおいでになった」

と源氏は言つて酒を勧めた。氷の水、水飯すいはんなどを若い人は皆大騒ぎして食べた。風はよく吹き通すのであるが、晴れた空が西日になるころには蝉せみの声などからも苦しい熱が撒まかれる気がするほど暑気が堪えがたくなった。

「水の上の価値が少しもわからない暑さだ。私はこんなふうにして失礼する」

源氏はこう言つて身体からだを横たえた。

「こんなころは音楽を聞こうという気にもならないし、さてまた退屈だし、困りますね。お勤めに出る人たちはたまらないでしょうね。帯も紐ひもも解かれぬいだからね。私の所だけでも几帳面きちょうめんにせず気楽なふうになって、世間話でもしたらどうですか。何か珍しいこととで睡気ねむけのさめるような話はありませんか。なんだかもう老人としやうになつてしまった気がして世間のこともまったく知らずにいますよ」

などと源氏は言うが、新しい事実として話し出すような問題もなくて、皆かしこまったふうで、涼しい高欄に背を押しつけたまま黙つていた。

「どうしてだれが私に言ったことかも覚えていないのだが、あなたのほうの大臣がこのころほかでお生まれになつたお嬢さんを引き取つて大事がつておいでになるということを聞きましたがおほんとうですか」

と源氏は弁べんの少将に問うた。

「そんなふうには世間でたいそうに申されるようなことでもございません。この春大臣が夢占いをさせましたことが噂うわさになりました、それからひょつくりと自分は縁故のある者だと名のつて出て来ました

のを、兄の中將が真偽の調査にあたりまして、それから引き取つて来たようですが、私は細かいことをよく存じません。結局珍談の材料を世間へ呈供いたしましたことになつたのでございます。大臣の尊厳がどれだけそれでそこなわれましたかしれません」

少將の答えがこうであつたから、ほんとうのことだつたと源氏は思つた。

「たくさんな雁かりの列から離れた一羽までもしいてお捜しになつたのが少し欲深かつたのですね。私の所などこそ、子供が少ないのだから、そんな女の子なども見つけたいのだが、私の所では気が進まないのか少しも名のつて来てくれる者がない。しかしともかく迷惑なことだつても大臣のお嬢さんには違ひないのでしよう。若い時分は無節制に恋愛関係をお作りになつたものだからね。底のきれいでない水に映る月は曇らないであろうわけはないのだからね」

と源氏は微笑しながら言つていた。子息の左中將も真相をくわしく聞いていることであつたからこれも笑いを洩もらさないではいられなかつた。弁の少將と藤侍ついではつらそうであつた。

「ねえ朝臣あそん、おまえはその落ち葉でも拾つたらいいだろう。不名誉な失恋男になるよりは同じ姉妹きょうだいなのだからそれで満足をすればいいのだよ」

子息をからかうような調子で父の源氏は言うのであつた。内大臣と源氏は大体は仲のよい親友なのであるが、ずっと以前から性格の相違が原因になつたわずかな感情の隔たりはあつたし、このころはまた中將を侮蔑ぶくつして失恋の苦しみをさせている大臣の態度に飽き足らないものがあつて、源氏は大臣が癪しゃくにさわる放言をすると間接に聞くように言つているのである。新しい娘を迎えて失望している大

臣の噂を聞いても、源氏は玉鬘のことを聞いた時に、その人はきつと大騒ぎをして大事に扱うことであろう、自尊心の強い、対象にする物の善さ悪さで態度を鮮明にしないではいられない性質の大臣は、近ごろ引き取った娘に失望を感じている様子は想像ができるし、また突然にこの玉鬘を見せた時の歡びぶりも思われなくてもない、極度の珍重ぶりを見せることであろうなどと源氏は思っていた。夕べに移るころの風が涼しくて、若い公子たちは皆ここを立ち去りがたく思うふうである。

「気楽に涼んで行ったらいいでしょう。私もとうとう青年たちからけむたがられる年になった」

こう言つて、源氏は近い西の対を訪ねようとしていたから、公子たちは皆見送りをするためについて行つた。日の暮れ時のほの暗い光線の中では、同じような直衣姿のだれがだれであるかもよくわからないのであつたが、源氏は玉鬘に、

「少し外をよく見える所まで来てごらんなさい」

と言つて、従えて来た青年たちのいる方をのぞかせた。

「少将や侍従をつれて来ましたよ。ここへは走り寄りたいほどの好奇心を持つ青年たちなのだが、中將がきまじめ過ぎてつれて来ないのでですよ。同情のないことですよ。この青年たちはあなたに対して無関心な者が一人もないでしょう。つまらない家の者でも娘でいる間は若い男にとって好奇心の対象になるものだからね。私の家というものを實質以上にだれも買いかぶっているのですからね、しかも若い連中は六条院の夫人たちを恋の対象にして空想に陶醉するようなことはできないことだったので、あなたという人ができたから皆の注意はあなたに集まることになったのです。そうした求婚者の真

実の深さ浅さというようなものを、第三者になつて観察するのはおもしろいことだろうと、退屈なあまりに以前からそんなことがあればいいと思つていたのがようやく時期が来たわけです」

などと源氏はささやいていた。この前の庭には各種類の草花を混ぜて植えるようなことはせずに、美しい色をした撫子ばかりを、唐撫子、大和撫子もことに優秀なのを選んで、低く作つた垣に添えて植えてあるのが夕映えに光つて見えた。公子たちはその前を歩いて、じつと心が惹かれるようにたたずんだりもしていた。

「りっぱな青年官吏ばかりですよ。様子にもとりなしにも欠点は少ない。今日は見えないが右中將は年かさだけあつてまた優雅さが格別ですよ。どうです、あれからのちも手紙を送つてよこしますか。

軽蔑するような態度はとらないようにしなければいけない」

などとも源氏は言った。すぐれたこの公子たちの中でも源中將は目だつて艶な姿に見えた。

「中將をきらうことは内大臣として意を得ないことですよ。御自分が尊貴であればあの子も同じ兄妹から生まれた尊貴な血筋というもののだからね。しかしあまり系統がきちんとしていて王風の点が気に入らないのですかね」

と源氏が言った。

「来まさば（おほきみ来ませ婿にせん）というような人もあすこにはあるのではございませんか」

「いや、何も婿に取られたいのではありませんがね。若い二人が作つた夢をこわしたままにして幾年も置いておかれるのは残酷だと思つたのです。まだ官位が低くて世間体がよろしくないと思われるのだつたら、公然のことにはしないで私へお嬢さんを託しておかれると

いう形式だつていいじゃないのですか。私が責任を持てばいいはずだと思ふのだが」

源氏は歎息した。自分の実父との間にはこうした感情の疎隔があるのかと玉鬘ははじめて知った。これが支障になつて親に逢あいうる日がまだはるかなことに思わねばならないのであるかと悲しくも思ひ、苦しくも思つた。月がないころであつたから燈籠とうろうに灯ひがともされた。

「灯が近すぎて暑苦しい、これよりは簾かがりがよい」

と言つて、

「簾を一つこの庭で焚たくように」

と源氏は命じた。よい和琴わこんがそこに出ているのを見つけて、引き寄せて、鳴らしてみると律の調子に合わせてあつた。よい音もする琴であつたから少し源氏は弾ひいて、

「こんなほうのことには趣味を持つていられないのかと、失礼な推測をしてましたよ。秋の涼しい月夜などに、虫の声に合わせるほどの気持ちでこれの弾かれるのははなやかでいいものです。これはもつたいらしく弾く性質の楽器ではないのですが、不思議な楽器で、すべての楽器の基調になる音を持っている物はこれなのですよ。簡単にやまと琴という名をつけられながら無限の深味のあるものなのです。ほかの楽器の扱いにくい女の人のために作られた物の気がします。おやりになるのならほかの物に合わせて熱心に練習なさい。むずかしいことがないような物で、さてこれに妙技を現わすということとはむずかしいといつたような楽器です。現在では内大臣が第一の名手です。ただ清掻すがきをされるのにもあらゆる楽器の音を含んだ声こゑが立ちますよ」

と源氏は言った。玉鬘もそのことはかねてから聞いて知っていた。どうかして父の大臣の爪音つまおとに接したいとは以前から願っていたことで、あこがれていた心が今また大きな衝動を受けたのである。

「こちらにありまして、音楽のお遊びがございます時などに聞くことができそうですでしょうか。田舎いなかの人などもこれはよく習っております琴ですから、気楽に稽古けいこができますもののように私は思っていたのでございますがほんとうの上手じょうずな人の弾くのは違っているのございましょうね」

玉鬘は熱心なふうに尋ねた。

「そうですよ。あずま琴などとも言ってね、その名前だけでも軽蔑けいべつしてつけられている琴のようですが、宮中の御遊ぎょゆうの時に図書としよの役人に楽器の搬入を命ぜられるのにも、ほかの国は知りませんがここではまず大和琴やまとが真先まっさきに言われます。つまりあらゆる楽器の親にこれがされているわけです。弾ひくことは練習次第で上達しますが、お父さんに同じ音楽的の遺伝のある娘がお習いすることは理想的ですね。私の家などへも何かの場合においてにならないことはありませんが、精いっぱいには弾かれるのを聞くことなどは困難でしょう。名人の芸というものはなかなか容易に全部を見せようとしませんものですからね。しかしあなたはいつか聞けますよ」

こう言いながら源氏は少し弾いた。はなやかな音であった。これ以上な音が父には出るのであるかと玉鬘たまかすらは不思議な気もしながらますます父にあこがれた。ただ一つの和琴わじゆの音だけでも、いつの日に自分は娘のために打ち解けて弾いてくれる父親の爪音つまおとにあうことができるのであろうと玉鬘はみずからをあわれんだ。「貫川ぬきがはの瀬々せせのやはらだ」(やはらたまくらやはらかに寝る夜はなくて親さくる

妻)となつかしい声で源氏は歌っていたが「親さくる妻」は少し笑いながら歌い終わったあとの清掻すがきが非常におもしろく聞かれた。

「さあ弾いてごらんなさい。芸事は人に恥じていては進歩しないものですよ。『想夫恋そつづれん』だけはきまりが悪いかもしれませんがね。とにかくだれとでもつとめて合わせるのがいいのですよ」

源氏は玉鬘の弾くことを熱心に勧めるのであったが、九州の田舎で、京の人であることを標榜ひょうぼうしていた王族の端くれのような人から教えられただけの稽古けいこであったから、まちがっていてはと気恥ずかしく思つて玉鬘は手を出そうとしないのであった。源氏が弾くのを少し長く聞いていれば得る所があるであろう、少しでも多く弾いてほしいと思う玉鬘であつた。いつとなく源氏のほうへ膝行ひざり寄つていた。

「不思議な風が出てきて琴の音響ひびきを引き立てている気がします。どうしたのでしょうか」

と首を傾けている玉鬘の様子が灯ひの明りに美しく見えた。源氏は笑いながら、

「熱心に聞いていてくれない人には、外から身にしむ風も吹いてくるでしょう」

と言つて、源氏は和琴を押しやってしまった。玉鬘は失望に似たようなものを覚えた。女房たちが近い所に来ているので、例のような戯談じょつだんも源氏は言えなかつた。

「撫子なでこを十分に見ないで青年たちは行つてしまいましたね。どうかして大臣にもこの花壇をお見せしたいものですよ。無常の世なのだから、すべきことはすみやかにしなければいけない。昔大臣が話のついでにあなたの話をされたのも今のこのような気もします」

源氏はその時の大臣の言葉を思い出して語った。玉鬘は悲しい気持ちになつていた。

「#ここから1字下げ」

「なでしこの常とこなつかしき色を見ればもとの垣根かきねを人や尋ねん

「#ここで字下げ終わり」

私にはあなたのお母さんのことで、やましい点があつて、それでつい報告してあげることが遅れてしまふのです」

と源氏は言った。玉鬘は泣いて、

「#ここから2字下げ」

山がつの垣かきほに生おひし撫子なでしこのもとの根ざしをたれか尋ねん

「#ここで字下げ終わり」

とはかないふうに言つてしまふ様子が若々しくなつたかしいものと思われた。源氏の心はますますこの人へ惹ひかれるばかりであつた。苦しいほどにも恋しくなつた。源氏はとうていこの恋心は抑制してしまふことのできるものでないと知つた。

玉鬘たまかすらの西の対への訪問があまりに続いて人目を引きそうに思われる時は、源氏も心の鬼にとがめられて間は置くが、そんな時には何かと用事らしいことをこしらえて手紙が送られるのである。この人のことだけが毎日の心にかかつている源氏であつた。なぜよけいなことをし始めて物思いを自分はそののであろう、煩悶はんもんなどはせず感情のままに行動することにすれば、世間の批難は免れないである

うが、それも自分はよいとして女のために気の毒である。どんなに深く愛しても春の女王はるのおうと同じだけにその人を思うことの不可能であることは、自分ながらも明らかに知っている。第二の妻であることによつて幸福があるうとは思われぬ。自分だけはこの世のすぐれた存在であつても、自分の幾人もの妻の中の一人である女に名譽のあるわけはない。平凡な納言級の人の唯一の妻になるよりも決して女のために幸福でないと源氏は知っているのであつたから、しいて情人にするのが哀れで、兵部卿ひょうぶけいの宮みやか右大将みぎたいしやうに結婚を許そうか、そうして良人おつとの家へ行つてしまえばこの悩ましさを自分から救われるかもしれない。消極的な考えではあるがその方法を取ろうかと思う時もあつた。しかもまた西の対へ行つて美しい玉鬘たまごもを見たり、このごろは琴を教へてもいたので、以前よりも近々と寄つたりしては決心していたことが揺ゆいでしまふのであつた。玉鬘もこうしたふうに源氏が扱あい始めたころは、恐ろしい気もし、反感を持ったが、それ以上のことはなくて、やはり信頼のできそうなのに安心して、しいて源氏の愛撫あいぶからのがれようとはしなかつた。返辞などもなれなれしくならぬ程度にする愛嬌あいぎやうの多さは知らず知らずに十分の魅力になつて、前の考えなどは合理的なものでないと源氏をして思わせた。それでは今のままに自分の手もとへ置いて結婚をさせることにしよう、そして自分の恋人にもしておこう、処女である点が自分に躑躅ちゅうじゆくをさせるのであるが、結婚をしたのちもこの人に深い愛をもつて臨めば、良人おつとのあることなどは問題でなく恋は成り立つに違ちがひないといふよ深い煩悶はんもんに源氏は陥ることであらうし、熱烈でない愛しようはできない性質でもあるから悲劇がそこに起こりそうな氣のすること

である。

内大臣が娘だと名のつて出た女を、直ちに自邸へ引き取った処置について、家族も家司けいしたちもそれを軽率だと言っていること、世間でも誤ったしかただと言っていることも皆大臣の耳にははいつていたが、弁べんの少将が話のついでに源氏からそんなことがあるかと聞かれたことを言い出した時に大臣は笑って言った。

「そうだ、あすこにも今まで噂うわさも聞いたことのない外腹の令嬢ができて、それをたいそうに扱っていられるではないか。あまりに他人のことを言われぬ大臣だが、不思議に私の家のことだと口の悪い批評をされる。このことなどはそれを証明するものだよ」

「あちらの西の対の姫君はあまり欠点もない人らしゅうございます。兵部卿ひぐよの宮などは熱心に結婚したがっていらっしゃるのですから、平凡な令嬢でないことが想像されると世間でも言っております」

「さあそれがね、源氏の大臣の令嬢である点でだけありがたく思われるのだよ。世間の人心というものは皆それなのだ。必ずしも優秀な姫君ではなからう。相当な母親から生まれた人であれば以前から人が聞いているはずだよ。円満な幸福を持っていられる方だが、りっぱな夫人から生まれた令嬢が一人もないのを思うと、だいたい子供が少ないたちなんだね。劣り腹あかしといって明石あかしの女の生んだ人は、不思議な因縁で生まれたということだけでも何となく未来の好運が想像されるがね。新しい令嬢はどうかすれば、それは実子でないかもしれない。そんな常識で考えられないようなこともあの人にはされるのだよ」

と内大臣は玉鬘たまかすらをけなした。

「それにしても、だれが婿に決まるのだらう。兵部卿の宮の御熱心

が結局勝利を占められることになるのだらう。もとから特別にお仲がいいのだし、大臣の趣味とよく一致した風流人だからね」

と言ったあとに大臣は雲井の雁のことを残念に思った。そうしたふうにだれと結婚をするかと世間に興味を持たせる娘に仕立てそこねたのがくやしいのである。これによつても中将が今一段光彩のある官に上らない間は結婚が許されないと大臣は思った。源氏がその問題の中へはいつて来て懇請することがあれば、やむをえず負けた形式で同意をしようという大臣の腹であつたが、中将のほうでは少しも焦慮するふうを見せず落ち着いていたのであつたからしかたがないのである。こんなことをいろいろと考えていた大臣は突然行つて見たい気になつて雲井の雁の居間を訪ねた。少将も供をして行つた。雲井の雁はちょうど昼寝をしていた。薄物の単衣を着て横たわつている姿からは暑い感じを受けなかつた。可憐な小柄な姫君である。薄物に透いて見える肌の色がきれいであつた。美しい手つきをして扇を持ちながらその肱を枕にしていた。横にたまつた髪はそれほど長くも、多くもないが、端のほうを感じよく美しく見えた。女房たちも几帳の蔭などにはいつて昼寝をしている時であつたから、大臣の来たことをまだ姫君は知らない。扇を父が鳴らす音に何げなく上を見上げた顔つきが可憐で、頬の赤くなつているのなども親の目には非常に美しいものに見られた。

「うたた寝はいけないことなのに、なぜこんなふうな寝方をしてましたか。女房なども近くに付いていないでけしからんことだ。女というものは始終自身を護る心がなければいけない。自分自身を打ちやりしているようなふうの見えることは品の悪いものだ。賢そうに不動の陀羅尼を読んで印を組んでいるようなのも憎らしいがね。そ

れは極端な例だが、普通の人でも少しも人と接触をせず奥に引き入ってばかりいるようなことも、けだか気高いようでもまたあまり感じのいいものではない。太政大臣が未来のお后おきさきの姫君を教育していられる方針は、いろんなことに通じさせて、しかも目だつほど専門的に一つのことを深くやらせまい、そしてまたわからないことは何も無いようにということであるらしい。それはもつともなことだが、人間にはそれぞれの天分があるし、特に好きなこともあるのだから、何かの特色が自然出てくることだろうと思われる。大人おとなになつて宮廷へはいられるころはたいしたものだろうと予想される」

などと大臣は娘に言っていたが、

「あなたをこうしてあげたいといろいろ思っていたことは空想になつてしまつたが、私はそれでもあなたを世間から笑われる人にはしたくないと、よその人のいろいろの話を聞くことにあなたのことを思つてはんもん煩悶する。ためそうとするだけで、表面的な好意を寄せるような男に動揺させられるようなことがあつてはいけませんよ。私は一つの考えがあるのだから」

ともかわいく思いながら訓いましめもした。昔は何も深く考えることができずに、あの騒ぎのあつた時も恥知らずに平気で父に対していたと思ひ出すだけでも胸がふさがるように雲井の雁は思つた。大宮の所からは始終一達あいたたいというふうにお手紙が来るのであるが、大臣が気にかけていることを思うと、御訪問も容易にできないのである。

大臣は北の対に住ませである令嬢をどうすればよいか、よけいなことをして引き取つたあとで、また人が譏そしるからといって家へ送り帰すのも軽率な氣のすることであるが、娘らしくさせておいては満

足しているらしく自分の心持が誤解されることになっていやである、女御にょごの所へ来させることにして、馬鹿娘ばかとして人中に置くことにさせよう、悪い容貌かたちだというのがそう見苦しい顔でもないのであるからと思つて、大臣は女御に、

「あの娘をあなたの所へよこすことにしよう。悪いことは年のいった女房などに遠慮なく矯正きようせいさせて使ってください。若い女房などが何を言つてもあなたただけはいつしよになつて笑うようなことをしないで置きなさい。軽佻けいちように見えることだから」

と笑いながら言つた。

「だれがどう言ひましても、そんなつまらない人ではきつとないと思います。中将の兄様などの非常な期待に添そわなかつたというだけでしよう。こちらへ来ましてからいろんな取り沙汰などをされて、一つはそれでのぼせて粗相そそうなこともするのでございましょう」

と女御は貴女きじよらしい品のある様子で言つていた。この人は一つ一つ取り立てて美しいということのできない顔で、そして品よく澄み切つた美の備わつた、美しい梅の半ば開いた花を朝の光に見るような奥ゆかしさを見せて微笑しているのを大臣は満足して見た。だれよりもすぐれた娘であると意識したのである。

「しかしなんといつても中将の無経験がさせた失敗だ」

などとも父に言われている新令嬢は気の毒である。大臣は女房を訪ねた帰りにその人の所へも行つて見た。

座敷の御簾みすをいっばいに張り出すようにして裾すそをおさえた中で、五節ごせちという生意気な若い女房と令嬢は双六すしうくを打つていた。

「しょうさい、しょうさい」

と両手をすりすり賽を撒く時の呪文を早口に唱えているのに悪感

を覚えながらも大臣は従つて来た人たちの人払いの声を手で制して、
 なおも妻戸の細目に開いた隙すきから、障子の向こうを大臣はのぞいて
 いた。五節も蓮葉はすはらしく騒いでいた。

「御返報しますよ。御返報しますよ」

賽の筒を手でひねりながらすぐには撒こうとしない。姫君の容貌
 は、ちよつと人好きのする愛嬌あいぎょうのある顔で、髪もきれいであるが、
 額の狭いのと頓狂とんきやうな声とにそこなわれている女である。美人ではな
 いがこの娘の顔に、鏡で知っている自身の顔と共通したもののある
 のを見て、大臣は運にのろわれている気がした。

「こちらで暮らすようになって、あなたに何か気に入らないことが
 ありますか。つい忙しくて訪ねたずに来ることも十分できないが」

と大臣が言うと、例の調子で新令嬢は言う。

「こうしていられますことに何の不足があるものでございますか。
 長い間お目にかかりたいと念がけておりましたお顔を、始終拝見で
 きませんことだけは成功したものは思われませんが」

「そうだ、私もそばで手足の代わりに使う者もあまりないのだから、
 あなたが来たらそんな用でもしてもらおうかと思つていたが、やは
 りそうはいかないものだからね。ただの女房たちというものは、多
 少の身分の高下はあつても、皆いっしょに用事をしていては目だた
 ずに済んで気安いものなのだが、それでもだれの娘、だれの子とい
 うことが知られているほどの身の上の者は、親兄弟の名譽を傷つけ
 るようなことも自然起こつてきておもしろくないものだろうが、ま
 して」

言いさして話をやめた父の自尊心などに令嬢は頓着とんじやくしていなかつ
 た。

「いいえ、かまいませんとも、令嬢だなどと思召さないで、女房たちの一人としてお使いくださいまし。お便器のほうのお仕事だつて私はさせていただきます」

「それはあまりに不似合いな役でしょう。たまたま巡り合つた親に孝行をしてくれる心があれば、その物言いを少し静かにして聞かせてください。それができれば私の命も延びるだろう」

道化たことを言うのも好きな大臣は笑いながら言っていた。

「私の舌の性質がそんなんですね。小さい時にも母が心配しましてよく訓戒されました。妙法寺の別当の坊様が私の生まれる時一産屋にいたのですつてね。その方にあやかつたのだと言つて母が歎息しておりました。どうかして直したいと思つております」

むきになつてこう言うのを聞いても孝心はある娘であると大臣は思つた。

「産屋うぶやなどへそんなお坊さんの来られたのが災難なんだね。そのお坊さんの持つてゐる罪の報いに違いないよ。唾おしと吃どもりは仏教を譏そしつた者の報いに数えられてあるからね」

と大臣は言つていたが、子ながらも畏敬いけいの心の湧わく女御にょいの所へこの娘をやることは恥はずかしい、どうしてこんな欠陥けつあの多い者を家へ引き取つたのであろう、人中へ出せばいよいよ悪評あくへいがそれからそれへ伝えられる結果を生むではないかと思つて、大臣は計画を捨てる気にもなつたのであるが、また、

「女御にょいが家へ帰つておいでになる間に、あなたは時々あちらへ行つて、いろんなことを見習うがいいと思う。平凡な人間も貴女きじよがたの作法えとくに会得えとくが行くと違つてくるものだからね。そんなつもりであちらへ行こうと思ひますか」

とも言った。

「まあうれしい。私はどうかして皆さんから兄弟だと認めていただきたくとも寝ても醒めても祈っているのをごさいますからね。そのほかのことはどうでもいいと思つていたくらいでございますからね。

お許しさえございましたら女御さんのために私は水を汲んだり運んだりしましてもお仕えいたします」

なお早口にしゃべり続けるのを聞いていて大臣はますます憂鬱な気分になるのを、紛らすために言った。

「そんな労働などはしないでもいいがお行きなさい。あやかつたお坊さんはなるべく遠方のほうへやっっておいてね」

滑稽扱いにして言つているとも令嬢は知らない。また同じ大臣といつても、きれいで、物々しい風采を備えた、りっぱな中のりっぱな大臣で、だれも気おくれを感じるほどの父であることも令嬢は知らない。

「それではいつ女御さんの所へ参りましょう」

「そう、吉日でなければならぬかね。なにいいよ、そんなたいそうなふうには考えずに、行こうと思えば今日にでも」

言い捨てて大臣は出て行った。四位五位の官人が多くあとに従つた、権勢の強さの思われる父君を見送つていた令嬢は言う。

「ごりっぱなお父様なこと、あんな方の種なんだのに、ずいぶん小さい家で育つたものだ私は」

五節は横から、

「でもあまりおいはりになりすぎますわ、もつと御自分はよくなくても、ほんとうに愛してくださるようなお父様に引き取られていらつしやればよかつた」

と言った。真理がありそうである。

「まああなた、ぶちこわしを言うのね。失礼だわ。私と自分を同じように言うようなことはよしてくださいよ。私はあなたなどとは違った者なのだから」

腹をたてて言う令嬢の顔つきに愛嬌あいきょうがあつて、ふざけたふうな姿が可憐かれんでないこともなかった。ただきわめて下層の家で育てられた人であつたから、ものの言いようを知らないのである。何でもない言葉もゆるく落ち着いて言えば聞き手はよいことのように聞くであらうし、巧妙でない歌を話に入れて言う時も、声こゑづかいをよくして、初め終わりをよく聞けないほどにして言えば、作の善悪を批判する余裕のないその場ではおもしろいことのようにも受け取られるのである。強々こわこわしく非音楽的な言いようをすれば善よいことも悪く思われる。乳母めのとこの懐育ふといちのまま、何の教養も加えられてない新令嬢の真価は外観から誤られもするのである。そう頭が悪いのでもなかった。三十一字の初めと終わりの一貫してないような歌を早く作って見せるくらいの才もあるのである。

「女御さんの所へ行けとお言いになったのだから、私がしぶしぶにして気が進まないふうに見えては感情をお害しになるだろう。私は今夜のうちに出かけることにする。大臣がいらっしゃっても女御さんなどから冷淡にされてはこの家で立って行きようがないじゃないか」

と令嬢は言っていた。自信のなさが気の毒である。手紙を先に書いた。

「#ここから1字下げ」

葦垣あしがきのまぢかきほどに侍はべらひながら、今まで影踏むばかりのしるし

も侍らぬは、なこそその関をや据ゑさせ給ひつらんとなん。知らねども武蔵野といへばかしこけれど、あなかしこやかしこや。

「#ここで字下げ終わり」

点の多い書き方で、裏にはまた、

「#ここから1字下げ」

まことや、暮れにも参りこむと思ひ給へ立つは、厭ふにはゆるにや侍らん。いでや、いでや、怪しきはみなせ川にを。

「#ここで字下げ終わり」

と書かれ、端のほうに歌もあつた。

「#ここから2字下げ」

草若みひたちの海のいかが崎いかで相見む田子の浦波

「#ここから1字下げ」

大川水の（みよし野の大川水のゆほびかに思ふものゆゑ浪の立つらん）

「#ここで字下げ終わり」

青い色紙一重ねに漢字がちに書かれてあつた。肩がいかつて、しかも漂つて見えるほど力のない字、しという字を長く気どつて書いてある。一行一行が曲がつて倒れそうな自身の字を、満足そうに令嬢は微笑して読み返したあとで、さすがに細く小さく巻いて撫子の花へつけたのであつた。廁係りの童女はきれいな子で、奉公なれた新参者であるが、それが使いになつて、女御の台盤所へそつと行つて、

「これを差し上げてください」

と言つて出した。下仕えしもじかの女が顔を知つていて、北の対に使われ
ている女の子だといつて、撫子を受け取つた。大輔たゆうという女房が女
御の所へ持つて出て、手紙をあけて見せた。女御は微笑をしながら
下へ置いた手紙を、中納言という女房がそばにいて少し読んだ。

「何でございますか、新しい書き方のお手紙のようでございますね」
となお見たそうに言うのを聞いて、女御は、

「漢字は見つけないせいかしら、前後が一貫してないように私など
には思われる手紙よ」

と言いながら渡した。

「返事もそんなふうにたいそうに書かないでは低級だと言つて軽蔑けいべつ
されるだろうね。それを読んだついでにあなたから書いておやりよ」

と女御は言うのであつた。露骨に笑い声はたてないが若い女房は
皆笑つていた。使いが返事を請求してきていると言つてきた。

「風流なお言葉ばかりでできているお手紙ですから、お返事はむず
かしゅうございます。仰せはこうこうと書いて差し上げるのも失礼
ですし」

と言つて、中納言は女御の手紙のようにして書いた。

「#ここから1字下げ」

近きしるしなきおぼつかなさなみは恨めしく、

「#ここから2字下げ」

ひたちなる駿河するがの海の須磨すまの浦に浪立ちいでよ箱崎はこさきの松

「#ここで字下げ終わり」

中納言が読むのを聞いて女御は、

「そんなこと、私が言ったように人が皆思うだろうから」

と言って困ったような顔をしていると、

「大丈夫でございますよ。聞いた人が判断いたしますよ」

と中納言は言って、そのまま包んで出した。新令嬢はそれを見て、

「うまいお歌なこと、まつとお言いになったのだから」

と言って、甘いにおいの薫香くんこうを熱心に着物へ焚き込んでいた。紅べに

を赤々つけて、髪をきれいになでつけた姿にはにぎやかな愛嬌あいきょうが

あった、女御との会談にどんな失態をすることか。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>)

で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：砂場清隆

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

.aorozora.gr.jp)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

篝火

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）玉鬘たまかずらは

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）十三げん一絃げんの

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」大きなまゆみのもとに美しくかがり

「#地から3字上げ」火もえて涼風ぞ吹く （晶子）

このごろ、世間では内大臣の新令嬢という言葉を何かのことにつけては言うのを源氏の大臣は聞いて、

「ともかくも深窓に置かれる娘を、最初は大騒ぎもして迎えておきながら、今では世間へ笑いの材料に呈供しているような大臣の気持

ちが理解できない。自尊心の強い性質から、ほかで育った娘の出来のよしあしも考えずに呼び寄せたあとで、気に入らない不愉快さを、そうした侮辱的扱いで紛らしているのであろう。実質はともかくも周囲の人が愛でつくろえば世間体をよくすることもできるものなのだけれど」

と言つて愛されない令嬢に同情していた。そんなことも聞いて玉鬘たまがらは親であつてもどんな性格であるとも知らずに接近して行つては恥ずかしい目にあうことが自分にないとも思われなれと感じた。右近もそれを強めたような意見を告げた。迷惑な恋心は持たれているが、そうかといつて無理をしいようともせず愛情はますます深く感ぜられる源氏であつたから、ようやく玉鬘も不安なしに親しむことができるようになった。

秋にもなつた。風が涼しく吹いて身にしむ思いのそそられる時であるから、恋しい玉鬘の所へ源氏は始終来て、一日をそこで暮らすようなことがあつた。琴を教えたりもしていた。五、六日ごろの夕月は早く落ちてしまつて、涼しい色の曇つた空のもとでは萩あぎの葉が哀れに鳴つていた。琴を枕まくらにして源氏と玉鬘とは並んで仮寝かりねをしていた。こんなみじめな境地はないであろうと源氏は歎息たんそくをしながら夜ふかしをしていたが、人が怪しむことをはばかり帰つて行くこととして、前の庭の簾かがりが少し消えかかっているのを、ついて来ていた右近衛うこんえの丞じょうに命じてさらに燃やさせた。涼しい流れの所におもしろい形で広がつた檀まゆみの木の下に美しい簾は燃え始めたのである。座敷のほうへはちょうど涼しいほどの明りがさして、女の美しさが浮き出して見えた。髪の手ざわりの冷たいことなども艶えんな気がして、恥ずかしそうにしている様子が可憐かれんであつた源氏は立ち去る気になれ

ないのである。

「始終こちらを見まわって篝を絶やさぬようにするがいい。暑いころ、月のない間は庭に光のないのは気味の悪いものだからね」

と右近の丞に言っていた。

「#ここから1字下げ」

「篝火に立ち添ふ恋の煙こそ世には絶えせぬ焰ほのほなりけれ

「#ここで字下げ終わり」

いつまでもこの状態でいなければならないのでしょうか、苦しい下燃えというものですよ」

玉鬘にはこう言った。女はまた奇怪なことがささやかれると思つて、

「#ここから1字下げ」

「行方ゆくへなき空に消けちてよかがり火のたよりにたくふ煙とならば

「#ここで字下げ終わり」

人が不思議に思います」

と言った。源氏は困ったように見えた。

「さあ帰りますよ」

源氏が御簾みすから出る時に、東の対のほうに上手な笛が十三絃じゅうさんげんの琴に合わせて鳴っているのが聞こえた。それは始終中将といっしょに遊んでいる公達きんだちのすさびであった。

「頭中將づちゅうじょうに違ちがいない。上手な笛の音だ」

こう言つて源氏はそのままとどまつてしまつたのである。東の対へ人をやって、

「今こちらにいます。篝の明りの涼しいのに引き止められてです」と言わせると三人の公達がこちらへ来た。

「風の音秋になりにけりと聞こえる笛が私をそそのかした」

琴を中から出させてなつかしいふうに源氏は弾いた。源中将は盤渉調しきちやうに笛を吹いた。頭中将は晴れがましがって合奏の中へはいろいろとしないのを見て、

「おそいね」

と源氏は促した。弟の弁べんの少将が拍子を打ち出して、低音に歌い始めた声が鈴虫の音のようであつた。二度繰り返して歌わせたあとで、源氏は和琴わごんを頭中将へ譲つた。名手である父の大臣にもあまり劣らず中将は巧妙に弾いた。

「御簾の中に琴の音をよく聞き分ける人がいるはずなのです。今夜は私への杯はあまりささないようにしてほしい。青春を失つた者は酔い泣きといっしょに過去の追憶が多くなつて取り乱すことになるだろうから」

と源氏の言うのを姫君も身に沁しんで聞いた。兄弟の縁のあるこの人たちに特別の注意が払われているのであるが、頭中将も、弁の少将も、そんなことは夢にも知らなんだ。中将は堪えがたい恋を音楽に託して思うぞんぶんに琴をかき鳴らしたい心を静かにおさえて、控え目な弾ひき方をしていた。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年7月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

野分

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）在いまし

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）御一きげん機嫌

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと

行数）

（例）紫 「#」くさかんむり／宛」、第し三お水準ん→第し三お水準色

「#地から3字上げ」けざやかにめでたき人ぞ在いましたる野

「#地から3字上げ」分あが開あくる絵巻のおくに （晶子）

中宮じゅうぐうのお住居すまいの庭へ植えられた秋草は、今年はことさら種類が多
くて、その中へ風流な黒木、赤木のませ垣がきが所々に結ゆわれ、朝露夕

露の置き渡すころの優美な野の景色を見ては、春の山も忘れるほどにおもしろかった。春秋の優劣を論じる人は昔から秋をよいとするほうの数が多いのであったが、六条院の春の庭のながめに説を変えた人々はまたこのころでは秋の讚美者になっていた、世の中というもののように。

中宮はこれにお心が惹かれてずっと御実家生活を続けておいでになるのであるが、音楽の会の催しがあつてよいわけではあつても、八月は父君の前皇太子の御忌月であつたから、それにはばかつてお暮らしになるうちにますます草の花は盛りになった。今年の野分の風は例年よりも強い勢いで空の色も変わるほどに吹き出した。草花のしおれるのを見てはそれほど自然に対する愛のあるでもない浅はかな人さえも心が痛むのであるから、まして露の吹き散らされて無惨に乱れていく秋草を御覧になる宮は御病気にもおなりにならぬかと思われるほどの御心配をあそばされた。おおうばかりの袖というものは春の桜によりも実際は秋空の前に必要なものかと思われた。日が暮れてゆくにしたがつてしいたげられる草木の影は見えずに、風の音ばかりのつにつてくるのも恐ろしかったが、格子なども皆おろしてしまったので宮はただ草の花を哀れにお思いになるよりほかしかたもおありにならなかった。

南の御殿のほうも前の庭を修理させた直後であつたから、この野分にもとあらの小萩が奔放に枝を振り乱すのを傍観しているよりほかはなかつた。枝が折られて露の宿ともなれないふうの秋草を女王は縁の近くに出てながめていた。源氏は小姫君の所にいたころであつたが、中將が来て東の渡殿の衝立の上から妻戸の開いた中を何心もなく見ると女房がおおぜいいた。中將は立ちどまって音をさせぬ

ようにしてのぞいていた。屏風なども風のはげしいために皆曇み寄せてあったから、ずっと先のほうもよく見えるのであるが、その縁付きの座敷にいる一女性が中将の目にはいった。女房たちと混同して見える姿ではない。気高くてきれいで、さつと匂いの立つ気がして、春の曙の霞の中から美しい樺桜の咲き乱れたのを見いだしたような気がした。夢中になってながめる者の顔にまで愛嬌が反映するほどである。かつて見たことのない麗人である。御簾の吹き上げられるのを、女房たちがおさえ歩くのを見ながら、どうしたのかその人が笑った。非常に美しかった。草花に同情して奥へもはいらずに紫の女王がいたのである。女房もきれいな人ばかりがいるようであつても、そんなほうへは目が移らない。父の大臣が自分に接近する機会を与えないのは、こんなふうに男性が見ては平静でありえなくなる美貌の継母と自分を、聡明な父は隔離するようにして親しませなかつたのであつたと思うと、中将は自身の隙見の罪が恐ろしくなつて、立ち去ろうとする時に、源氏は西側の襖子をあけて夫人の居間へはいつて来た。

「いやな日だ。あわただしい風だね、格子を皆おろしてしまつがよい、男の用人がこの辺にもいるだろうから、用心をしなければ」

と源氏が言っているのを聞いて、中将はまた元の場所へ寄つてのぞいた。女王は何かものを言つていて源氏も微笑しながらその顔を見ていた。親という気がせぬほど源氏は若くきれいで、美しい男の盛りのように見えた。女の美もまた完成の域に達した時であろうと、身にしむほどに中将は思ったが、この東側の格子も風に吹き散らされて、立っている所が中から見えそうになつたのに恐れて身を退けてしまった。そして今来たように咳払いなどをしながら南の縁のほ

うへ歩いて出た。

「だから私が言ったように不用心だったのだ」

こう言った源氏がはじめて東の妻戸のあいていたことを見つけた。長い年月の間こうした機会がとらえられなかったのであるが、風は巖も動かすという言葉に真理がある、慎み深い貴女も風のために端へ出ておられて、自分に珍しい喜びを与えたのであると中将は思ったのであった。家司たちが出て来て、

「たいへんな風力でございます。北東から来るのでございますから、こちらはいくぶんよろしいわけでございます。馬場殿と南の釣殿などは危険に思われます」

などと主人に報告して、下人にはいろいろな命令を下していた。

「中将はどこから来たか」

「三条の宮にいたのでございますが、風が強くなりそうだと人が申すものですから、心配でこちらへ出て参りました。あちらではお一方きりなのですから心細そうになさいますして、風の音なども若い子のように恐ろしがっていられますからお気の毒に存じまして、またあちらへ参ろうと思えます」

と中将は言った。

「ほんとうにそうだ。早く行くがいいね。年がいつて若い子になるということは不思議なようでも実は皆そうなのだね」

と源氏は大宮に御同情していた。

「#ここから1字下げ」

騒がしい天気でございますから、いかがとお案じしておりますが、この朝臣がお付きしておりますことで安心してお伺いはいたしません。

「#ここで字下げ終わり」

という挨拶を言づてた。途中も吹きまくる風があつて侘しいのであつたが、まじめな公子であつたから、三条の宮の祖母君と、六条院の父君への御一機嫌伺いを欠くことはなくて、宮中の御謹慎日などで、御所から外へ出られぬ時以外は、役所の用の多い時にも臨時の御用の忙しい時にも、最初に六条院の父君の前へ出て、三条の宮から御所へ出勤することを規則正しくしている人で、こんな悪天候の中へ身を呈するようなお見舞いなども苦勞とせずにした。宮様は中将が来たので力を得たようにお喜びになつた。

「年寄りの私がまだこれまで経験しないほどの野分ですよ」とふるえておいでになつた。大木の枝の折れる音などもすごかつた。家々の瓦の飛ぶ中を来たのは冒険であつたとも宮は言つておいでになつた。はなやかな御生活をあそばされたことも皆過去のことになつて、この人一人をたよりにしておいでになる御現状を拝見しては無常も感ぜられるのである。今でも世間から受けておいでになる尊敬が薄らいだわけではないが、かえつてお一人子の内大臣のとの態度にあたたかさの欠けたところがあつた。

夜通し吹き続ける風に眠りえない中将は、物哀れな気持ちになつていた。今日は恋人のことが思われずに、風の中でした隙見ではじめて知るを得た継母の女王の面影が忘られないのであつた。これはどうしたことが、だいそれた罪を心で犯すことになるのではないかと思つて反省しようとしてつとめるのであつたが、また同じ幻が目に見えた。過去にも未来にもないような美貌の方である、あれほどの夫人のおられる中へ東の夫人が混じつておられるなどということは想像もできないことである。東の夫人がかわいそうであるとも中将は

思った。父の大臣のりっぱな性格がそれによって証明された気もされる。まじめな中將は紫の女王を恋の対象として考えるようなことはしないのであるが、自分もああした妻がほしい、短い人生もああした人といっしょにいれば長生きができるであろうなどと思いつけていた。

明け方に風が少し湿気を帯びた重い音になって村雨風な雨になった。

「六条院では離れた建築物が皆倒れそうでございます」

などと侍が報じた。風が揉み抜いている間、広い六条院は大臣の住居辺はおおぜいの人が詰めているであろうが、東の町などは人少なで花散里夫人は心細く思ったことであろうと中將は驚いて、まだほのぼの白むころに三条の宮から訪ねに出かけた。横雨が冷ややかに車へ吹き込んで来て、空の色もすごい道を行きながらも中將は、魂が何となく身に添わぬ気がした。これはどうしたこと、また自分には物思いが一つふえることになったのかと慄然とした。これほどあるまじいことはない、自分は狂気したのかともいろいろに苦しんで六条院へ着いた中將は、すぐに東の夫人を見舞いに行った。非常におびえていた花散里をいろいろと慰めてから、家司を呼んで損ねた所々の修繕を命じて、それから南の町へ行つた。まだ格子は上げられずに人も起きていなかったので、中將は源氏の寢室の前にあたる高欄によりかかって庭をながめていた。風のあとの築山の木が被害を受けて枝などもたくさん折れていた。草むらの乱れたことはむろんで、檜皮とか瓦とかが飛び散り、立部とか透垣とかが無数に倒れていた。わずかだけさした日光に恨み顔な草の露がきらきらと光っていた。空はすごく曇って、霧におおわれているのである。こん

な景色けしきに対していて中将は何ということなしに涙のこぼれるのを押し込むように拭ふいて咳せき払いを試してみた。

「中将が来ているらしい。まだ早いだろうに」

と言って源氏は起き出すのであった。何か夫人が言っているらしいが、その声は聞こえないで源氏の笑うのが聞こえた。

「昔もあなたに経験させたことのない夜明けの別れを、今はじめて知って寂しいでしょう」

と言っているのが感じよく聞こえた。女王の言葉は聞こえないのであるが、一方の言葉から推して、こうした戯れを言い合う今も緊張した間柄であることが中将にわかった。格子を源氏が手ずからあけるのを見て、あまり近くいることを遠慮して、中将は少し後へ退のいた。

「どうだったか、昨晚伺ったことで宮様はお喜びになったかね」

「そうでした。何でもないことにもお泣きになりますからお気の毒で」

と中将が言うと源氏は笑って、

「もう長くはいらっしやらないだろう。誠意をこめてお仕えしておくがいい。内大臣はそんなふうでないと私へおこぼしになったことがある。華美なきららしいことが好きで、親への孝行も人目を驚かすようにしたい人なのだね。情味を持ってどうしておあげしようというようなことのできない人なのだよ。複雑な性格で、非常な聡そう明めいさで末世の大臣に過ぎた力量のある人だがね。まあそう言えばだれにだって欠点はあるからね」

などと源氏は言うのであった。

「あの大風たいふうに中宮ちゆうぐう付きの役人は皆出て来ていたか、昨夜ゆうけのことが不

安だ」

と言つて、源氏は中将を見舞いに出すのであつた。

「#ここから1字下げ」

昨晚の風のきついころはどうしておいでになりましたか。私は少しそのころから身体からだの調子がよろしゅうございませぬのでただ今はまだ伺われません。

「#ここで字下げ終わり」

という挨拶あいさつを持たせてやったのである。そこを立ち廊の戸を通つて中宮の町へ出て行く若い中将の朝の姿が美しかった。東の対の南側の縁に立つて、中央の寝殿を見ると、格子が二間ほどだけ上げられて、まだほのかな朝ぼらけに御簾みすを巻き上げて女房たちが出ていた。高欄によりかかつて庭を見ているのは若い女房ばかりであつた。打ち解けた姿でこうしたふうに出ていたりすることはよろしくなくとも、これは皆きれいにいろいろな上着もに裳もまでつけて、重なるようにしてすわりながらおおぜいで出ているので感じのよいことであつた。中宮は童女を庭へおろして虫籠むしかごに露を入れさせておいでになるのである。紫「#「くさかんむり／宛」、第③水準→第③水準色、撫子色なでしこなどの濃い色、淡い色の袖あこめに、女郎花色おみなえしの薄物の上着などの時節に合った物を着て、四、五人くらいずつ一かたまりになつてあなたこなたの草むらへいろいろな籠かごを持って行き歩いていて、折れた撫子の哀れな枝なども取つて来る。霧の中にそれらが見えるのである。お座敷の中を通つて吹いて来る風は侍従香にの匂においを含んでいた。貴女きじよの世界の心憎さが豊かに覚えられるお住居すまいである。驚かすような気がして中将は出にくかつたが、静かな音をたてて歩いて行くと、女房たちはきわだつて驚いたふうも見せず皆座敷の中

へはいつてしまった。宮の御入内の時に童形で供奉して以来知り合
いの女房が多くて中将には親しみのある場所でもあった。源氏の挨拶
を申し上げてから、宰相の君、内侍などもいるのを知って中将は
しばらく話していた。ここにはまたすべての所よりも気高い空気が
あった。そうした清い気分の中で女房たちと語りながらも中将は昨
日以来の悩ましさを忘れることができなかつた。

帰つて来ると南御殿は格子が皆上げられてあつて、夫人は昨夜気
にかけながら寝た草花が所在も知れぬように乱れてしまったのをな
がめている時であつた。中将は階段の所へ行つて、中宮のお返辞を
報じた。

「#ここから1字下げ」

荒い風もお防ぎくださいますでしょうと若々しく頼みにさせていた
だいているのでございますから、お見舞いをいただきましてはじめ
て安心いたしました。

「#ここで字下げ終わり」

というのである。

「弱々しい宮様なのだからね、そうだったろうね。女はだれも皆こ
わくてたまるまいという気のした夜だったからね、実際不親切に思
召しただろう」

と言つて、源氏はすぐに御訪問をすることにした。直衣などを着
るために向こうの室の御簾を引き上げて源氏がいる時に、短い几
帳を近くへ寄せて立てた人の袖口の見えたのを、女王であろうと思
つと胸が湧き上がるような音をたてた。困つたことであると思つて
中将はわざと外のほうをながめていた。源氏は鏡に向かいながら小
声で夫人に言う、

「中将の朝の姿はきれいじゃありませんか、まだ小さいのだが洗練されても見えるように思うのは親だからかしら」

鏡にある自分の顔はしかも最高の優越した美を持つものであると源氏は自信していた。身なりを整えるのに苦心をしたあとで、

「中宮にお目にかかる時はいつも晴れがましい気がする。なんらの見識を表へ出しておいでになるのでないが、前へ出る者は気がつかわれる。おおように女らしくて、そして高い批評眼が備わっているというようなかただ」

こう言いながら源氏は御簾から出ようとしたが、中将が一方を見つめて源氏の来ることにも気のつかぬふうであるのを、鋭敏な神経を持つ源氏はそれをどう見たか引き返して来て夫人に、

「昨日風の紛れに中将はあなたを見たのじゃないだろうか。戸が歩いていてでしょう」

と言うと女王は顔を赤くして、

「そんなこと。渡殿のほうには人の足音がしませんでしたもの」と言っていた。

「しかし、疑わしい」

源氏はこう独言を言いながら中宮の御殿のほうへ歩いて行った。

また供をして行った中将は、源氏が御簾の中へはいつている間を、渡殿の戸口の、女房たちの集まっているけはいのうかがわれる所へ行つて、戯れを言ったりしながらも、新しい物思いのできた人は平生よりもめいっただふうをしていた。

そこからすぐに北へ通つて明石の君の町へ源氏は出たが、ここでははかばかしい家司風の者は来ていないで、下仕えの女中などが乱れた草の庭へ出て花の始末などをしていた。童女が感じのいい姿を

して夫人の愛している竜胆りんとうや朝顔がほかの葉の中に混じってしまったのを選び出していたわっていた。物哀れな気持ちになって明石は十三一絃げんの琴を弾ひきながら縁に近い所へ出ていたが、人払いの声こゑがしたので、平常着ふだんぎの上へ棹さおからおろした小袿こすゐを掛けて出迎えた。こんな急な場合にも敬意を表することを忘れない所にこの人の性格が見えるのである。座敷の端にしばらくすわって、風の見舞いだけを言いつて、そのまま冷淡に帰かへって行く源氏の態度を女は恨めしく思おもった。

「#ここから2字下げ」

おほかたの荻あしの葉過をぎぐる風の音もうき身一つに沁しむこちして

「#ここで字下げ終わり」

こんなことを口ずさんでいた。

源氏が東の町の西の対へ行った時は、夜の風が恐ろしくて明け方まで眠れなくて、やっと睡眠したあとの寝過たごしをした玉鬘たまかすらが鏡を見ている時であつた。たいそうに先払いの声を出さないようにと源氏は注意ちゆういして、そつと座敷へはいつた。屏風びんぶうなども皆畳みんであつて混雑した室内へはなやかな秋の日ざしがはいつた所に、あざやかな美貌びぼうの玉鬘たまかすらがすわっていた。源氏は近い所へ席を定めた。荒い野分の風もここでは恋を告げる方便に使われるのであつた。

「そんなふうなことを言いつて、私をお困こらせになりますから、私はあの風に吹かれて行いつてしまいたく思おもいました」

と機嫌きげんをそこねて玉鬘たまかすらが言いつと源氏はおもしろそうに笑わらつた。

「風に吹かれてどこへでも行いつてしまおうというのは少し軽々しい

ことですね。しかしどこか吹かれて行きたい目的の所があるでしょう。あなたも自我を現わすようになって、私を愛しないことも明らかにするようになりましたね。もつともですよ」

と源氏が言うと、玉鬘は思ったままを誤解されやすい言葉で言ったものであると自身ながらおかしくなって笑っている顔の色がはなやかに見えた。海酸漿つみほおすぎのようにふつくらとしていて、髪の間から見える膚の色がきれいである。目があまりに大きいことだけはそれほど品のよいものでなかった。そのほかには少しの欠点もない。中將は父の源氏がゆつくりと話している間に、この異腹の姉の顔を一度のぞいて知りたいとは平生から願っていることであつたから、隅すみの部屋へやの御簾みすが几帳きちょうも添えられてあるが、乱れたままになっている、その端をそつと上げて見ると、中央の部屋との間に障害になるような物は皆片づけられてあつたからよく見えた。戯れていることは見えていてわかることであつたから、不思議な行為である。親子であつても懐ふとこに抱きかかえる幼年者でもない、あんなにしてよいわけのものでないのにと目がとまつた。源氏に見つけられないかと恐ろしいのであつたが、好奇心がつのつてなおのぞいていると、柱のほうへ身体からだを少し隠すように姫君がしているのを、源氏は自身のほうへ引き寄せていた。髪かみの波が寄つて、はらはらとこぼれかかっていた。女も困つたようなふうはしながらも、さすがに柔らかに寄りかかっているのを見ると、始終このなれなれしい場面の演ぜられていることも中將なかつらに合点がてんされた。悪感おかんの覚えられることである、どういふわけであろう、好色なお心であるから、小さい時から手もとで育たなかつた娘にはああした心も起こるのであるう、道理でもあるがあさましいと真相を知らない中將にこう思われている源氏は氣の毒であ

る。玉鬘は兄弟であつても同腹でない、母が違ふと思えば心の動くこともあろうと思われる美貌であることを中将は知つた。昨日見た女王よりは劣つて見えるが、見ている者が微笑まれるようなはなやかさは同じほどに思われた。八重の山吹やまぶきの咲き乱れた盛りに露を帯びて夕映ゆうばえのもとにあつたことを、その人を見ていて中将は思ひ出した。このごろの季節のものではないが、やはりその花に最もよく似た人であると思われた。花は美しくても花であつて、またよく乱れた蕊しべなども盛りの花といつしよにあつたりなどするものであるが、人の美貌はそんなものではないのである。だれも女房がそばへ出て来ない間、親しいふうふうに二人の男女は語っていたが、どうしたのかまじめな顔をして源氏が立ち上がった。玉鬘が、

「#ここから2字下げ」

吹き乱る風のけしきに女郎花をみなへししを萎れしぬべきここちこそすれ

「#ここで字下げ終わり」

と言つた。これはその人の言うのが中将に聞こえたのではなくて、源氏が口にした時に知つたのである。不快なことがまた好奇心を引きもして、もう少し見きわめたいと中将は思ったが、近くにいたことを見られまいとしてそこから退のいていた。源氏が、

「#ここから1字下げ」

「しら露なびに靡かましかば女郎花荒き風にはしをれざらまし

「#ここで字下げ終わり」

弱竹をお手本になさい」

と言ったと思つたのは、中将の僻耳ひがみみであつたかもしれぬが、それも気持ちの悪い会話だとその人は聞いたのであつた。

花散里はなぢりの所へそこからすぐに源氏は行つた。今朝けさの肌寒はださに促されたように、年を取つた女房たちが裁ち物などを夫人の座敷でしていた。細櫃ほそびつの上で真綿をひろげている若い女房もあつた。きれいに染め上がった朽ち葉色の薄物、淡紫たんしのでき上がりのよい打ち絹などが散らかつている。

「なんですこれは、中将の下襲したかさねなんですか。御所の壺前裁つぼせんざいの秋草の宴なども今年はだめになるでしょうね。こんなに風が吹き出してしまつてはね、見ることも何もできるものでないから。ひどい秋ですね」

などと言いながら、何になるのかさまざまの染め物織り物の美しい色が集まつているのを見て、こうした見立ての巧みなことは南の女王にも劣つていない人であると源氏は花散里を思つた。源氏の直衣しなの材料の支那しなの紋綾もんあやを初秋の草花から摘んで作つた染料で手染めに染め上げたのが非常によい色であつた。

「これは中将に着せたらいい色ですね。若い人には似合うでしょう」
こんなことも言つて源氏は歸つて行つた。

面倒めんどろな夫人たちの訪問の供を皆してまわつて、時のたったことで中将は気が気でなく思いながら妹の姫君の所へ行つた。

「まだ御寢室おんねむむらにいらつしやるのでございますよ。風をおこわがりになつて、今朝けさはもうお起きになることもおできにならないのでございます」

と、乳母が話した。

「悪い天気でしたからね。こちらで宿直をしてあげたかったのだが、宮様が心細がつていらつしやつたものですからあちらへ行つてしまつたのです。お雛様の御殿はほんとうにたいへんだつたでしょう」

女房たちは笑つて言う、

「扇の風でもたいへんなのでございますからね。それにあの風でございましょう。私どもはどんなに困つたことでしょう」

「何でもない紙がありませんか。それからあなたがたがお使いになる硯を拝借しましょう」

と中将が言つたので女房は柵の上から出して紙を一巻き蓋に入れ、硯といつしよに出してくれた。

「これはあまりよすぎて私の役にはたちにくい」

と言いながらも、中将は姫君の生母が明石夫人であることを思つて、遠慮をしすぎる自分を苦笑しながら書いた。それは淡紫の薄様であつた。丁寧に墨をすつて、筆の先をながめながら考えて書いている中将の様子は艶であつた。しかしその手紙は若い女房を羨望させる一女性にあてて書かれるものであつた。

「#ここから2字下げ」

風騒ぎむら雲迷ふ夕べにも忘るるまなく忘れぬ君

「#ここで字下げ終わり」

という歌の書かれた手紙を、穂の乱れた刈萱に中将はつけていた。

女房が、

「交野の少将は紙の色と同じ色の花を使ったそうでございますよ」

と言った。

「そんな風流が私にはできないのですからね。送ってやる人だってまたそんなものなのですからね」

中將はこうした女房にもあまりなれなれしくさせない溝みぞを作つて話していた。品のよい貴公子らしい行為である。中將はもう一通書つまのすけいてから右馬助うまのすけを呼んで渡すと、美しい童侍わらわむすめや、ものなれた隨身みせの男へさらに右馬助は渡して使いは出て行つた。若い女房たちは使いの行く先と手紙の内容とを知りたがつていた。姫君がこちらへ来ると言つて、女房たちがにわか立ち騒いで、几帳きちょうの切れを引き直したりなどしていた。昨日から今朝にかけて見た麗人たちと比べて見ようとする気になつて、平生はあまり興味を持たないことであつたが、妻戸みすの御簾みすへ身体からだを半分入れて几帳ほこひの綻ほびからのぞいた時に、姫君がこの座敷へはいつて来るのを見た。女房が前を往ゆき来するので正確には見えない。淡紫の着物を着て、髪はまだ着物の裾すそには達せずに末のほうがわざとひろげたようになっている細い小さい姿が可憐かれんに思われた。一昨年ごろまでは稀まれに顔も見たのであるが、そのころよりはまたずっと美しくなつたようであると中將は思つた。まして妙齡になつたならどれほどの美人になるであらうと思われた。さきに中將の見た麗人の二人を桜と山吹にたとえるなら、これは藤の花といつてよいようである。高い木にかかつて咲いた藤が風になびく美しさはこんなものであると思われた。こうした人たちを見ただけ見て暮らしたい、継母であり、異母姉妹であれば、それのできないのがかえつて不自然なわけであるが、事實はそうした恨めしいものになつていると思つと、まじめなこの人も魂がどこかへあこがれて行つてしまう気がした。

三条の宮へ行くと宮は静かに仏勤めをしておいでになった。若い美しい女房はここにもいるが、身なりも取りなしも盛りの家の夫人たちに使われている人たちに比べると見劣りがされた。顔だちのよい尼女房の墨染めを着たなどはかえってこうした場所にふさわしい気がして感じよく思われた。内大臣も宮を御訪問に来て、灯などをともしてゆつくりと宮は話しておいでになった。

「姫君に長く逢^あいませぬね。ほんとうにどうしたことだろう」とお言い出しになって、宮はお泣きになった。

「近いうちにお伺わせいたします。自身から物思いをする人になって、衰れに衰えております。女の子というものは実際持たなくていいものですね。何につけかにつけ親の苦勞の絶えないものです」

内大臣はまだあの古い過失について許し切っていないように言うのを、宮は悲しくお思いになって、望んでおいでになることは口へお出しになれなかった。話の続きに大臣は、

「ものにならない娘が一人出て来まして困っております」と母宮に訴えた。

「どうしてでしょう。娘という名がある以上おとなしくないわけはないものですが」

「それがそういかないのです。醜態でございます。お笑いぐさにお目にかきたいほどです」

と大臣は言っていた。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：伊藤時也

2003年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

行幸

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈〉：ルビ

（例）おん輿こし

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）馬一鞍くら

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数）

（例）胡 「#「竹かんむりノ祿」、第3水準1-89-76」

「#地から3字上げ」雪ちるや日よりかしこくめでたさも上

「#地から3字上げ」なき君の玉のおん輿こし （晶子）

源氏は玉鬘たまかすらに対してあらゆる好意を尽くしているのであるが、人知れぬ恋を持つ点で、南の女王にょおうの想像したとおりの不幸な結末を生

むのでないかと見えた。すべてのことに形式を重んじる癖があつて、少しでもその点の不足したことは我慢のならぬように思う内大臣の性格であるから、思いやりもなしに婿として麗々しく扱われるようなことになつては今さら醜態で、気恥ずかしいことであると、その懸念がいささか源氏を躊躇させていた。

この十二月に洛西の大原野の行幸があつて、だれも皆お行列の見物に出た。六条院からも夫人がたが車で拝見に行つた。帝は午前六時に御出門になつて、朱雀大路から五条通りを西へ折れてお進みになつた。道路は見物車でうずまるほどである。行幸と申しても必ずしもこうではないのであるが、今日は親王がた、高官たちも皆特別に馬一鞍を整えて、隨身、馬副男の背丈までもよりそろえ、装束に風流を尽くさせてあつた。左右の大臣、内大臣、納言以下はことごとく供奉したのである。浅葱の色の袍に紅紫の下襲を殿上役人以下五位六位までも着ていた。時々少しずつの雪が空から散つて艶な趣を添えた。親王がた、高官たちも鷹使いのたしなみのある人は、野に出てからの用にきれいな狩衣を用意していた。左右の近衛、左右の衛門、左右の兵衛に属した鷹匠たちは大柄な、目だつ摺衣を着ていた。女の目には平生見馴れない見物事であつたから、だれかれとなしに競つて拝観をしようとしたが、貧弱にできた車などは群衆に輪をこわされて哀れな姿で立っていた。桂川の船橋のほとりが最もよい拝観場所で、よい車がここには多かつた。六条院の玉鬘の姫君も見物に出ていた。きれいな身なりをして化粧をした朝臣たちをたくさん見たが、緋のお上着を召した端麗な鳳釵の中の御姿になぞらえることのできるような人はだれもない。玉鬘は人知れず父の大臣に注意を払つたが、噂どおりにはなやかな貫禄のある盛りの男と

は見えたが、それも絶対なりっぱさとはいえるものでなくて、だれよりも優秀な人臣と見えるだけである。きれいであるとか、美男だとかいって、若い女房たちが蔭で大騒ぎをしている中将や少将、殿上役人のだれかれなどはまして目にもたたず無視せざるをえないのである。帝は源氏の大臣にそっくりなお顔であるが、思いなしか一段崇高な御一美貌と拝されるのであった。でこれを人間世界の最もすぐれた美と申さねばならないのである。貴族の男は皆きれいなものであるように玉鬘は源氏や中将を始終見て考えていたのであるが、こんな正装の姿は平生よりも悪く見えるのか、多数の朝臣たちは同じ目鼻を持つ顔とも玉鬘には見えなかった。兵部卿の宮もおいでになつた。右大将は羽振りのよい重臣ではあるが今日の武官姿の纏を巻いて胡「#」竹かんむり/祿」、第3水準「∞」第3水を負つた形などはきわめて優美に見えた。色が黒く、髭の多い顔に玉鬘は好感を持ってなかつた。男は化粧した女のような白い顔をしているものでないのに、若い玉鬘の心はそれを軽蔑した。源氏はこのごろ玉鬘に宮仕えを勧めているのであつた。今までは自発的に勤めを始めるのでもなしにやむをえずに御所の人々の中に混じつて新しい苦労を買うようなことはと躊躇する玉鬘であつたが、後宮の一人でなく公式の高等女官になつて陛下へお仕えするのはよいことであるかもしれないと思うようになった。大原野で鳳輦が停められ、高官たちは天幕の中で食事をしたり、正装を直衣や狩衣に改めたりしているころに、六条院の大臣から酒や菓子献上品が届いた。源氏にも供奉することを前に仰せられたのであるが、謹慎日であることによつて御辞退をしたのである。蔵人の左衛門尉を御使いにし、木の枝に付けた雉子を一羽源氏へ下された。この仰せのお言葉は女である

筆者が採録申し上げて誤りでもあつてはならないから省く。

「#ここから2字下げ」

雪深きをしほの山に立つ雉子の古き跡をも今日けふはたづねよ

「#ここで字下げ終わり」

御製はこうであつた。これは太政大臣が野の行幸にお供申し上げた先例におよりになつたことであるかもしれない。

源氏の大臣は御使いをかしこんで扱つた。お返事は、

「#ここから2字下げ」

小塩山をしほみゆき積もれる松原に今日ばかりなる跡やなからん

「#ここで字下げ終わり」

という歌であつたようである。筆者は覚え違いをしているかもしれない。

その翌日、源氏は西の対へ手紙を書いた。

「#ここから1字下げ」

昨日陛下きのうをお拝みになりましたか。お話ししていたことはどう決めますか。

「#ここで字下げ終わり」

白い紙へ、簡単に気どつた跡もなく書かれているのであるが、美しいのをながめて、

「ひどいことを」

と玉鬘たまかすらは笑っていたが、よくも心が見透かされたものであるとい

う気がした。

「#ここから1字下げ」

昨日は、

「#ここから2字下げ」

うちきらし朝曇りせしみゆきにはさやかに空の光やは見し

「#ここから1字下げ」

何が何でございますやら私などには。

「#ここで字下げ終わり」

と書いて来た返事を紫の女王にょおうもいっしょに見た。源氏は宮仕えを玉鬘たまむすめに勧めた話をした。

「中宮ちゅうぐうが私の子になつておいでになるのだから、同じ家からそれ以上のことがなくて出て行くのをあの人は躊躇することだろうと思うし、大臣の子として出て行くのも女御にょみがいられるのだから不都合だしと煩悶はんもんしているそのことも言っているのですよ。若い女で宮中へ出る資格のある者が陛下を拝見しては御所の勤仕を断念できるものでないはずだ」

と源氏が言うと、

「いやなああなた。お美しいと拝見しても恋愛的に御奉公を考えるのは失礼すぎたことじゃありませんか」

と女王は笑った。

「そうでもない。あなただつて拝見すれば陛下のおそばへ上がりたくなりますよ」

などと言いながら源氏はまた西の対へ書いた。

「#ここから2字下げ」

あかねさす光は空に曇らぬをなどてみゆきに目をきらしけん

「#ここから1字下げ」

ぜひ決心をなさるるように。

「#ここで字下げ終わり」

こんなふうに言つて源氏は絶えず勧めていた。ともかくも装束もぎの式を行なおうと思つて、その儀式の日の用意を始めさせた。自身ではたいしたことにはしようとしなくても、源氏の家で行なわれることは自然にたいそうなものになってしまうのであるが、今度のことはこれを機会に内大臣へほんとうのことを知らせようと期している式であつたから、きわめて華美な支度したくになつていった。来春の二月にしようと源氏は思つていたのであつた。女は世間から有名な人にされていても、まだ姫君である間は必ずしも親の姓氏を明らかに掲げている必要もないから、今までは藤原ふじわらの内大臣の娘とも、源氏の娘とも明確にしないで済んだが、源氏の望むように宮仕えに出すことにすれば春日かすがの神の氏の子を奪うことになるし、ついに知れるはずのものをしいて当座だけ感情の上からごまかしをするのも自身の不名誉であると源氏は考えた。平凡な階級の人は安易に姓氏を変えたりもするが、内に流れた親子の血が人為的のことで絶えるものでないから、自然のままに自分の寛大さを大臣に知らしめようと源氏は決めて、裳もの紐ひもを結ぶ役を大臣へ依頼することにしたが、大臣は、去年の冬ごろから御病氣をしておいでになる大宮が、いつどうおなりになるかもしれぬ場合であるから、祝儀のことに出るのは遠

慮をすると辞退してきた。中將も夜昼三条の宮へ行つて付ききりのようにして御一介抱かいほうをしていて、何の余裕も心にないふうな時であるから、装着は延ばしたものであるうかとも源氏は考えたが、宮がもしお薨かくれになれば玉鬘たまかすひは孫としての服喪の義務があるのを、知らぬ顔で置かせては罪の深いことにもなるうから、宮の御病気を別問題として装着を行ない、大臣へ真相を知らせることも宮の生きておいでになる間にしようと思つた源氏は決心して、三条の宮をお見舞いしがてらにお訪たずねした。微行しのびとして来たのであるが行幸みゆきにひとしい威儀が知らず知らず添そっていた。美しさはいよいよ光が添そったようなこのごろの源氏を御覧ごらんになったことで宮は御病苦が取り去られた気持ちにおなりになつて、脇息きょうそくへおよりかかりになりながら、弱々しい調子ながらもよくお話しになつた。

「そうお悪くはなかつたのでございますね。中將がひどく御心配申し上げてお話をいたすものですから、どんなふうでいらつしやるのかとお案じいたしておりました。御所などへも特別なことのない限りは出ませんで、朝廷の人のようでもなく引きこもつておりました、自然思ひましてもすぐに物事を実行する力もなくなりまして失礼をいたしました。年齢などは私よりもずっと上の方がひどく腰をかがめながらもお役を勤めているのが、昔も今もあるでしょうが、私は生理的にも精神的にも弱者ですから、怠なまけることよりできないのでございましょう」

などと源氏は言っていた。

「年のせいだと思ひましてね。幾月かの間は身体からだの調子の悪いのも打ちやつてあつたのですが、今年になつてからはどうやらこの病気は重いという気がしてきましたね、もう一度こうしてあなたにお目

にかかるともできないままになってしまふのかと心細かつたのですが、お見舞いくださいましたこの感激でまた少し命も延びる気がします。もう私は惜しい命では少しもありません。皆に先だたれましたあとで、一人長く生き残っていることは他人のことで見てもおもしろくないことに思われたことなのですから、早くと先を急ぐ気にもなるのですが、中將がね、親切にね、想像もできないほどよくしてくれましてね、心配もしてくれまますとまた引き止められる形にもなっております」

初めから終わりまで泣いてお言いになるそのお慄え声もこの場合に身に沁しんで聞かれた。昔の話も出、現在のことも語っていたついでに源氏は言った。

「内大臣は毎日おいでになるでしょうが、私の伺っておりますうちにもしおいでになることがあればお目にかかれて結構だと思います。ぜひお話ししておきたいこともあるのですが、何かの機会がなくてはそれもできませんで、まだそのままになっております」

「お上かみの御用が多いのか、自身の愛が淡うすいのか、そうそう見舞ってくれません。お話しになりたいとおっしゃるのはどんなことでしょうか。中將が恨めしがっていることもあるのですが、私は何も初めのことは知りませんが、冷淡な態度をあの子にとるのを見ていますね、一度立った噂うわさはそんなことで取り返されるものではなし、かえって二重に人から譏そしらせるようなものだとは私は忠告もしましたが、昔からこうと思つたことは曲げられない性質でね、私は不本意に傍観しています」

大宮が中將のことであろうとお解しになって、こうお言いになるのを聞いて、源氏は笑いながら、

「今さらしかたのないこととして許しておやりになるかと思ひまして、私からもそれとなく希望を述べたこともあるのですが、断然お引き分けになろうとするお考えらしいのを見まして、なぜ口出しをしたかときまり悪く後悔をしております。まあ何事にも清めということがございますから、噂などは大臣の意志で消滅させようと思ひればできるかもしれぬとは見ていますが事実であつたことをきれいに忘れさせることはむずかしいでしょうね。すべて親から子と次第に人間の価値は落ちていきまして、子は親ほどだれからも尊敬されず、愛されもしないのであると中将を哀れに思っております」

などと言つたあとで源氏は本問題の説明をするのであつた。

「大臣にお話ししたいと思ひますことは、大臣の肉身の人を、少し臆臆おそおそとしました初めの関係から私の娘かと思ひまして手もとへ引き取つたのですが、その時には間違ひであることも私に聞かせなかつたものですから、したがつてくわしく調べもしませんで子供の少ない私ですから、縁があればこそと思ひまして世話をいたしかけましたものの、そう近づいて見ることもしませんで月日がたつたのですが、どうしてお耳にはいつたのですか、宮中から御沙汰ごさたがありましてね、こう仰せられるのです。尚侍ないしのかみの職が欠員であることは、そのほうの女官が御用をするのにたよる所がなくて、自然仕事が投げやりになりやすい、それで今お勤めしている故参ないしのすけの典侍二人、そのほかにも尚侍になろうとする人たちの多い中にも資格の十分な人を選び出すのが困難で、たいてい貴族の娘の声望のある者で、家庭のことに携わらないでいい人というのが昔から標準になつていゝのですから、欠点のない完全な資格はなくても、下の役から勤め上げた年功者の登用される場合はあつても、ただ今の典侍にまだそれだけ力

がないとすれば、家柄その他の点で他から選ばなければならぬこととなるから出仕をさせるようにというお言葉だったので。私の家の子が相応しないことも思うわけのものでございせんから、私も宮中の仰せをお受けしようという気になったのでございます。宮仕えというものは適任者であると認められれば役の不足などは考へるべきことではありません。後宮ではなしに宮中の一課をお預かりしているいろいろな事務も見なければならぬことは女の最高の理想でないように思う人はあつても、私はそうとも思つておりません。仕事は何であつてもその人格によつてその職がよくも見え、悪くも見えるのであると、私がそんな気になりました時に、娘の年齢のことを聞きましたことから、これは私の子でなくてあの方のだということがわかつたのです。なおお目にかかりましてその点なども明瞭めいりょうにいたしたいと思ひます。機会がなくてはお目にかかれせんから、おいでを願つてこの話を申し上げようといはしましたところ、あなた様の御病氣のことをお言い出しになりましたしてお断わりのお返事をいただいたのですが、それは實際御遠慮申すべきだと思ひますもの、こんなふうにおよろしいところを拝見できたのですから、やはり計画どおりに祝いの式をさせたいと思つたのです。内大臣にもやはりその節御足労を願ひたいと思つたのですが、あなた様からいくぶんそのこともおにおわしになつたお手紙をお出しくださいませんか」と源氏は言うのであつた。

「まあそれは思ひがけないことでございますね。内大臣の所ではそのした名のりをして来る者は片端から拾うようにしてよく世話をしているようですがね、どうしてあなたの所へ引き取られようとしたのでしよう。前から何かのお話を聞いて出て来た人なのですか」

「そうになっていく訳がある人なのです。くわしいことは内大臣のほうがよくわかりになるくらいでしょう。凡俗の中の出来事のように、明らかにすればますます人が噂うわさに上せたがりそうなことと思われまますから、中将にもまだくわしく話してごさいませぬ。あなた様も秘密にあそばしてください」

と源氏は注意した。

内大臣のほうでも源氏が三条の宮へ御訪問したことを聞いて、

「簡単な生活をしていらつしやる所では太政大臣の御待遇にお困りになるだろう。前駆の人たちを饗きやう応おうしたり、座敷のお取りもちをする者もはかばかしい者がいないであろう、中将は今日はお客側のお供で来ていられるだろうから」

すぐに子息たちそのほかの殿上役人たちをやるのであった。

「お菓子とか、酒とか、よいようにして差し上げるがいい。私も行くべきだがかえってたいそうになるだろうから」

などと言っている時に大宮のお手紙が届いたのである。

「#ここから1字下げ」

六条の大臣が見舞いに来てくださったのですが、こちらは人が少なくてお恥ずかしくもあり、失礼でもありますから、私がわざとお知らせしたというふうでなしに来てくださいますか。あなたとお逢あいになってお話しなさいたいこともあるようです。

「#ここで字下げ終わり」

と書かれてあった。何であろう、雲井くもいの雁かりと中将の結婚を許せということなのであるうか、もう長くおいでになれない御病体の宮がぜひにとそのことをお言いになり、源氏の大臣が謙遜けんそんな言葉で一言

その問題に触れたことをお訴えになれば自分は拒否のしようがない。中將が冷静で、あせって結婚をしようとしないうちを見ていることは自分の苦痛なのであるから、いい機会があれば先方に一步譲った形式で許すことにしようと思つた。大臣は思った。そしてそれは大宮と源氏が合議されてのことであるに違いないと氣のついた大臣は、それであればいっそう否みよふのないことであると思われぬが、必ずしもそうでないと思つた。こうした時にちよつと反抗的な氣持の起こるのが内大臣の性格であつた。しかし宮もお手紙をおつかわしになり、源氏の大臣も待つておいでになるらしいから伺わぬでは双方へ失礼である。ともかくもその場になつて判断をすることにしようと思つて、内大臣は身なりを特に整えて前驅などはわざと簡單にして三条の宮へはいつた。子息たちをおおぜい引きつれてゐる大臣は、重々しくも頼もしい人に見えた。背の高さに相應して肥つた貫祿のある姿で歩いて来る様子は大臣らしい大臣であつた。紅紫の指貫に桜色の下襲の裾を長く引いて、ゆるゆるとした身のとりなしを見せていた。なんとというりつぱな姿であろうと見えたが、六条の大臣は桜色の支那錦の直衣の下に淡色の小袖を幾つも重ねたくつろいだ姿でいて、これはこの上の端麗なものはないと思われぬのであつた。自然に美しい光というやうなものが添つていて、内大臣の引き纏つた姿などとは比べる性質の美ではなかつた。おおぜいの子息たちがそれぞれりつぱになつてゐた。藤大納言、東宮一大夫などという大臣の兄弟たちもいたし、蔵人頭、五位の蔵人、近衛の中少將、弁官などは皆一族で、はなやかな十幾人が内大臣を取り巻いてゐた。その他の役人もついて来ていて、たびたび杯がまわるうちに皆酔いが出て、内大臣の豊かな幸福をだれもだれも話題にした。源氏と内大臣

は珍しい会合に昔のことが思い出されて古いころからの話がかわされた。世間で別々に立っている時には競争心というようなものも双方の心に芽ぐむのであるが、一堂に集まってみれば友情のよみがえるのを覚えるばかりであった。隔てのない会話の進んでいく間に日が暮れていった。杯がなお人々の間に勧められた。

「伺わないでは済まないのですが、今日来いというようなお召しがないものですから、失礼しております、お叱りを受けそ^ううでなりません」

と内大臣は言った。

「お叱りは私が受けなければならぬと思つてゐることがたくさんあります」

と意味ありげに源氏の言うのを、先刻から考えていた問題であるうと大臣はとつて、ただかしこまっていた。

「昔から公人としても私人としてもあなたとほど親しくした人は私にありません。翅^{はね}を並べるといふようにして将来は国事に携わろうなどと当時は思つたものですがね、のちになるとお互いに昔の友情としては考えられないようなこととしますからね。しかしそれは区々たることですよ。だいたいの精神は少しも昔と変わつていないのですよ。いつの間にかとつた年齢^{とし}を思いましても昔のことが恋しくなりません、お逢^あいのできることもまれにしかありませんから、勝手な考えですが、私のように親しい者の所へは微行^{ひさし}でもお訪^{たず}ねくださればいいと恨めしい気になつてゐる時もあります」

と源氏が言った。

「青年時代を考えてみますと、よくそうした無礼ができたものだと思いますほど親しくさせていただきまして、なんらの隔てもあなた

様に持つことがありませんでした。公人といたしましては翹はねを並べるとお言いになりますような価値もない私を、ここまでお引き立てくださいました御好意を忘れるものでございせんが、多い年月の間には我知らずよろしくないことも多くいたしております」

などと大臣は敬意を表しながら言っていた。この話の続きに源氏は玉鬘たまかすらのことを内大臣に告げたのであった。

「何たることでしょう。あまりにうれしい、不思議なお話を承ります」

と大臣はひとしきり泣いた。

「ずっと昔ですが、その子の居所が知れなくなりましたことで、何のお話の時でしたか、あまりに悲しくてあなたにお話ししたこともある気がいたします。今日私もやっと人数ひとかずになってみますと、散らかつております子供が気になりました、正直に拾い集めてみますと、またそれぞれ愛情が起こりまして、皆かわいく思われるのですが、私はいつもそうしていながら、あの子供を最も恋しく思い出されるのでした」

この話から、昔の雨夜の話に、いろいろと抽象的に女の品定めしなさだをしたことも二人の間に思い出されて、泣きも笑いもされるのであった。深更になってからいよいよ二人の大臣は別れて帰ることになった。

「こうしてごいっしょになることがありますと、当然なことですが昔が思い出されて、恋しいことが胸をいっぱいにして、帰って行く気になれないですよ」

と言って、あまり泣かない人である源氏も、酔い泣きまじりにしめっぱいふうを見せた。大宮は葵夫人あおいのことをまた思い出しておい

でになった。昔のはなやかさを幾倍したものかもしれぬ源氏の勢いを御覧になって、故人が惜しまれてならないのでおありになった。しおしおとお泣きになった、尼様らしく。

源氏はこうした会見にも中将のことは言い出さなかった。好意の欠けた処置であると感じた事柄であったから、自身が口を出すことは見苦しいと思ったのであった。大臣のほうでは源氏から何とも言わぬ問題について進んで口を切ることもできなかったのである。その問題が未解決で終わったことは愉快でもなかった。

「今晚お邸やしきまでお送りに参るはずですが、にわかになんかことをいたしますのも人騒がせに存ぜられますから、今日のお礼はまた別の日に参上して申し上げます」

と大臣が言うのを聞いて、それでは宮の御病気もおよしいように拝見するから、きつと申し上げた祝いの日に御足労を煩わしたいということ源氏は頼んで約束ができた。非常に機嫌きげんよく大臣たちは会見を終えて宮邸を出るのであったが、その場にもまたいかめしい光景が現出した。内大臣の供をして来た公達きんたちなどはたまさかの会合が朗らかに終わったのは何の相談があったのであろう、太政大臣は今日もまた以前のようにならぬことに何かあったのではなかなどという臆測おくそくをした。玉鬘たまむすのことであるなどとはだれも考えられなかったのである。

内大臣は源氏の話聞いた瞬間から娘が見たくてならなかった。逢あわないでいることは堪えられないようにも思うのであるが、今すぐに親らしくふるまうのはいかなものである、自家へ引き取るほどの熱情を最初に持った源氏の心理を想像すれば、自分へ渡し放しにはしないであろう、りっぱな夫人たちへの遠慮で、新しく夫人に

加えることはしないが、さすがにそのままで情人としておくことは、実子として家に入れた最初の態度を裏切ることになる世間体をはばかつて、自分へ親の権利を譲ったのであろうと思うと、少し遺憾な気も内大臣はするのであったが、自分の娘を源氏の妻に進めることは不名誉なことであるはずもない、宮仕えをさせると源氏が言い出すことになれば女御にょごとその母などは不快に思うであろうが、ともかくも源氏の定めることに随したがうよりほかはないと、こんなことをいろいろと大臣は思った。これは二月の初めのことである。十六日から彼岸になって、その日は吉日でもあったから、この近くにこれ以上の日がないとも暦こよみの博士はかせからの報告もあって、玉鬘たまかすらの装せむぎ着の日を源氏はそれに決めて、玉鬘へは大臣に知らせた話もして、その式についての心得も教えた。源氏のあたたかい親切は、親であってもこれほどの愛は持つてくれないであろうと玉鬘にはうれしく思われたが、しかも実父に逢う日の来たことを何物にも代えられないように喜んだ。その後、源氏は中将へもほんとうのことを話して聞かせた。不思議なことであると思ったが、中将にはもつともだと合点されることもあった。失恋した雲井くもいの雁かりよりも美しいように思われた玉鬘の顔を、なお驚きに呆然ぼつぜんとした気持ちの中にも考えて、気がつかなくなったと思わぬ損失を受けたような心持ちにもなった。しかしこれはふまじめな考えである、恋人の姉妹ではないかと反省した中将はまれな正直な人と言うべきである。

十六日の朝に三条の宮からそつと使いが来て、装たまた着の姫君への贈り物の櫛くしの箱などを、にわかなことではあったがきれいにできたのを下された。

「#ここから1字下げ」

手紙を私がおあげするのも不吉にお思いにならぬかと思ひ、遠慮をしたほうがよろしいとは考えるのですが、大人におなりになる初めのお祝いを言わせてもらうことだけは許していただけるかと思つたのです。あなたのお身の上の複雑な事情も私は聞いていますことを言つてよろしいでしょうか、許していただければいいと思ひます。

「#ここから2字下げ」

ふたかたに言ひもてゆけば玉櫛笥わがみはなれぬかけごなりけり

「#ここで字下げ終わり」

と老人の慄えた字でお書きになつたのを、ちよつと源氏も玉鬘のほうにいて、いろいろな式のことの指図をしていた時であつたから拝見した。

「昔風なお手紙だけれど、お気の毒ですよ。このお字ね。昔は上手な方だつただけれど、こんなことまでもおいおい悪くなつてくるものらしい。おかしいほど慄えている」

と言つて、何度も源氏は読み返しながら、

「よくもこんなに玉櫛笥にとらわれた歌が詠めたものだ。三十一文字の中にほかのことは少ししかありませんからね」

そつと源氏は笑つていた。中宮から白い裳、唐衣、小袖、髪上げの具などを美しくそろえて、そのほか、こうした場合の贈り物に必ず添うことになつている香の壺には支那の薫香のすぐれたのを入れてお持たせになつた。六条院の諸夫人も皆それぞれの好みで姫君の衣裳に女房用の櫛や扇までも多く添えて贈つた。劣り勝りもない品々であつた。聡明な人たちが他と競争するつもりで作りととのえた物

であるから、皆目と心を楽しませる物ばかりであった。東の院の人たちも装着もぎの式のあることを聞いていたが、贈り物を差し出ですることを遠慮していた中で、末摘花すえつむはな夫人は、形式的に何でもしないではいられぬ昔風な性質から、これをよそのことにしては置かれなと正式に贈り物をこしらえた。愚かしい親切である。青鈍色あおにびの細長、落栗色おちくりとか何とかいって昔の女が珍重した色合いの袴はかま一具、紫が白けて見える霰地あられじの小袷こうちぎ、これをよい衣装箱に入れて、たいそうな包み方もして玉鬘たまかすらへ贈つて来た。手紙には、

「#ここから1字下げ」

ご存じになるはずもない私ですから、お恥ずかしいのですが、こうしたおめでたいことは傍観していられない気になりました。つまりない物ですが女房にでもお与えください。

「#ここで字下げ終わり」

とおおように書かれてあった。源氏はその来ているのを見て気まずく思つて例のよけいなことをする人だと顔が赤くなった。

「これは前代の遺物のような人ですよ。こんなみじめな人は引き込んだままにしているほうがいいのに、おりおりこうして恥をかきに來られるのだ」

と言つて、また、

「しかし返事はしておあげなさい。侮辱されたと思うでしょう。親王さんが御秘蔵になすつたお嬢さんだと思つと、軽蔑けいべつしてしまうことのできない、哀れな気のする人ですよ」

とも言うのであった。小袷の袖の所にいつも変わらぬ末摘花の歌が置いてあった。

「#ここから2字下げ」

わが身こそすらみられけれ唐からごろも君が袂たもとに馴なれずと思へば

「#ここで字下げ終わり」

字は昔もまずい人であつたが、小さく縮かんだものになって、紙へ強く押しつけるように書かれてあるのであつた。源氏は不快ではあつたが、また滑稽こっけいにも思われて破顔はげんしていた。

「どんな恰好かっこうをしてこの歌を詠よんだらう、昔の気力だけでもなくなつているのだから、大騒ぎだつたらう」

とおかしがっていた。

「この返事は忙しくても私がする」

と源氏は言つて、

「#ここから1字下げ」

不思議な、常人の思い寄らないようなことはやはりなさらないでもいいことだつたのですよ。

「#ここで字下げ終わり」

と反感を見せて書いた。また、

「#ここから2字下げ」

からごろもまた唐衣からぎからごろも返す返すも唐衣なる

「#ここで字下げ終わり」

と書いて、まじめ顔で、

「あの人が好きな言葉なのですから、こう作つたのです」

こんなことを言つて玉鬘たまごに見せた。姫君ひめぎみは派手はでに笑いながらも、

「お気の毒でございます。嘲弄ちやうぶつをなさるようになるではございませんか」

と困ったように言っていた。こんな戯れも源氏はするのである。

内大臣は重々しくふるまうのが好きで、装着こしゆの腰結こしゆい役を引き受けたにしても、定刻より早く出掛けるようなことをしないはずの人であるが、玉鬘たまむすのことを聞いた時から、一刻も早く逢いたいという父の愛が動いてとまらぬ気持ちから、今日は早く出て来た。行き届いた上にも行き届かせての祝い日の設けが六条院にできていた。よくよくの好意がなければこれほどまでにできるものではないと内大臣はありがたくも思いながらまた風変わりなことに出あっている気もした。夜の十時に式場へ案内されたのである。形式どおりの事のほかに、特にこの座敷における内大臣の席に華美な設けがされてあつて、数々の肴さかなの台が出た。燈火を普通の装着こしゆの式場などよりもいささか明るくしてあつて、父がめぐり合つて見る子の顔のわかる程度にさせてあるのであつた。よく見たいと大臣は思いながらも式場でのことで、単に装もの紐ひもを結んでやる以上のこともできないが、万感が胸に迫るふうであつた。源氏が、

「今日はまだ歴史を外部に知らせないこととございますから、普通の作法におとめください」と

と注意した。

「実際何とも申し上げようがありません」

杯の進められた時に、また内大臣は、

「無限の感謝を受けていたただかなければなりません。しかしながらまた今日までお知らせくださいませでした恨めしさがそれに添うのもやむをえないこととお許しください」

と言った。

「#ここから2字下げ」

うらめしや沖つ玉藻たまもをかづくまで磯隠いそれける海人あまの心よ

「#ここで字下げ終わり」

こう言う大臣に悲しいふうがあった。玉鬘たまかすらは父のこの歌に答えることが、式場のことであったし、晴れがましくてできないのを見て、

源氏は、

「#ここから1字下げ」

「寄辺よるべなみかかる渚なぎさにうち寄せて海人も尋ねぬ藻屑もくじとぞ見し

「#ここで字下げ終わり」

御無理なお恨みです」

代わってこう言った。

「もつともです」

と内大臣は苦笑するほかはなかった。こうして装着の式は終わったのである。親王がた以下の来賓も多かったから、求婚者たちも多く混じっているわけで、大臣が饗応きやうおうの席へ急に帰って来ないのはどういうわけかと疑問も起こしていた。内大臣の子息の頭中将かぶつちやうと弁べんの少将だけはもう真相を聞いていた。知らずに恋をしたことを思つて、恥じもしたし、また精神的恋愛にとどまったことは幸せしあわせであつたとも思つた。

弁は、

「求婚者になろうとして、もう一步を踏み出さなかったのだから自分はやかった」

と兄にささやいた。

「太政大臣はこんな趣味がおありになるのだろうか。中宮と同じようにお扱いになる気だろうか」

とまた一人が言ったりしていることも源氏には想像されなくもなかったが、内大臣に、

「当分はこのことを慎重にしていきたいと思います。世間の批難などの集まってこないようにしたいと思うのです。普通の人なら何でもないことでしょうが、あなたのほうでも私のほうでもいろいろに言い騒がれることは迷惑することですから、いつとなく事実として人が信じるようになるのがいいでしょう」

と言っていた。

「あなたの御意志に従います。こんなにまで御実子のように愛してくださいましたことも前生に深い因縁のあることだろうと思います」

腰結い役への贈り物、引き出物、纏頭てんとうに差等をつけて配られる品々にはきまつた式があることではあるが、それ以上に派手はでな物を源氏に出した。大宮の御病気が一時支障になっていた式でもあつたから、はなやかな音楽の遊びを行なうことはなかったのである。

兵部卿ひょうぶきやうの宮は、もう成年式も済んだ以上、何も結婚を延ばす理由はないとお言いになって、熱心に源氏の同意をお求めになるのであつたが、

「陛下から宮仕えにお召しになったのを、一度御辞退申し上げたあとで、また仰せがありますから、ともかくも尚侍なしいのかみを勤めさせること

にしまして、その上でまた結婚のことを考えたいと思います」

と源氏は挨拶あいさつをしていた。父の大臣はほのかに見た玉鬘たまかすらの顔を、なおもつとはつきり見ることができないであろうか、容貌かほづひの悪い娘であれば、あれほど大騒ぎをして源氏は大事がってはくれまいなどと思つて、まだ見なかつた日よりもいつそう恋しがつていた。今になつてはじめて夢占いの言葉が事実に合つたことも思われたのである。最愛の娘である女御にょじにだけ大臣は玉鬘のことをくわしく話したのであつた。

世間でしばらくこのことを風評させまいと両家の人々は注意していたのであるが、口さがないのは世間で、いつとなく評判にしてしまつたのを、例の蓮葉はすはな大臣の娘が聞いて、女御の居間に頭中将や少将などの来ている時に出て来て言つた。

「殿様はまたお嬢様を発見なすつたのですつてね。しあわせね、両方のお家うちで、大事がられるなんて。そして何ですつてね。その人もいいお母様から生まれたのではないのですつてね」

と露骨なことを言うのを、女御は片腹痛く思つて何とも言わない。中将が、

「大事がられる訳があるから大事がられるのでしよう。いったいあなたはだれから聞いてそんなことを不謹慎に言うのですか。おしゃべりな女房が聞いてしまふじゃありませんか」

と言つた。

「あなたは黙つていらつしやい。私は皆知つています。その人は尚なほ侍のかみになるのです。私が女御さんの所へ来ているのは、そんなふうに引き立てていただけたかと思つてですよ。普通の女房だつてしやしない用事までもして、私は働いています。女御さんは薄情です」

と令嬢は恨むのである。

「尚侍が欠員になれば僕たちがそれになりたいと思っっているのに。ひどいね、この人がなりたがるなんて」

と兄たちがからかって言うと、腹をたてて、

「りっぱな兄弟がたの中へ、つまらない妹などははいって来るものじゃない。中将さんは薄情です。よけいなことをして私を家へつれておいでになって、そして軽蔑ばかりなさるのだもの、平凡な人間ではごいっしょに混じっていられないお家だわ。たいへんなたいへんなりっぱな皆さんだから」

次第にあとへ身体を引いて、こちらをにらんでいるのが、子供らしくはあるが、意地悪そうに目じりがつり上がっているのである。

中将はこんなことを見ても自身の失敗が恥ずかしくてまじめに黙っていた。弁の少将が、

「そんなふうにあなたは論理を立てることが出来る人なのですから、女御さんも尊重なさるでしょうよ。心を静めてじつと念じていれば、岩だつて沫雪のようにすることもできるので、あなたの志望だつて実現できることもありますよ」

と微笑しながら言っていた。中将は、

「腹をたててあなたが天の岩戸の中へはいつてしまえばそれが最もいいですよ」

と言って立つて行つた。令嬢はほろほろと涙をこぼしながら泣いていた。

「あの方たちはあんなに薄情なことをお言いになるのですが、あなただけは私を愛してくださいますから、私はよく御用をしてあげます」

と言つて、小まめに下の童女さえしかねるような用にも走り歩いて、一所懸命に勤めては、

「尚侍に私を推薦してください」

と令嬢は女御を責めるのであつた。どんな気持ちでそればかりを望むのであろうと女御はあきれ何とも言うことができない。この話を内大臣が聞いて、おもしろそうに笑いながら、女御の所へ来ていた時に、

「どこにいるかね、近江の君、ちよつとこちらへ」

と呼んだ。

「はい」

高く返辞をして近江の君は出て来た。

「あなたはよく精勤するね、役人にいいだろうね。尚侍にあんたがなりたいたいということなぜ早く私に言わなかつたのかね」

大臣はまじめ顔に言うのである。近江の君は喜んだ。

「そう申し上げたかつたのでございますが、女御さんのほうから間接にお聞きくださるでしょうと御信頼しきつていたのですが、おなりになる人が別においでになることを承りまして、私は夢の中だけで金持ちになつていたという気がいたしましてね、胸の上に手を置いて吐息ばかりをつく状態でございました」

とても早口にべらべらと言う。大臣はふき出してしまいそうになるのをみずからおさえて、

「つまり遠慮深い癖が禍いしたのだね。私に言えばほかの希望者よりも先に、陛下へお願いしたのだつたがね。太政大臣の令嬢がどんなにりっぱな人であっても、私がぜひとお願いすれば勅許がないわけはなかつたらうに、惜しいことをしたね。しかし今からでもいい

から自己の推薦状を美辞麗句で書いて出せばいい。巧みな長歌などですれば陛下のお目にきつととまるだろう。人情味のある方だからね」

とからかっていた。親がすべきことではないが。

「和歌はどうやらこうやら作りますが、長い自身の推薦文のようなものは、お父様から書いてお出しくださいましたほうがと思います。二人でお願いする形になって、お父様のお蔭かげがこうむられます」

両手を擦り合わせながら近江の君は言っていた。几帳の後ろなどで聞いている女房は笑いたい時に笑われぬ苦しみをなめていた。我慢性のない人らは立って行ってしまった。女御も顔を赤くして醜いことだと思っているのであった。内大臣は、

「気分が悪い時には近江の君と逢あうのがよい。滑稽こっけいを見せて紛らせてくれる」

とこんなことを言って笑いぐさにしているのであるが、世間の人には内大臣が恥ずかしさをごまかす意味でそんな態度もとるのであると言っていた。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>)

で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には2002（平成14）年1月15日44版発行を使用しました。

入力：上田英代

校正：伊藤時也

2003年9月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

藤袴

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）尚侍ないしのかみ

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」むらさきのふぢばかまをば見よといふ

「#地から3字上げ」二人泣きたきこち覚えて（晶子）

ないしのかみ 尚侍になって御所へお勤めするようと、源氏はもとより実父の内大臣のほうからも勧めてくることで玉璽たまかすらは煩悶はんもんをしていた。それがいいことなのであろうか、養父のはずである源氏さえも絶対の信頼はできぬ男性の好色癖をややもすれば見せて自分に臨むのであるから、お仕えする君との間に、こちらは受動的にもせよ情人関係ができた時は、中宮なかみやも女御にょごも不快に思われるに違いない、そして自分は両家のどちらにも薄弱な根底しかない娘である。中宮や女御にお

ける後援は期して得られるものでない上に、自分の幸運げな外見を
うらやんで何か悪口をする機会がないかとうかがっている人を多く
持つていてはその時の苦しさが想像されると、若いといつてももう
少女でない玉鬘は思つて苦しんでいるのである。そうかといつて今
のまままで境遇を変えずにいることはいやなことではないが、源氏の
恋から離れて、世間の臆測おくそくしたことが真実でなかったと人に知らせ
る機会というものの得られないのは苦しい。実父も源氏の感情をは
ばかつて、親として乗り出して世話をしてくれるようなことはない
と見なければならぬ。曖昧あいまいな立場にいて自身は苦勞をし、人から
は嫉妬しつとをされなければならぬ自分であるらしいと玉鬘は歎なげかれる
のであつた。実父に引き合わせてからはもう源氏は道徳的にはばか
らねばならぬことから解放されたように、戯れかかることの多くな
つたことも玉鬘を憂鬱ゆううつにした。自分の心持ちをにおわしてだけでも
言うことのできる母というものを玉鬘は持つていなかつた。東の夫
人にせよ、南の夫人にせよ、娘らしく、また母らしくはして交わつ
てくれるが、どうしてもそんな貴婦人に内密の相談などが持ちかけら
れようと思つと、だれよりも哀れなのは自分の身の上であるような
気がして、夕方の空の身にしむ色を、縁に近い座敷からながめて物
思いをしているのであつたが、その様子はきわめて美しかつた。淡うす
鈍色にびの喪服を玉鬘は祖母の宮のために着ていた。そのために顔がい
つそうはなやかに引き立つて見えるのを、女房たちは楽しんでなが
めている所へ、源宰相の中将が、これも鈍色にびの今少し濃い目な直衣のうし
を着て、冠まきえいを巻纒まきえいにしているのが平生よりも艶えんに思われる姿で訪ね
て来た。最初のころから好意を表してくる人であつたから、玉鬘
のほうでも親しく取り扱つた習慣から、今になつても兄弟ではない

というような態度をとることはよろしくないと思って、御簾に几帳を添えただけの隔てで、話は取り次ぎなしでした。今日は源氏の用で来たのである。宮中からあつた仰せを源氏は子息によつて伝えさせたのである。おおようではあるが要領を得た返辞をする様子に、中將は貴女と話し合う快感が覚えられた。野分の朝にのぞいた顔の美しさの忘られないのを、その人は姉ではないかと恋しくなる心を賣めていた中將であつたが、そうした障りの除かれた今は恋人としてこの人を中將は考えていた。尚侍の職をお勤めさせになるだけで帝は御満足をあそばすまい、この世で第一の美貌をお持ちになる帝との間に恋愛関係は必ずできてくることであろうと思うと、中將は胸を何かでおさえつけられる気もするのであつたが自制していた。

「人に聞かせぬようにと父が申されましたことを申し上げようと思ひますが、よろしいのでしょうか」

と意味ありげに言っているのを聞いて、女房たちは少し離れた場所を捜して、几帳の後ろのほうなどへ皆行ってしまった。中將は源氏の言つたのでもない言葉を、真実らしくいろいと伝えていた。帝が尚侍にお召しになる御真意は別にあるらしいから、きれいに身を護ろうとすれば始終その心得がなくてはならないというような話である。返辞のできることもなくて、玉璽がただ吐息をついているのが美しく感ぜられた時に、中將の心にはおさえ切れないものが湧き上がってきた。

「私たちの喪服はこの月で脱ぐはずですが、曆で調べますと月末はいい日ありませんから延びるようになりますね。十三日に加茂の河原へ除服の御被にあなたがおいでになるように父は決めていられるようです。私もごいっしょに参ろうと思つています」

「ごいっしょでは目だつことになるでしょう。だれにもあまり知られないようにして行くほうがいいかと思えます」

と玉鬘は言っていた。内大臣の娘として大宮の喪に服したことなどは世間へ知らせぬようにせねばならぬと考えるとここにこの人の聡明そうめいと源氏への思いやりが現われていた。

「隠したくお思になることが私には恨めしい気もいたしますよ。悲しい祖母のかたみのような喪服ですから、私は脱いでしまうのも惜しく思われるのです。それにしましてもやはりあなたと私とは一人の方を祖母に持っているのですから不思議な気がいたしますね。喪服をお着になることがありませんでしたら、真実のことを私は知らずじまいになったのかもしれない」

「私などにはましてよくわかりませんが、とにかく喪服を着ております気持ちは身にしむものですね」

こう言う玉鬘の平生よりもしんみりとした調子が中将にうれしかった。この時と思ったのか、手に持っていた蘭ふじばかまのきれいな花を御簾すの下から中へ入れて、

「この花も今の私たちにふさわしい花ですから」

と言って、玉鬘が受け取るまで放さずにいたので、やむをえず手を出して取るうとする袖そでを中将は引いた。

「#ここから1字下げ」

「おなじ野の露にやつる藤袴ふじばかま哀れはかけよかことばかりも

「#ここで字下げ終わり」

道のはてなる（東路あじまちの道のはてなる常陸帯ひたちおびのかことばかりも逢は

んとぞ思ふ)」

こんなことが言いかけられたのであった。玉璽にとっては思いがけぬことに当惑を感じながらも、気づかないふうをして、少しずつ身を後ろへ引いて行った。

「#ここから1字下げ」

「たづぬるに遙^{はる}けき野^の辺^への露^のならばうす紫^はやかことならまし

「#ここで字下げ終わり」

従^{いとこ}姉^こということは事実だからいいでしょう。そのほかのことは何も

と言うと、中將は少し笑って、

「その事実のほかには考えてくださらなければならぬこともおわかりになるはずですがね。常識ではもつたいたないことだと思っているのですが、この感情はおさえられるものでないのですからお察しください。こんなことを告白してはかえってお憎みを受けることになろうと思って今までは黙っていたのですが、ただ哀れだと思っただけだけのことで満足したい心にもなっているのです。頭^{頭の}中將の近ごろの様子をご存じですか、あのころは明らかに第三者だと思っっていた私が、こんなに恋の苦しみを味わうようになるなどということとは冷淡にした時の報いです。今ではあの人冷静になってしかもつながる縁のあることに満足しているのですから、うらやましくありません。かわいそうだとだけでも私をお心にとめておいてください」

まだいろいろに言ったのであるが、中將のために筆者は遠慮して

おく。玉鬘たまかすらに気味悪く思うふうの見えるのを知って、

「私を信じてくださらないのですね。ばかな真似まねなどをする人間でないことはおわかりになっているはずですが」

こう中將は言った。この機会にもう少し告げたい感情もあるのであつたが、

「少し気分が悪くなってきましたから」

と言つて、玉鬘が向こうへはいつてしまつたのを見て、深く中將は歎息たんそくしながら去つた。

よけいな告白をしたと中將は後悔をしたのであつたが、この人の上に身に沁しんで恋しく思われた紫むらの女王にょおうと、せめてこれほどの接触が許されてほのかな声でも聞きうる機会をどんな時にとらえることができるであろうと、その困難さを思つて心を苦しめながら中將は南の町へ来た。源氏はすぐ出て来たので、中將は聞いて来た返事をした。

「御所へ上がるのを、やっとししぶ承諾した形なのだから困る。兵部卿ひしよの宮みやなどが求婚者で、深刻な情熱の盛られたお手紙が送られていて、そのほうへ心が惹ひかれるのではなからうかと思うと気の毒な気にもなる。しかし大原野の行幸の時にかみお上を拝見して、お美しいと思つた様子だったのだからね。若い女は一目でもお顔を拝見すれば宮仕えのできる者は皆出ないではいられまいと思つて、最初に私の計らつたことなのだが」

などと源氏は言う。

「それにしましてもあの方はどんなふうになられるのがいちばん適したことでしよう。御所には中宮ちゅうぐうが特殊な尊貴な存在でいらつしやいますし、また弘徽殿こうきでんの女御にょごという寵姫ちやうきもおありになるのですから、

どんなにお気に入りに入りましてもそのお二方並みにはなれないことでしょう。兵部卿の宮は熱烈に御結婚を望んでおいでになるのですから、表面は後宮の人ではありませんでも、尚侍などにお出しになることによつて、これまでの親密な御交情がそこなわれはしないかと私は思いますが」

中將は老成な口調で意見を述べた。

「むずかしいことだね。私だけの意志でどう決めることもできない人のことではないか。それなのに右大將なども私を恨みの標的にしているそうだ。一人の求婚者に同情して与えてしまえばほかの人は皆失恋することになるのだから、うかと縁談が決められないのだよ。あの人を生んだ母親が哀れな遺言をしておいたのでね、郊外である人が心細く暮らしているということを知り、内大臣も子と認めようとするとふうは見えないと悲観しているようだったから、最初の子として引き取ることにしたのだよ。私が大事がるのでやつと大臣も価値を認めてきたのだ」

源氏は真実らしくこう言っていた。

「人物は宮の夫人であることに最も適していると思う。近代的で、艶な容姿を持っていて、しかも聡明で、過失などはしそうでない女性だから、いい宮の夫人だと思う。そしてまた尚侍の適任者でもあるのだよ。美貌で、貴女らしい貴女で、職責も十分に果たしうるよ。うな人物というお上の御注文どおりなのはあの人だと思う」

とも言った。中將は源氏自身の胸中の秘事も探りたくなかった。

「今日まで実父に隠してお手もとへお置きになったことで、いろいろな付度を世間はしております。内大臣もそんな意味を含んだことを、右大將からあちらへの申し込みに答えて言ったそうです」

と中将が言うと、源氏は笑いながら、

「それは思いやりのありすぎる迷惑な話だね。宮仕えだって何だつて内大臣の意志を尊重して、私はできる世話だけをする気なのだね。女の三従の道は親に従うのがまず第一なのだからね。その美風を破るようなことはとんでもないことだ」

と言った。

「こちらには以前からりっぱな夫人がたがおいでになって、新しくその数へお入れになることができないため、世間体だけを官職におつけになることにして、やはりいつまでも愛人でお置きになることのできるようなお計らいは、賢明な処置だといって、大臣が喜ばれたということ、確かな人から私は聞きました」

中将が真正面からこう言うのを聞いて、源氏は内大臣としてはそれも想像するであろうと気の毒に思った。

「曲がった解釈をされているものだね。それが賢明な人の観察というものかもしれない。もうすぐに事実が万事を明らかにするだろう。しかし、どうなるにしても余りにひどい想像だ」

と源氏は笑っていた。あざやかな弁解をしたつもりであろうが、まだ疑いは十分に残してよいことであると中将は思っていた。源氏も心の中で、こう人の噂する筋書きどおりのあやまった道は踏むまいとみずから警めた。このきれいな気持ちを大臣にも徹底的に知らせたいと源氏は思ったが、玉鬘を官職につけておいて情人関係を永久に失うまいとすることなどを、どうして大臣に観測されたのであろうと薄気味悪くさえなった。

玉鬘は除服したが、翌月の九月は女の宮中へはいることに忌む月でもあったから、十月になってから出仕することに源氏が決めたの

を、お聞きになつて帝は待ち遠しく思召した。求婚者は皆尚侍に決定したことを聞いて残念がった。それまでに縁組みを決めて、御所へはいるのを阻止したいと皆あせつて、仲介者になつている女房たちを責めるのであるが、尚侍の出仕を阻止するようなことは、吉野の滝をふさぎ止めるよりもなお不可能なことであるとそれらの女たちは言つていた。源中将はしないでよい告白をしたことで感情を書しなかつたかと不安で、この苦しみを紛らわすために一所懸命に尚侍の出仕についての用などに奔走して好意を見せることにつとめていた。もうあれ以来軽率に感情を告げたりすることもなく慎んでいるのである。兄弟である内大臣の子息たちはまだ遠慮が多くて出入りをようしないのである。御所で尚侍の後援をするためにはもっと親しくなつておかないでは都合が悪いのにと、その人たちは不安に思つていた。頭の中将は恋の奴になつて幾通となく手紙を送つてきたようなこともなくなつたのを正直だといつて女房たちはおかしがつていたのであるが、父の大臣の使いになつて訪ねて来た。まだ公然に親であり娘であるという往来ははばかつて、そつと手紙を送つて、そつと返事を玉璽が出すほどにしかりしていないのであつたから、こうした月明の晩に隠れて頭の中将も訪ねて来たのである。以前はだれからも訪問者として取り扱おうとされなかつた中將が、今夜は南の縁側に座を設けて招ぜられた。玉璽は自身で出て話をするにはまだ恥ずかしくてできずに、返辞だけは宰相の君を取り次ぎにしていた。

「私が使いに選ばれて来ましたのは、お取り次ぎなしにお話を申すようにという父の考えだつたかと思ひますが、こんなふうな遠々しいお扱いでは、それを申し上げられない気がいたします。私はつま

らぬ者ですが、あなたとは離しようもなくつながつた縁のありますことで、自信に似たものができております」

と言つて、中將はもう一段親しくしたい様子を見せた。

「ごもつともでございます。長い間失礼しておりましたお詫びも直接申し上げたいのですが、身体からだが何ということなしに悪うございまして、起き上がりますのも大儀でできませんものですから、こうさせていただいてるのでございます。ただ今のようなお恨みを承りますのは、かえつて他人らしいことだと存じます」

まじめな挨拶あいさつを玉鬘たまむすはした。

「御気分が悪くてお寝やすみになつていらつしやる所の几帳きちょうの前へ通していただけませんか。しかし、よろしゅうございます、しいているんなお願いをするのも失礼ですから」

と言つて頭の中將は大臣の言葉を静かに伝えるのであつた。身の取りなしも様子も源中將に匹敵するもので、感じのいい人である。

「御所へおいでになることでは、くわしいお報しらせもまだいただいでいませんが、あなたからその際にはこうしてほしい、何が入り用であるとかいうことを言つてくださつたら、そのとおりにしたいと思つています。世間の目にたつことが遠慮されて訪ねて行くことたずもできず、思うことを直接お話しできないのを遺憾に思つています」

というのが父の大臣から玉鬘へ伝えさせた言葉であつた。

「私が過去に申し上げたことについては、それほど訂正しないでもいいと思います。どちらにもせよ愛していただけばいいのです。そう思いますとまた恨めしい気にもなります。今夜の御待遇などからそう思うのです。北側のお部屋へやへお入れになつて、いい女房がたは失礼だと思ひになるでしょうが、下仕え級の方とでも話して行く

ようなことがしたいのです。兄弟をこんなふうにお扱いになるようなことは、これも不思議なことといわなければなりませんよ」

批難するふうに言っているのもおかしくて、宰相の君に玉鬘は言わせた。

「人聞きが遠慮いたされまして、あまりにわかな変わり方は見せられないように思うものですから、お話し申し上げたい長い年月のことも、聞いていただけませんことで、私もお言葉のように残念でないのでございます」

ときまじめな挨拶あいさつをされ、頭の中將はきまりが悪くなって、この上のごことは言わないことにした。

「#ここから1字下げ」

「妹背山いもせ深き道をば尋ねずてをだえの橋にふみまどひける

「#ここで字下げ終わり」

そうでしたよ」

と真底から感じているふうで中將は言った。

「#ここから1字下げ」

「まどひける道をば知らず妹背山たどたどしくぞたれもふみ見し

「#ここで字下げ終わり」

と申されます」

と女主人の歌を伝えてからまた宰相は言う、

「どのことをお言いになりますことかそのころはおわかりにならな

かつたようでございます。ただあまり御おとなしくて御遠慮ばかりあそばすものですから、どなた様へもお返事をお出しになることがなかつたのでございます。これからは決してそうでもございませんでしょう」

もつともなことでもあつたから、

「ではまあよろしいことにしまして、ここで長居をしておりますもつまりません。誠意を認めていただくことに骨を折りましょう。これからは毎日精勤することにして」

と言つて中将は帰つて行くのであつた。月が明るく中天に上つていて、艶えんな深夜に上品な風采ふうさいの若い殿上人の歩いて行くことははなやかな見ものであつた。源中将ほどには美しくないが、これはこれでまたよく思われるのは、どうしてこうまでだれもすぐれた人ぞろいなのであると、若い女房たちは例のように、より誇張した言葉でほめたてていた。

大将はこの中将のいる右近衛つごんえのほうの長官であつたから、始終この人と呼んで玉鬘たまかづらとの縁組みについて熟談していた。内大臣へも希望を取り次いでもらつていたのである。人物もりっぱであつたし、将来の大臣として活躍する素地のある人であつたから、娘のために悪い配偶者ではないと大臣は認めていたが、源氏が尚侍なしのかみをばどうしようとするかには抗議の持ち出しようもなく、またそうすることに深い理由もあることであると思つていたから、すべて源氏に一任していると返辞をさせていた。この大将は東宮の母君である女御にょじとは兄弟であつた。源氏と内大臣に続いての大きい勢力があつた。

年は三十二である。夫人は紫の女王にょおみの姉君であつた。式部卿しきぶきやうの宮の長女である。年が三つか四つ上であることはたいして並みはずれな

夫婦ではないが、どうした理由でかその夫人をお婆様ばあさまと呼んで、大將は愛していなかった。どうかして別れたい、別に結婚がしたいと願っていた。そうした夫人の関係があるために、源氏は大將と玉鬘との縁談には賛成ができないのである。大將の家庭のためにもそう思ったことであり、玉鬘のためにも煩雑な関係を避けさせたかったのである。大將は好色な人ではないが、夢中になって玉鬘を得ようとしていた。内大臣も断然不賛成だといっているのでもないという情報を大將は得ていた。玉鬘自身は宮仕えに気が進んでいないということもまた身边にいる者からくわしく伝えられて大將は聞いていた。

「ではただ源氏の大臣だけが家庭の人になるのに反対していられるのだというわけではないか。実父がいいと思われる事どおりになすつたらいいじゃないか」

と大將は仲介者の女房の弁を責めていた。

九月になった。初霜が庭をほの白くした艶えんな朝に、また例のように女房たちが諸方から依頼された手紙を、恥じるようにしながら玉鬘すずらの居間へ持って来たのを、自分で読むことはせず、女房があけて読むのをだけ姫君は聞いていた。右大將のは、

「#ここから1字下げ」

恋する人の頼みにします八月もどうやら過ぎてしまいそんな空をながめて私は煩悶はんもんしております。

「#ここから2字下げ」

数ならばいとひもせまし長月に命をかくるほどぞはかなき

「#ここで字下げ終わり」

十月に玉鬘が御所へ出ることを知っている書き方である。兵部卿ひょうぶきょうの宮は、

「#ここから1字下げ」

不幸な運命を持つ、無力な私は今さら何を申し上げることもないのですが、

「#ここから2字下げ」

朝日さす光を見ても玉笹たまざさの葉分はわけの霜は消けたずもあらなん

「#ここから1字下げ」

私の恋する心を認めていてくださいましたら、せめてそれだけを慰めにしたいと思っています。

「#ここで字下げ終わり」

というのである。手紙の付けられてあったのは縮かんだようになつた下折れ笹に霜の積もつたのであって、来た使いの形もこの笹にふさわしい姿であった。式部卿しきぶきょうの宮の左兵衛督さひょうえのかみは南の夫人の弟である。六条院へは始終来ている人であったから、玉鬘の宮中入りのこともよく知っていて、相当に煩悶をしているのが文意に現われていた。

「#ここから2字下げ」

忘れなんと思ふも物の悲しきをいかさまにしていかにせんとせん

「#ここで字下げ終わり」

選んだ紙の色、書きよう、焚きしめた薫香の匂いもそれぞれ特色があつて、美しい感じ、はっきりとした感じ、奥ゆかしい感じをそれらの手紙から受け取ることができた。玉鬘が御所へ出るようになっていた。宮への御返事だけを、どういう気持ちになつていたのか、短くはあつたが玉鬘は書いた。

「#ここから2字下げ」

心もて日かげに向かふ葵だに朝置く露をおのれやは消つ

「#ここで字下げ終わり」

ほのかな字で書かれたこの歌に、同情を持つ心の言つてあるのを御覧になつて、一つの歌ではあるが宮は非常にうれしくお思いになつた。こんなふうに恨めしがる手紙はまだほかからも多く来た。求婚者を多数に持つ女の中の模範的の女だと源氏と内大臣は玉鬘を言つていたそうである。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>)

で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には2002（平成14）年1月15日44版発行を使用しました。

入力：上田英代

校正：伊藤時也

2003年9月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。